

開催のご挨拶

2015年、日本質的心理学会（JAQP）の第12回大会を宮城教育大学にて開催させていただくはこびとなりました。JAQPでは初の東北の地での開催、さらに教育系の単科大学での初の開催となります。

大会テーマは「ともに起こす」

「・共に ・智に ・朋に×・起こす ・興す ・熾す」
です。

2011・3・11の震災とその後の原発事故以来、東北に住む多くの人々は共に行動を起こし、智恵を出し合いながら復興を目指してきました。これまでの復興の歩みを一緒に振り返り、協働の在り方や、その道筋について更なる展望を得られる大会を目指します。

今大会では、これまでの大会よりも多い100以上のポスター発表、16の会員企画シンポジウムの申し込みがありました。また、講演として、本学会に発足当時から深くかかわられてきた無藤隆先生を講師としてお招きして、「日本における質的心理学の25年と実践的質的研究の今後」という演題でご登壇していただきます。

また、初の取り組みとして、社会教育学会との共同企画を開催することとなりました。さらに、例年同様に質的な研究技法のワークショップを多種開催します。朋に心に火を熾し、さらなる飛躍を目指す機会にしていきたいと思います。

仙台市は明治、大正のころから「杜の都」と呼ばれているように、大きな木々が街並みのいたるところにみられます。とくにケヤキの樹が多く、春には新緑を、夏には木陰を、そして秋には紅葉を見せてくれます。キャンパスのある青葉山は、独眼竜で有名な伊達政宗がその居城をかまえた由緒ある場所となります。牛タン、かまぼこ、牡蠣など美味しい食べ物と温泉などがある名所です。是非、杜の都・仙台をお楽しみください。

日本質的心理学会第12回大会
大会準備委員長

香曾我部琢

目次

開催のご挨拶	．．． 1
1.大会参加者へのご案内	．．． 3
2. 大会企画概要	．．． 5
3. 宮城教育大学キャンパス案内	．．． 7
4. 会場案内	．．． 8
5. 大会スケジュール 一覧表	．．． 9
6. 大会プログラム	．．． 11
7. 各企画の抄録	
(1)講演	．．． 15
(2)一般公開シンポジウム	．．． 16
(3)会員企画シンポジウム	．．． 21
(4)ワークショップ	．．． 56
(5)ポスター発表	．．． 58

1. 大会参加者へのご案内

大会テーマ 「ともにこす」

「・共に ・智に ・朋に×・起こす ・興す ・熾す」

第12回大会ホームページ：<http://ko-taku.wix.com/jaqp2015>

日本質的心理学会ホームページ：<http://> <http://www.jaqp.jp/>

大会日程：2015年10月3日（土）・10月4日（日）

会場：宮城教育大学 2・4・7号館

主催：日本質的心理学会

共催：宮城教育大学

受付 場所 2号館 1階ホール

10月3日（土） 9:00～17:30

10月4日（日） 8:30～17:00

※学会入会手続き、その他学会や大会に関するご質問等も受付の学会事務担当者が承ります。

※事前申し込みをされた方は、受付にて参加証（ネームカード）が交付されます。参加証を提示して、各教室に入室ください。

※当日参加の方は、下記の参加費を申し受けます。

【大会参加費】	当日参加	一般会員	¥6,000	学生・院生	¥5,000
		一般非会員	¥7,000		

*なお、学生の方は学生証の提示をお願い致します。聴講生・研究生は学生に含みます。

*大会期間中のお知らせや変更などは、受付の大会掲示板にてお知らせいたします。

*大会当日の開始時間前後には受付が混雑することが予想されます。時間にゆとりをもってお越しください ますよう、お願い申し上げます。

※大会本部および大会事務局

2号館 3階 232教室に、大会本部および大会事務局を設置します。また同時に、日本質的心理学会デスクを2号館1階ホール受付に設置して新規入会受付を行います。

総会 大会 2 日目の 12:10より、菰朋会館2階大集会室にて総会を行います。会員の方には、お弁当とお茶をお出しします。

なお、10月4日（日）は、大学のミニ・オープンキャンパスが2号館2階で開催されます。

クローク

大会期間中、2号館 1階の 233教室にクロークを設け、みなさまの荷物をお預かりいたします。ご利用の際には必ず係員より番号札をお受け取りください。なお、貴重品についてはお預かりできませんので、個人で管理いただきますようお願い致します。

【利用時間】 10 月 3日（土）9:00～17:15
10 月 4日（日）8:10～18:00

懇親会

大会1日目の 17:30より、正門左にあります『ぽっカフェ（生協食堂）』にて懇親会を開催いたします。東北の 新鮮な海の幸はもちろん、ご当地グルメ、地酒なども取りそろえておりますので、多くの方々と の交流の場になるよう、ぜひご参加ください。なお、当日参加の方は下記の参加費を申し受けます。

【懇親会参加費】（会員・非会員の区別はありません。）
当日参加 一般会員 ￥3,500 学生・院生 ￥3,000

昼食

大会 1 日目の昼食については、限定メニューにて 11:00～13:30 までのあいだ、ぽっカフェ（生協食堂）が利用できます。大会 2 日目の昼食については、総会出席者にぽっcafeで利用できる昼食券を配布します。なお、大学付近にはレストラン・食堂などはありません。

飲食・喫煙に関するご注意

2、4、7号館での飲食は可能ですが、なるべくゴミはお持ち帰りください。学内禁煙となっておりますので、ご協力のほど、よろしくお願い致します。

会員控え室

本大会では、2号館 1 階のリフレッシュルームにホットコーヒーなどの飲み物を提供する会員控え室をご用意しております（2号館1階）。また、併せて、書籍の展示・販売 会員控え室の 2号館 1階リフレッシュルームにて、大会期間中、書籍等の展示・販売を行います。ぜひお立ち寄り ください。

2. 大会企画概要

第 11 回大会では、講演、シンポジウム、講習会、ワークショップ、個人発表、ポストセミナーを下記の とおり企画しております。

【講演】 東北初開催となる本大会が、皆様にとって研究の再考の機会となることを祈念して、日本質的心理学会のこれまでとこれからについて無藤隆先生にご講演していただく「日本における質的心理学の25年と実践的質的研究の今後」を企画しております。

【シンポジウム】 本大会では、大会実行委員会企画シンポジウムをはじめとし、一般公開の日本保育学会との共同企画シンポジウム、各種委員会企画のシンポジウムや、会員企画シンポジウムを企画しております。それぞれのテーマ、時間、開催場所については、シンポジウム抄録をご確認ください。

*シンポジウムの各部屋には、マイク、ディスプレイ、PC 入力端子が設置されています。パソコンを利用される場合は、各企画者が持参してください。小規模の教室にはマイクはありません。

【ワークショップ】 本大会の試みとして、関心を持った会員がその場で参加できるワークショップを導入します。土屋雅子氏 による「Thematic Analysis 入門」と、石川良子氏による「調査の方法と倫理を問い直す―調査現場での経験の語り合いに根ざして―」の2本を企画しておりますので、詳しい案内は、当日会場にて説明を受けて参加してください。

【ポストセミナー】 研究交流委員会の主催するポストセミナーを、10月2日（金）2号館2階227教室にて行います。このセミナーは予約参加になっております。
お問い合わせ・申込み： 1002seminar__gmail.com（「__」を@に変換してください）

【個人発表（ポスター）】 ポスターによる個人の研究発表は、大会1日目は 13:15～14:45、2日目は 8:40～10:10までのあいだ、2号館と4号館の3階にて行います。一部屋に20～30本のポスターを掲示する予定です。

発表者は、この抄録集に掲載されているポスター掲示番号の対応表を参照して、自分の発表の割り当てられた部屋において、ご自分のポスターの前で指定された時間内は必ず対応してください。ポスターはその後も審査が続きますので、そのまま1日目は17:00まで、2日目は12:00まで貼っておいてください。もし取りに来られない場合は、こちらで破棄させていただきます。

*優秀ポスター賞は、理事の方と実行委員会の投票によって選出されます。その後、1日目は17時頃、2日目は15時頃にポスター賞を2号館1階受付前の掲示板に掲示して発表します。

パネルサイズ 一発表につきご使用いただくパネルサイズは、横90cm×縦180cm となっております。（A0 サイズ 84.1×118.9cm が入る大きさです）。このパネルの範囲をご自由にお使いください。なおポスターは、1日目は12:30～13:00、または2日目 8:10～8:40 のあいだ、発表者ご自身でポスターの画鋏留め、もしくはテープ留め作業を行ってください。留め具は会場にて用意いたします。

【各費用の振込先】

本大会では、郵便局の振替口座のみの対応となります。
郵便局にあります白地に青字の振替票を使ってお振込ください。

口座記号番号 02210-6-119462

口座名称 日本質的心理学会第12回大会実行委員会（ニホンシツテキシンリガツカイダイジュウニカイトイカイ）

山形銅町郵便局

【お問い合わせ先】

日本質的心理学会第12回大会準備委員会事務局

宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉149番地

宮城教育大学 香曾我部琢研究室

Email:jaqp2015@gmail.com

【大学までのアクセス】



仙台駅西口バスプール【9番】乗り場から

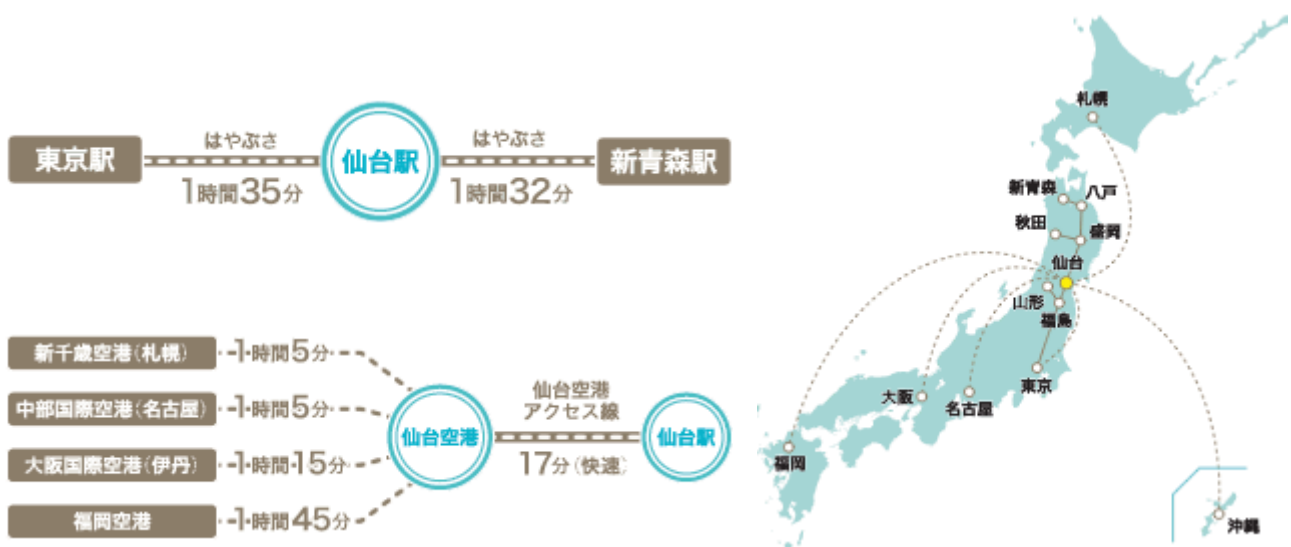
「715 宮教大」「710 宮教大・青葉台」「713 宮教大・成田山」行き乗車
「宮教大前」下車(所要時間約20分)

「719 工学部経由 動物公園循環」情報科学研究科前下車、徒歩10分

「750 工学部経由 緑が丘三丁目」情報科学研究科前下車、徒歩10分

「757 工学部経由 西の平・長町南駅」情報科学研究科前下車、徒歩10分

※全て9番乗り場から



3. キャンパス案内

- ⑧ 2号館 主に大会会場は左記の3つの会場で行います。受付2号館入口となります。
- ⑩ 4号館
- ⑬ 7号館
- ⑳ ぽっカフェ（学生生協）



5. 会場案内

2号館3階



2号館2階



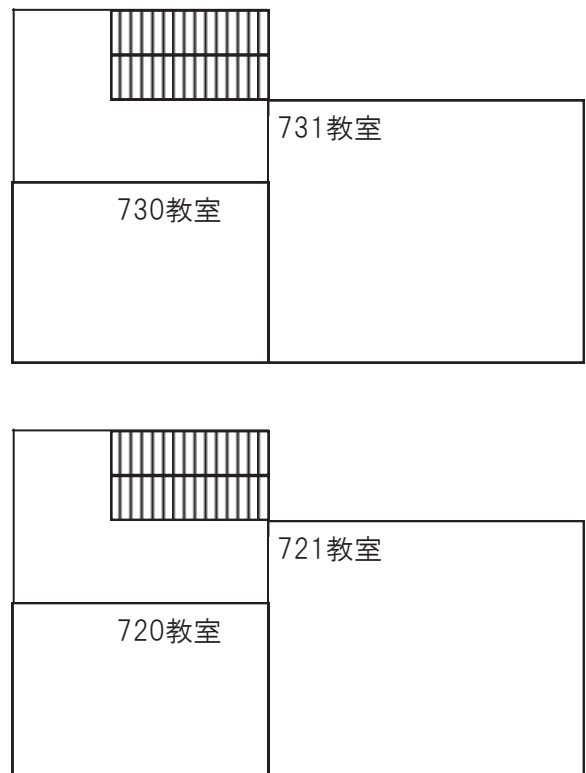
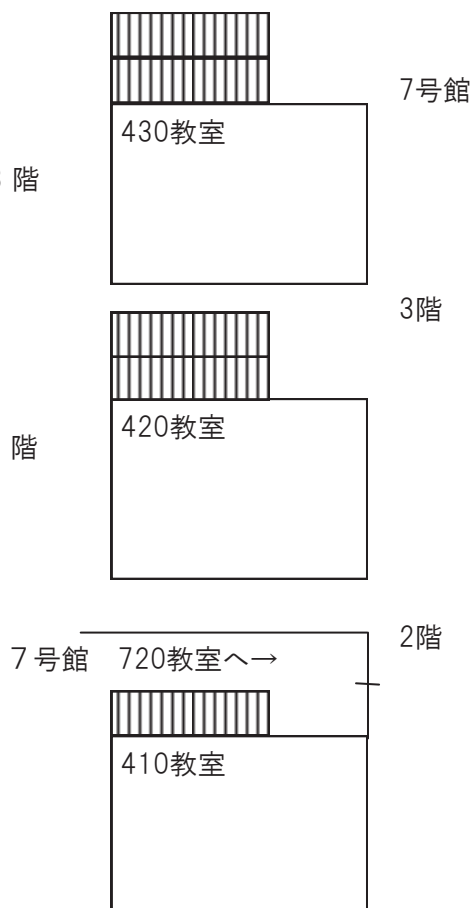
4号館

←2号館3階

2階

←2号館2階

1階



5. 大会スケジュール一覧表

10月3日（土） 受付開始 9：30から

時刻

9:00

9:30 受付開始 2号館入口 実行委員室・クロー 232/233 理事・役員室 721

10:00 一般公開 シンポジウム 会員企画 シンポジウム 会員企画 シンポジウム 質的研究法 ワークショップ

10:30 質的研究は保育 実践にどのように 寄与できるのか 質的研究方法を 基礎とした思考技 術プログラム開発 の試み 家族の語りを支援 する Nvivo10のワーク ショップ

11:00 中坪史典 豊田 香 河原智江 木村裕三

11:30 420 221 227 229

12:00 昼食 ※食堂が開いております。

12:30

13:00 ポスター準備開始

13:15 ポスター発表1

14:00 231/430

14:45

15:00 一般公開 シンポジウム 会員企画 シンポジウム 会員企画F シンポジウム 会員企画 シンポジウム 会員企画 シンポジウム 研究交流 シンポジウム 質的研究法 ワークショップ

15:30 「3.11後の福島」と はどのような世界 か？ 談話分析に何がで きるか 『レジリエンス』は私 たち(＝質的研究 者)に何をもたらす のだろうか？ ケア労働者のよそ おいによる専門性 の表出と感情労働 活躍するグローバ ル人材の大学での 経験の探求 被災者の語りと復 興 TEAアプローチ

16:00 滝口克典 岡田悠佑 松嶋秀明 木戸彩恵 岸磨貴子 日高友郎 サトウタツヤ

16:30 420 221 226 227 236 230 229

17:00

17:30 懇親会

18:00

18:30 ぽっカフェ

19:00 (学生協)

19:30

10月4日（日） 受付開始 8：10から

時刻							
8:10	受付開始		2号館入口				
8:40	ポスター発表2				会員企画 シンポジウム 対話的自己理論 の展開と応用 安田裕子		
10:10	231/430				236		
10:20							
	記念講演 一般公開 日本における質的心理学の25年と 実践的質的研究の今後 講師：無藤 隆先生						
11:50	220						
12:00							
	総会 菰朋会館2階 大会議室						
13:00							
13:30	一般公開 シンポジウム	会員企画 シンポジウム	会員企画 シンポジウム	会員企画 シンポジウム	会員企画 シンポジウム	会員企画 シンポジウム	質的研究法 ワークショップ
14:00	災害による傷跡 とレジリエンス	ゆるやかなネッ トワークをどう とらえるか	生活世界と雰囲気	ケアと「物語」	文化化される身 体、身体化され る文化	精神医学と現象学 的精神心理学から死と 他者の形而上学へ	エピソード記述 への招待
14:30							
15:00	川島大輔	青山征彦	木下寛子	東村知子	町田奈緒子	小島康次	勝浦真仁
	420	730	231	731	230	236	720
15:30							
15:45	委員会企画	社会教育学会	会員企画	会員企画	会員企画	会員企画	質的研究法
16:00	シンポジウム	共同シンポジウム	シンポジウム	シンポジウム	シンポジウム	シンポジウム	ワークショップ
	「境界のデザイ ン」と質的研究	コミュニティを 紡ぐ学習をどう 捉えるのか？	身体知としての 「参与しつつの観 察」の基礎研究	ビジュアル・ナラ ティブの方法論と 多様なこころみ	実践における 「ま」の可能性	語り直しの心理 学	自己エスノグラ フィ入門
	岡部大介	松本 大	南博文	やまだようこ	宮本匠	能智正博	沖潮満里子
	730	420	231	236	731	230	720
17:45	クロークは18:00までになります。						

6. 大会プログラム

第1日目 10月3日（土）

9:30 — 受付開始

10:30 — 11:00

■ワークショップ

Nvivo10のワークショップ 講師；木村裕三（富山大学医学部英語講座教授）

■一般公開 シンポジウム I

「質的研究は保育実践にどのように寄与できるのか —その応答可能性を探る—」

企画：中坪史典（広島大学）

■会員企画シンポジウム

「質的研究方法を基礎とした思考技術プログラム開発の試み

：過去・現在・未来の扱い方を考える」 豊田 香（東京学芸大学大学院）

「家族の語りを支援する」

河原智江（ケア研究会）

13:15 — 14:45

■ポスター発表

15:00 — 17:00

■ワークショップ

TEAアプローチ 講師：サトウタツヤ（立命館大学）

■一般公開シンポジウム

「3.11後の福島」とはどのような世界か？

現地で生活・活動する研究者や支援者は

どのような課題に取り組んできた／いるのか

企画：滝口克典（ぷらっとほーむ）

■委員会企画シンポジウム

研究交流

「被災者の語りと復興—医学と心理学の視点から」日高友郎（福島県立医科大学）

質心研編集委員会

「『レジリエンス』は私たち（＝質的研究者）に何をもたらすのだろうか？」

松嶋秀明（滋賀県立大学）

■会員企画シンポジウム

「談話分析に何ができるか

：社会・制度改革の提言へ向けた相互行為の応用談話分析」岡田悠佑（大阪大学）

「ケア労働者のよそおいによる専門性の表出と感情労働」木戸彩恵（立命館大学）

「活躍するグローバル人材の大学での経験の探求」岸磨貴子（明治大学）

第2日目 10月4日(日)

8:10 — 受付開始

8:40 — 10:10

■ポスター発表

■会員企画シンポジウム

「対話的自己理論の展開と応用

：共生社会に生きる私とあなたへの接近」安田裕子（立命館大学）

10:20 — 11:50

■記念講演

「日本における質的心理学の25年と実践的質的研究の今後」

講師：無藤 隆（白梅学園大学子ども学部 教授）

12:00 — 13:00

■総会

13:30 — 15:30

■ワークショップ

心に響いた体験は、いかに伝えうるのか —エピソード記述への招待—

勝浦真仁（桜花学園大学）・藤井真樹（名古屋学芸大学）

■一般公開シンポジウム

「災害による傷跡とレジリエンス—東北における、あるいは東北についての対話」

企画：川島大輔（中京大学）

■会員企画シンポジウム

「ゆるやかなネットワークをどうとらえるか

：コスプレ、アイドルファン、社会運動から考える」青山征彦（駿河台大学）

「生活世界と雰囲気：農と食と心理学4」木下寛子（九州大学）

「ケアと「物語」—ケア関係に変容をもたらす物語の生成と可能性」

東村知子（奈良学園大学奈良文化女子短期大学部）

「文化化される身体、身体化される文化」町田 奈緒子（京都大学大学院）

「精神医学と現象学的心理学から死と他者の形而上学へ」小島康次（北海学園大学）

17:30 — 19:30 ■懇親会 萩朋会館1階 ぽっかふえ

15:45 – 17:45

■ワークショップ

自己エスノグラフィ入門

講師：沖潮（原田）満里子（湘北短期大学）

■一般公開シンポジウム 社会教育学会共同企画

「コミュニティを紡ぐ学習をどう捉えるのか？

：日本社会教育学会プロジェクト研究

『社会教育研究における方法論の検討』から」

企画：松本 大（弘前大学）

■委員会企画シンポジウム

「『質的心理学フォーラム』編集委員会企画

：「境界のデザイン」と質的研究」

岡部大介（東京都市大学）・中塚朋子（就実大学）

■会員企画シンポジウム

「ビジュアル・ナラティヴの方法論と多様なこころみ」

やまだようこ（北海学園大学）

「語り直しの心理学—その様相と機能の探求—」 能智正博（東京大学）

「身体知としての「参与しつつの観察」の基礎研究

：初期過程における深化の目印（指標）」南 博文（九州大学）

「質的心理学研究・実践における「ま」の可能性」 宮本 匠（兵庫県立大学）

7. 抄録集

【 講演 】

「日本における質的心理学の25年と実践的質的研究の今後」

講師 無藤 隆 先生



現在、白梅学園大学子ども学部教授。現在、幼児教育の研究とともに、日本の幼児教育の制度改革に取り組んでいる。元・日本質的心理学会会長、また元・日本発達心理学会会長。

幼児期を中心に様々な発達心理学また幼児教育の研究を行ってきた。日本において、幼児教育や小学校教育の場面の特にビデオを用いた質的また量的な分析手法の開拓を行った。この10年ほどは幼児教育のカリキュラムのための基礎研究を行い、また質的研究方法を活用して、幼児教育の実践科学としての確立を目指している。手法としては、量的な方法と質的な方法を各種織り交ぜて行う。

代表的な研究著作として「協同するからだことば」（金子書房、1997）があるが、それはエピソードを元に質的な分析を行っている。「質的心理学講座、第1巻（東京大学出版会、2008）では、「再詳述法」と名付け、エピソード記録（およびその際の映像資料など）を読者と共有し、その詳細な分析を記録と付き合わせつつ行う手法を提案した。幼児教育の理論についても検討を進め、「幼児教育のデザイン」（東京大学出版会、2013）などを発表している。

【第12回大会実行委員企画 一般公開シンポジウム】

「質的研究は保育実践にどのように寄与できるのか ーその応答可能性を探るー」

企画・司会 中坪 史典（広島大学）
話題提供： 大槻尚美（宮城教育大学附属幼稚園）
宮内 洋（高崎健康福祉大学）
指定討論： 能智 正博（東京大学）

今日、多くの保育・幼児教育研究者が実践のフィールドに赴き、観察やインタビューなどの手法を用いた研究を行い、その成果を学会・論文・著書などの形で発表している。同分野における質的研究は百花繚乱の様相を呈しており、市民権を得たと言っても過言ではないだろう。

質的研究と一口に言っても、そのスタンスや方法論は多様である。例えば、研究者にとって異文化としての保育現場を対象に、ローカルな事象の記述を通して、アクチュアルな保育の現実や自明視された保育文化の慣習を描き出す研究者もいるだろう。他方、実践者とは異なる立場や役割を担いながらも、保育現場の人々と協働で実践を考え、その過程の中で自らの研究を紡ぎ出す研究者もいる。しかしながら、いずれの質的研究者においても、保育実践という社会・文化的文脈の中で個別・具体的な現象の理解に基づく知見を得ようとする点は共通する。

こうした質的研究者の存在や質的研究の成果は、保育実践にどのように寄与することができるのだろうか。保育者に対してどのような応答可能性を有しているのだろうか。文化人類学の分野では今日、フィールドの人々に対する研究者（文化人類学者）の応答可能性をめぐる様々な議論や課題の析出が行われている。こうした動向をヒントに、本シンポジウムでは、質的研究の保育実践への応答可能性を検討することで、研究と実践の関係の深化を企図することを目指す。

【第12回大会実行委員企画 一般公開シンポジウム】

「3.11後の福島」とはどのような世界か？

—現地で生活・活動する研究者や支援者は

どのような課題に取り組んできた／いるのか—

企画・司会： 滝口 克典（ぷらっとほーむ）

話題提供者： 高木 竜輔（いわき明星大学）

話題提供者： 鈴木 綾（NPO法人ビーンズふくしま）

福島第一原発の事故がおこってから4年半。穴のあいた原子炉から放射性物質が外界に放出され、数多くの人びとが汚染された故郷をおわれ「避難者」となりました。今もなお事故が完全に収束したとはいえ、彼（女）らは、避難先から故郷に帰還すること、あるいは避難先にそのまま定着することのどちらにも決めがたい宙吊り状態のまま、困難な日々をおくり続けています。

そうした「3.11後の福島」では、そこに暮らす人びとの間でさまざまな分断（線）が生まれ／うみ出され、外からはなかなかわかりづらい生きづらさや苦しさのひとつの核となっているようです。この分断線は、政府が設定した〈避難者〉のいくつかカテゴリーの区分線に沿って引かれることもあれば、人びとそれぞれが故郷の土地や自らの生業、放射能といった事柄に対して採用するかまえの差異に沿って引かれることもあり、ときにそれは家族や親族、地域といった人びとのまとまりを引き裂くものになっているようです。しかもその線は、それがどこを走っているのか外からは見ることができず、まるで地雷原にいるかのようだ、とも語られています。

こうしたなか、福島の人びとの困難に対して、研究者や支援者にできることは何なのか。この問題を考えていくため、当企画では、実際に「3.11後の福島」という場所に自らも当事者として身を置きながら研究活動や支援活動に取り組んできた方々をゲストに招き、彼らがこれまでどのような現実遭遇し、それをどのように把握し、どんなやりかたで対処してきたのか（あるいは、しそこねてきたのか）、といったことを率直に話題として提供いただき、それらをもとに、議論を深めていきます。

話題提供者の1人・高木竜輔氏は、いわき市内の大学に勤務しながら、震災後は、避難地域を対象とした調査研究や支援活動、いわきでの避難者受け入れ状況の調査などに取り組んできた社会学者です。シンポジウムでは、富岡町からの避難者たちが当事者グループをつくり、研究者の支援を受けて行ったタウンミーティングの実践などの事例を中心に、話題提供いただきます。

また、もう1人の話題提供者・鈴木綾氏は、郡山市・福島市に拠点を置いて子ども・若者支援に取り組んできたNPOに運営者として関わりながら、震災後は、行政と連携しながら支援体制の構築に尽力してきた活動家です。シンポジウムでは、ボランティアの若者が参入・活動しやすい環境づくりや支援者のバーンアウトを予防するしくみづくりなどの実践事例をもとに、話題提供をいただきます。

それぞれの活動事例をもとに、現在福島では何がおこっているのか、そして今後何が課題となっていくと考えられるか、またそれらに研究者と支援者とが協働で対峙していくことは可能か、可能であるとすればそれはどのようなことか、といったことをじっくり議論し、ていねいに掘り下げていきます。

県外で暮らしてはなかなか知ることのできない福島の現状についての理解を深めたり、支援活動のための知見の集積・可視化のための場をつくったり、といったことの機会に、ぜひお気軽にご参加ください。

（文責：滝口克典）

【第12回大会実行委員企画 一般公開シンポジウム】

「災害による傷跡とレジリエンス

—東北における、あるいは東北についての対話—

企画・司会： 川島大輔（中京大学）
 沖潮（原田）満里子（湘北短期大学）
話題提供： 谷山洋三（東北大学）
 李 勇昕（京都大学）
 川野健治（国立精神・神経医療研究センター）
指定討論： 松嶋秀明（滋賀県立大学）

東日本大震災から4年が経過したものの、被災地で暮らす人々は今なお多くの困難を強いられている。（東北に限らず）被災経験についてどのように向き合い、そこからの人生を生きていくことができるのか。

この問題について語るとき、語り手の立場や状況、価値観等によってその内容は大きく異なる。そして様々な声が混交することで、そこから生じるディスコミュニケーションが著しい葛藤や困難を産み出すこともある。他方で、唯一の声というものもまた幻想であり、多くの不協和を抱えながらも、「ともに歩んでいく」ための語り方というものもあるかもしれない。

また、近年広く知れ渡りつつあるレジリエンスという概念もこの問題には欠かせないだろう。本シンポジウムでは、被災地における研究を実践する話者を招いて、この問題についての対話を行いたい。そして語られた内容や語り方、あるいは研究者自身の向き合い方などについての多声性、そしてそこからのレジリエンスについて考えたい。

【第12回大会実行委員企画 一般公開シンポジウム】

コミュニティを紡ぐ学習をどう捉えるのか？

日本社会教育学会プロジェクト研究

「社会教育研究における方法論の検討」から

企 画：日本社会教育学会プロジェクト研究
「社会教育研究における方法論の検討」

司 会：松本 大（弘前大学）

話題提供者：松本 大（弘前大学）

話題提供者：荻野 亮吾（東京大学）

話題提供者：藤田 美佳（奈良教育大学）

話題提供者：相良 好美（東京大学大学院）

＜企画主旨＞

日本社会教育学会では2012年からプロジェクト研究「社会教育研究における方法論の検討」を実施してきた。本シンポジウムは、このプロジェクトメンバーによるものである。

社会教育とは、「学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動」（社会教育法第2条）として定義されるが、学校教育以外における人びとの意図的・組織的なノンフォーマルな学習であり、さらにはそうした意図的・組織的な学習の基盤にある無意図的・非組織的なインフォーマルな学習である。具体的には、公民館などの社会教育施設や青年団などの地縁的な社会教育関係団体、あるいは多様な市民活動や地域づくりの実践における人びとの主体的で共同的な学習が研究対象とされてきた。

とりわけ実践的にも研究的にも重視されてきたのは、このような生活に根づいた人びとの学習が、個人をとりまく関係性やコミュニティに影響を与え、やがて個人やコミュニティをエンパワーしていくというダイナミズムである。社会教育研究とは、こうした生活に根ざした人びとの実践の豊かさをどのように豊かに研究するのかに焦点をあててきたといえる。

この動的な過程を研究するために、研究方法としては大きく次のことが課題とされてきた。1つには研究者の役割や立場性である。社会教育の研究者は、現場に深くコミットし、実践の発展に大きな役割と責任をもつということが強調されてきた。アクション・リサーチであることが規範的な側面をもっていたといってよいだろう。しかし一方で、自明視されてきた反面、必ずしもその方法論が言語化されてきたわけではなかった。多くの研究者が現場との関係の持ち方について悩み、試行錯誤しながら切り拓いてきているという現状がある。もう1つは、実践や学習をどのように把握するのかということである。生活課題に関する人びとのノンフォーマル・インフォーマルな学習が生じるとき、単にその現場を把握するにとどまらず、その現場の質的な変化をどのように分析することが可能なのかといった課題に直面してきた。

私たちはこの2点について、日本質的心理学会と学びあう土壌と意義があるのではないかと考える。社会教育は「社会をつくる教育」と表現することもできる。学習をとおして関係性やコミュニティが紡がれ、個人やコミュニティがエンパワーしていく現場を研究するうえでの課題について議論したい。

社会教育実践に関する質的研究の課題

松本 大（弘前大学）

<発表要旨>

日本社会教育学会プロジェクト研究「社会教育研究における方法論の検討」の議論の概要を紹介しながら、社会教育がもつ実践のダイナミズムを研究する際の課題を提起する。

社会教育を通じたコミュニティの構築過程

長野県飯田市における分館活動の事例研究から

荻野 亮吾（東京大学）

<発表要旨>

長野県飯田市では、行政が設置・運営する公民館の活動に加えて、住民が自発的に参加する各地区での分館活動によってコミュニティが維持されてきた。従来の研究では、公民館活動と分館活動とのつながりが重視されてきたが、分館役員へのインタビューから、地縁団体への重層的な所属が住民の地域活動の入り口となり、分館役員への経路の1つとなっていることが明らかとなった。この一方で、各地域における地縁団体の「重層性」の高さは、社会的ネットワークの凝集性を生み、住民の地域活動への参加を阻害する要因ともなっている。本報告では、以上のような分館活動を媒介にしたコミュニティの構築過程を、構造的・認知的側面から描くことにしたい。

「生活者としての外国人」と共につくる多文化社会

秋田県「のしろ日本語学習会」の取り組みを通じて考える社会教育の役割

藤田 美佳（奈良教育大学）

<発表要旨>

秋田県能代市のボランティア団体「のしろ日本語学習会」は、四半世紀にわたり公民館を会場とした日本語教室を運営してきた。在住外国人の日本語習得や社会参加を支える取り組みを通じて、参加者（外国人・日本人）のキャリア形成はもちろん、結婚移住女性と家族の関係性の変容、地域住民の寛容性の涵養、地方自治体における外国人の社会的包摂を促してきた。本発表では約20年のアクション・リサーチを踏まえ、外国人支援組織自体の変遷にも言及しつつ、実践的研究者の機能と立場性について省察的に分析する。その上で、多文化社会の醸成につながる社会教育の役割について仮説的に提示したい。

ニューカマー青年の自己形成と学習機会

複線経路等至性アプローチ／ライフヒストリーグラフの分析から

相良 好美（東京大学大学院）

<発表要旨>

幼少期に文化間移動を経験したニューカマーの子どもたちは、言語・文化面の「獲得」と「喪失」の経験を繰り返しながら自己を確立させていく。本発表では、日本在住のニューカマー青年を対象に、複線経路等至性アプローチ（TEA）および、ライフヒストリーグラフを用いてニューカマー青年が歩んできた人生の径路を描くとともに、その径路に立ちあらわれるさまざまな選択を阻害・促進する要因について事例から考察する。それらを踏まえ、「生きられた人生」を質的に検討した結果をどのように教育実践へとつなげ・還元していくことができるのか、社会教育学視点から仮説的に検討したい。

精神医学と現象学的心理学から死と他者の形而上学へ

企 画：小島康次（北海学園大学）・渡辺恒夫（東邦大学）
司 会：小島康次（北海学園大学）
話題提供者：渡辺恒夫（東邦大学）
話題提供者：新山喜嗣（秋田大学）
指定討論者：三浦俊彦（東京大学）

<企画主旨>

本学会でも臨床死生学が時々話題に上るが、本人の一人称的死生観を確立する必要があるのではない、科学的唯物論か伝統的宗教的二元論以外に、より洗練された形而上学的な死生観があるのではない、という問題提起をしたい。企画者二人は、関係論的枠組みでは捉えきれない絶対的な自我の自覚としての《私》研究の可能性を模索してきたが、今年は、《私》を自覚させる臨症例から出発し、一人称的な死と他者の関係を、分析哲学における形而上学の復興とされる可能世界論によって論じている、精神医学の新山を迎え、《死》と《私》そして《他者》の関係に切り込みたい。企画者の一人渡辺も、自我体験・独我論的体験事例の質的現象学的分析を通じ、《私》と《他者》そして《死》の関係について着想を得ているので、これと併せて論じたい。指定討論者には、可能世界論の専門家でもあり渡辺と共に人文死生学研究会を主宰している、分析哲学者の三浦を配した。三浦は、著書『可能世界の哲学―「存在」と「自己」を考える』（NHKブックス）において可能世界論をわかり易く論じた練達をもって、二人の話題提供者による《私》が存在することの不思議さを解きほぐしてくれるものと期待される。

自我体験の現象学からフッサール他者論をへて可能世界論へ

渡辺 恒夫（東邦大学）

<発表要旨>

一人称の死と他者とは経験を超える形而上学の領域であるが、あくまでフッサール心理学に忠実に、経験的事例研究から接近する。

「6歳か7歳くらいの頃、ある晴れた日の正午ちょっと前、二階の部屋にいて、窓からさしこむ日差しをぼーっと見ている時に、“私はどうして私なんだろう、私はどうしてここにいるんだろう”と思った。」

これは20歳女子学生報告の自我体験事例である。児童期に起こる深い自己の自覚としての自我体験は、近く欧州での調査も紹介される予定であるが（『ヨーロッパの子どもの《自己》との出会い』仮題、コーンスタム著、渡辺恒夫・高石恭子訳、金子書房）、私はこれを自生的な現象学的還元である《発達性エポケー》として位置づけている。自我体験事例にはこの例のように、《ここ》の語が頻発する。これはフッサールが、自我の深い直観を「絶対のここ」と特徴づけているのに対応する。対するに他者は《そこ》として直観される。が、他者を自己と等根源的（対等）に理解するならば、他者もまた「絶対のここ」にいないといけない。けれど「絶対のここ」が複数同時存在するならば、もはや「絶対の」ここではない。フッサール他者論はここでパラドクスに行き着く。だからフッサールはダメだというのが大方の見方らしい。

しかしフッサール自身が「他我とは自我の時間化である」という言葉によって、パラドクス克服への途を示している。他者が絶対のここを占めるのは、私が絶対のここを占めるのとは異なる時間においてだということである。それは何時の事かということ、私の出生前か死後しかあるまい

い。フッサール他者論はここで、ある種の東洋的死生観（輪廻転生）に接近する（拙著『フッサール心理学宣言』講談社）。

可能世界論を用いてこの論理を明確化しよう。私が他者Xを私と等根源的に（対等者として）認めるとは、私がXとして生きる世界の存在を認めるということである。ところが私はXではなく渡辺某なので、私がXとして生きる世界は可能世界というに留まる。が、他我は自我の時間化であるというフッサールの言を字義通りに解すれば、この可能世界は私が渡辺某である現実世界の出現以前か消滅以後に現実化した・するだろう・ことになる。Xが私の同時代的他者であっても、主観的今相互の同時性が検証不可能な以上、Xの世界と渡辺某の世界を前後関係でつなげることに不都合はない。

ソシアの錯覚から開始する他者論の試みー可能世界にいる自己の変異体、そして、不完全な非在としての死

新山 喜嗣（秋田大学）

＜発表要旨＞

精神科臨床で遭遇する症候群の中に、自分の身近にいる特定の他者が偽物に入れ替わったと訴える、ソシアの錯覚の名で呼ばれる症候群がある。この症候群を呈した患者は、相手の外見、性格、役割といった人物がもつ全ての属性の変化を認めないまま、それにもかかわらず、その人物の同一性を否認する。このことから、ソシアの錯覚で本物から偽物になるときに入れ替わる当のものは、人物に付帯する属性のどれかではなく、それら属性を担う個体原理としての「このものの性」であると思われる。ところで、ソシアの錯覚の患者では偽物の起源を従来からの世界に存在するいずれの人物にも求めないことから、患者の前に姿を現した偽物としての「このものの性」は、発症前の世界には存在していない新たな「このものの性」であることになる。したがって、世界内に存在する「このものの性」の数は不変であるとすれば、ソシアの錯覚は、現実世界とは別のもう一つの可能世界の存在を訴えていることになる。ここで、現実世界の自分自身を起点として、自分自身における「このものの性」と属性を変更させた自分自身の変異体が属する可能世界を限りなく展開したとき、現実世界に存在する有限数の人物の全てについて、それらと「このものの性」と属性の両方において一致する自己の変異体がいずれかの可能世界に存在しうる。そのとき、可能世界の自己の変異体と現実世界の他者とは同一人物というほかはなく、このことは、現実世界で出逢う他者は現実世界に登場した自己の変異体であることを意味する（拙著『ソシアの錯覚』春秋社）。また、先の可能世界の中には、自己が非在である世界もありえる。しかし、そのような世界では自己は死者として指示対象となりえる痕跡をもちえない。すなわち、そのような世界では自己は始めから存在せずに、死者ですらありえない。ある可能世界で死の非在とされているものが、自己のものだとするためには、その非在と自己とを対応させるための接続線が引ける必要があろう。そのためには、非在とされているものも何らかの指示対象として存在していなければならない。そのようなことができるのは、死に伴って生に関わるあらゆる属性をなくしたとしても、そのような属性の担い手としての自己の個体そのものは、不完全な非在として世界に存在していたときであろう。

質的研究方法を基礎とした思考技術プログラム開発の試み 「時間的展望(過去・現在・未来)能力に着目したキャリア発達支援ツール」

企画・司会 : 豊田 香(東京大学大学院)
話題提供者: 番田 清美(東京学芸大学大学院)
: 岡部 大祐(フェリス女学院大学)
: 豊田 香(東京大学大学院)
指定討論者: 安田 裕子(立命館大学)

<企画主旨>

今日、質的研究の隆盛は目覚ましいものがある。この隆盛は、研究者自身が、個々の研究目的や内容に合わせ、質的研究手法を適切に援用し、また新たに開発し精緻化し続けてきた成果であるとも言える。そしてこの発展は、研究領域だけでなく、現実世界における領域密着型の実装として活用されつつある。しかし、その実態は、研究者が試作的に固有領域で実践するレベルに留まり、広く学会において実践内容を共有し、理解を深め、更なる展開を模索するまでには至っていないと思われる。この問題意識を持ち、本企画では、キャリア発達支援として、質的研究方法を実装させている3名の実践報告を行い、更なる展開の可能性について議論したい。

3名に共通する領域は、成人の職業生活に関わる「キャリア発達」と言われる領域である。キャリアとは、広義には「自己発達の全体の中で、労働への個人の関与として表現される職業と、人生の他の役割との連鎖(Super, 1957)」、狭義には「人の生涯職業における、職業に関連した経験と態度の連続(Hall, 1990)」と定義され、研究者が個々に定義して使用するのが一般的である。本企画では、キャリアを狭義に捉え、生涯職業における個人の成長を、発達心理学的視点から捉える「キャリア発達: "Career development" 邦訳」(下村, 2013)に領域を絞る。

番田は、「TEA分析」と「対話的自己論」を組み合わせ、就職活動準備中の学生を対象とした、これまでの活動を振り返り、自己の過去を理解し整理するツールを開発しつつある。岡部は、「ポジショニング理論」に依拠した「ディスコース分析」による、自身とある看護職者とのやり取りの分析を事例として、通説における「コミュニケーション能力」が看過しがちな、しかし、対人関係調整の重要な側面である、指標的なアイデンティティ・ワークに焦点化するコミュニケーション教育方法を提言する。豊田は、不確実な未来において、自己のキャリアを積極的に切り拓き、主体的に職業に従事するモチベーションを維持するための時間的展望能力を高める思考ツールを、専門職大学院ビジネススクールにおいて開発した事例を述べる。指定討論では、質的研究法が社会的な実践に応用されるということが、どのような意味を持つのか、また領域を超えて活用される可能性について議論する。

学生の進路決定における過去を整理する思考技術

「TEAとDS理論を用いたプログラム開発: Identity & Career Work Sheetによる大学生への自己開発支援」

番田清美(東京学芸大学大学院)

<発表要旨>

サビカスが「構築理論」を提唱したように、個々人が自分の働き方を切り開いていかなければならない時代となった。まして、日本の新卒一括採用という雇用慣習においては、自己のキャリア発達のタイミングとは異なるかもしれない時期に周囲と同じタイミングで就職活動を開始する。大学の専門性がそのまま産業社会での自分の専門となる確証もない。大学生という時期は、自分の将来の予測が困難な、葛藤を抱えやすい時期である。さらに、新卒者のほとんどがジェネラリストとしての働き方を求められるため、従来の適性検査やマッチングに基づくキャリア・カウンセリングは不十分であり、不確実性を乗り越えるカウンセリングツールの開発が急務である。

そこで本研究では、学校から職業社会の移行期にいる大学生を対象として、自己の価値観変容を描くTEA分析と、ポジショニングによって自己決定に意味づけをもたらす「対話的自己(Dialogical Self: DS)論」(Hermans)の概念を用いる。対象者には、TEA理論を用いたIdentity & Career Work Sheetをツールとして使用し、過去から現在において、自己の職業観(人生観)に関わる転機となった事柄を記入させる。

キャリアカウンセラーは、カウンセリングをしながら書かれたことに関する心理的な様相を対象者に想起させ、言語化させる。さらに、価値観の分岐になった事柄に際しては、DS論を用いポジショニングの可視化を行う。移行期の学生が抱える葛藤場面の様相を明らかにする試みを行うとともに、介入のポイントを議論したい。

**「今、ここ」のコミュニケーションへの批判的思考：「わたし」の在り方を可視化する
『ポジショニング×ディスコース心理学』のコミュニケーション教育：『今、ここ』の関係をデザインする力の醸成にむけて」**

岡部大祐（フェリス女学院大学）

<発表要旨>

「コミュニケーション(能)力」は、それを専門的に研究するコミュニケーション学やその周辺領域において多種多様な定義が提出されてきており、誰もが同意する一義的定義を見出すことは難しい。キャリア教育やキャリア発達の文脈においても、その重要性は語られてはいるものの、その意味するところは判然としないものが少なくない。それらの言説を一瞥すると、「コミュニケーション(能)力」を意見伝達力や傾聴力といったものと同一視して語る傾向が見られる。しかし、そのようなコミュニケーションの意味論的側面を中心としたアプローチでは、意識に上りにくいコミュニケーションの多機能性、多層性、そしてそのコンテクスト性は後景化し、「コミュニケーションの問題」について誤った原因帰属、結果として、限定的な「コミュニケーション能力」教育に終始する可能性がある。本発表では、意味論的側面に焦点化したアプローチでは看過されがちである、言語・非言語を介したアイデンティティ・ワークの側面を取り上げる。アイデンティティ・ワークは必ずしも明示的に為されるわけではなく、その多くは指標的(indexical)な方法でなされるものである。本企画では、自らの従事している指標的なアイデンティティ・ワークの過程を可視化し、メタ・レベルから自身のコミュニケーションを批判的に捉える方法として、認識論的相対主義に基づくディスコース心理学に依拠したポジショニング分析の可能性を示す。具体的な事例として発表者自身とある看護職の方とのやり取りを取り上げ、コミュニケーションの動的側面、多層性を示したのち、質的研究における再帰性の問題、およびその実用的価値としてキャリア教育での「コミュニケーション能力」への活用可能性を議論する。

社会人の未来展望能力開発にむけた思考技術：未来等至点

「TEAと高次認知の自動性理論を用いたプログラム開発：自己未来創造型リーダーシップの育成」

豊田 香（東京大学大学院）

<発表要旨>

新卒入社後は、正社員として生涯職業を一企業で勤め上げるという、企業依存型のキャリアモデルは既に過去のものになりつつある。どのような職業についたとしても、環境変化と向き合い、キャリア発達を続けるために、未来展望を持つ必要がある。しかし、不確実な未来に対し、時に悲観的になり、不安になる弱さを人は持つ。右へ行くべきか、左へ行くべきか。この分岐点をめぐるせめぎ合いは、TEAでは、インタビューでの回想記憶を分析する際の重要な視点となる。この分岐点という概念を、未来から現在を回想するものとして捉え直し実装したものが、本企画で報告する「未来等至点」という思考技術である。この「未来等至点」という思考技術を、キャリア発達支援ツールとしてプログラム化するにあたり、人の行動を予測する、「高次認知の自動性理論(Bargh)」を基礎とした。人は、目標を設定しても、自分自身を思い通り動機づけられないことが多い。また周囲に影響されて思わぬ方向に行くこともあり、未来展望をもったとしても、実現することは困難になる。この無意識的な領域をモデル化した「高次認知の自動性理論」を基礎理論とすることで、自己未来を自らが創造するという発想に転換できるのではないかと考えた。本研究の実践は、専門職大学院ビジネススクールを修了する社会人を対象としたものである。未来等至点という未来展望能力を高めるための思考技術の更なる進化、また領域を超えた活用の可能性についても議論したい。

注) 参考文献は当日の配布資料に掲載する。

家族の語りを支援する

企 画： 河原 智江（ケア研究会）
西村 ユミ（首都大学東京大学院人間科学研究科）
司 会： 河原 智江（ケア研究会）
話題提供者： 佐藤 美保
（横浜市舞岡柏尾地域ケアプラザ地域包括支援センター）
話題提供者： 西村 ユミ（首都大学東京大学院人間科学研究科）
指定討論者： 南山 浩二（成城大学）
指定討論者： 池田 真理（東京大学大学院医学系研究科）

<企画主旨>

対人援助サービス専門職（専門職）は、障がいや病いを患い地域で生活する者の家族支援に取り組む中で、家族の意向をどのように把握し、家族とどのように向きあっているのだろうか。とりわけ、多様なステークホルダーとの関係において、複雑な課題やニーズをもつ家族の意向を把握することは難しい。そのため、専門職は、家族のひとつひとつの言動に細心の注意を払いながら、家族から一定の信頼が得られるような関係性の構築とともに、支援の方向性を探りつつ対応をしている。

また、家族は、必ずしも、そのときの気持ちや真の意向を専門職に語るわけではない。専門職に語らなくても、家族が語ろうと思うひとに対して、自分の気持ちや意向を語れることは、家族にとって意味のあることではないか。誰に語るかは別としても、専門職は、家族が語った気持ちや真の意向にせまることに、もっとセンシティブになる必要がある。

本シンポジウムでは、家族の気持ちや真の意向について、家族が他者に対して語ることができるための専門職の関わりや支援を考えたい。

話題提供は、実践の立場と研究者の立場から行う。

実践者である佐藤は、地域における実践の中から、支援対象となった家族の事例の支援経過を報告する。

研究者である西村は、長期にわたって調査をしている、遺伝性疾患患者とその家族の経験の聞き取りから、患者でありつつ家族でもある者が語ることの意味と、語りがもつ機能について問題提起する。

指定発言は、立場（専門性）の異なる研究者が行う。

南山は、家族社会学及びナラティブを専門とする立場から、話題提供の内容を踏まえ、“家族が語る”というそもそもの意味や語られたことに対して専門職（あるいは、研究者）が支援することについて解説する。

池田は、家族看護学の立場から、話題提供の内容をもとに、ケアの場における家族の語り及び語りに対する支援の特性等について分析する。

支援が難しい家族に対する専門職の関わりに関する一考察

—家族の意向と家族自身の“内省”に着目して—

佐藤 美保（横浜市舞岡柏尾地域ケアプラザ地域包括支援センター）

<発表要旨>

事例研究として取り組んだ事例及び事例検討として検討した事例を取り上げて報告する。

前者では、利用者・家族の意向と支援担当者の必要性の判断にはギャップがあり、サービス利用に結びつきにくかった事例（脳梗塞後遺症のため寝たきりとなった妻とその妻を介護する夫）の支援過程から、利用者・家族の意向とそれをかなえるために必要な支援要素を述べる。

後者では、若年性アルツハイマー認知症の妻とその妻を介護する夫の事例を取り上げ、妻への虐待の加害者となった夫の変化のきっかけと夫自身の内省との関係について検討した結果を述べる。

あわせて、両事例の現在の状況についても触れ、これまでの専門職の関わりについての評価を試みる。

（本発表の一部は、第2回日本公衆衛生看護学会学術集会及び第14回日本トラウマティック・ストレス学会において報告した。）

遺伝性疾患をもつ家族の病い経験

—親から子への生体腎移植を契機として—

西村 ユミ（首都大学東京大学院人間科学研究科）

<発表要旨>

常染色体優性多発性嚢胞腎（Autosomal Dominant Polycystic Kidney Disease; ADPKD）は、原因遺伝子が1990年代中頃に特定された、成人期に発症する遺伝性疾患である。報告する事例（A家族）は、父と母、子という構成の家族であり、母と子がADPKD患者である。腎臓に多数ののう胞ができるADPKDは、のう胞の肥大によって腎機能が低下し、やがて慢性腎不全のために透析や腎移植が必要になる。

本発表では、父がドナーとなり、子への生体腎移植が行われた約2年間にわたる語りに注目し、以下の2点について報告する。第1に、ADPKDという病いの語りにおいて、母と父、子の語りが、病い経験の当事者であることをいかに形づくっているのかを考察する。第2に、生体腎移植をめぐる、A家族それぞれが「患者の立場」と「家族の立場」を変えつつ語るということが、いかなる意味を持っていたのかを検討する。

（本発表の一部は、20th Qualitative Health Research Conference及び第41回日本保健医療社会学会大会において報告した。）

<参考> ケア研究会におけるこれまでの会員企画シンポジウムと今回の取り組みの関係

ケア研究会（代表：河原智江・西村ユミ）では、本研究会の目指す重要なテーマのひとつである“当事者性”にかかわる研究成果をもとに、日本質的心理学会第7回大会以降、会員企画本シンポジウムを企画し、実施してきた。いずれの企画も、“家族”、“専門職の支援”がキーワードである。今回は、これまでの4回の取り組みのベースにある、『家族の語り』に焦点をあてた、いわば、本研究会の原点にもつながる企画である。

第7回大会「対人サービス専門家による「大事なひとを喪くした家族」支援を再考する」

（河原智江・西村ユミ・南山浩二・八木絵香）

第8回大会「Evidenceから“当事者としての家族”支援を考える」

（河原智江・西村ユミ・南山浩二・池田真理）

第9回大会「当事者が捉えるウェブログによる“つながり”から新しい支援の可能性を探る」

（河原智江・西村ユミ・南山浩二・池田真理・ウェブログを綴る家族介護者2名）

第10回大会「グリーフケアを考える」（河原智江・西村ユミ・南山浩二・久保恭子・鷹田佳典・池田真理）

研究交流委員会企画 対談：被災者の語りと復興—医学と心理学の視点から

企 画：日高 友郎（福島県立医科大学）
司 会：日高 友郎（福島県立医科大学）
対 談 者：神田 秀幸（島根大学）
対 談 者：やまだ ようこ（立命館大学）

<企画主旨>

東日本大震災から4年が経過し、「復興」という言葉が散見される現在、震災避難者・原発事故避難者を取り巻く状況はめまぐるしく変容している。市街の復旧、除染作業の進展などが実現されてきた一方で、避難地での住宅提供の打ち切りなど、被災者においてはさらなる新たな問題が生じる可能性もある。

このような状況に際し、被災者の被災経験・避難経験を「語り」の視点から捉える試みが、様々な専門家により行われている。被災者ひとりひとりにとっての被災・避難の経験や、復興への意味付けは、時間的推移とともに変容を続けている。故郷への思い入れ、帰郷すべきかどうかの判断、避難先での生活への適応、なぜ震災にあったのか——こうした経験への意味付けは極めて多様であり、「復興」を議論する上で、重点的な検討を要するものである。

本企画（研究交流委員会企画）では日本各地に避難した被災者の語りを聞き取ってきた医師を登壇者として迎えるとともに、「語り」研究の第一人者による討論を（対談形式で）実施する。これにより医学と心理学双方の視点から、被災者の語りの捉え方や、被災者の語りを復興に繋げるための方法についての議論を深めることを狙いとする。

医学の視点から見た被災者の語りと復興

神田秀幸（島根大学）

<発表要旨>

日本各地に避難した被災者の語りを聞き取ってきた医師としての立場から、各地の被災者が震災および避難生活をどのように経験し、何を語ったのかについて報告を行う。神田氏は神奈川県・島根県などに避難した被災者の語りを聞き取る活動を、長期的に続けている。また震災発生時には福島県立医科大学（福島市）に所属しており、自身も被災経験を有しているという立場を持つ。医師、そして被災者としての立場だからこそ聞き取り得た語りなど、貴重な報告をいただく。

心理学の視点から見た被災者の語りと復興

やまだようこ（立命館大学）

<発表要旨>

心理学におけるナラティブ研究の第一人者としての立場から、被災者の語りの捉え方や、被災者の語りを復興に繋げるための方法についての議論を深めるための議論を行う。近年は医学教育にも携わっているという経験も有しており、医学と心理学が復興に寄与するあり方について、さらに踏み込んだ立場からの示唆を賜わる。

司会は日高友郎（福島県立医科大学）が務める。オーディエンスも含めた活発な議論の場を構成したい。

質心研編集委員会企画

「レジリエンス」は私たち（＝質的研究者）に何をもたらすのだろうか？

企画・ファシリテーター：松嶋 秀明（滋賀県立大学）

企画・話題提供：伊藤 哲司（茨城大学）

話題提供者：荘島 幸子（帝京平成大学）

話題提供者：遠藤 野ゆり（法政大学）

話題提供者：北村 篤司（東京大学大学院）

<企画主旨>

近年、レジリエンス（resilience）という概念に注目が集まっている。「復元力」、「回復力」、「しなやかさ」、「打たれ強さ」などと訳され、精神保健の領域では「逆境やリスクの存在にもかかわらず、良好な適応をしめすこと」と定義されている。

その適用領域は多岐にわたる。精神障害のリスクを抱える人々の予防にはじまり、虐待や、貧困、戦争や自然災害等を経験して育った子どもが、不適応に陥ることなく育つことを保証する観点から、あるいはさらに、末期ガンの人々や家族への支援に関わってレジリエンス研究の必要性が広く認識されるようになってきている。個人のみならず、自然災害によって、人間関係のつながりを失ったコミュニティをどのように再生していくのかといった議論もあれば、工学的な立場から、災害にあってもいち早くたちなおる街づくりを目指すという意味で「レジリエンス社会」「レジリエントな街づくり」といった用語が聞かれるようにもなった。データベースに登録された研究数も指数関数的に増大し、ちょっとした「流行」概念といえる。ただし、大部分はレジリエンスを一変数とした、数量的な手法によるものであり、質的な方法論によって記述を試みた例はまだまだ少なく、質的研究による記述の試みがまたれるところである。

とはいうものの、方法論は研究者が切実におい追い求める価値にせまる代替不可能な概念であるはずだ。質的研究が少ないからといってやればよいというものではないかもしれない。実際、虐待にしろ、障害にしろ、災害にしろ、いずれもこれまで多くの取り組みがなされ、それなりにアプローチする試みが繰り返されてきた分野である。レジリエンスという言葉はそもそも必要なのだろうか？ 必要なら、どのような切実な問いに導かれて、それが求められることになるのだろうか？ 言葉が現実をつくるとすれば、レジリエンスという言葉は、どのような現実を作るのだろうか？ 疑問はつきない。

そこで今回のシンポジウムでは、レジリエンスという概念を正面から扱ってこられたわけではないものの、いわゆるリスクや逆境に直面している対象に関わり、研究をおこなってきた人々をお迎えした。レジリエンスという言葉をもたずに研究をおこなってきた方々に、自らの研究についてふりかえってご紹介いただきながら、レジリエンスという言葉がどのような可能性をもつと考えられるのか、そのお考えをお聞きすることを通して、レジリエンスという言葉が私たち（＝質的研究者）に何をもたらすのかもつ意味を吟味する機会としたい。

性別移行という逆境とレジリエンス

荘島幸子（帝京平成大学）

発表者はこれまで、出生時の性別とは異なる性別で生きることを望む人々にインタビューを行い、その人生を内面から理解するよう努めてきた。性的マイノリティとも呼ばれる彼らは自殺のハイリスク者であり、人生の早期から自殺関連行動が高率でみられる者たちである。彼らは「100%にはならないけども」、「リスクを背負いながら」、「リスクと取引きして」（いずれも当事者の語り）、日々を生きている。彼らの人生において良好な適応は遥か彼方にあるが、常に打ちのめされているわけでもない。逆境と向かい合う彼らの生き方についてresilience概念から紐解いてみたい。

困難を抱える若者のキャリア形成とresilience

一家庭基盤や認知機能の困難に着目して

遠藤野ゆり（法政大学）

発達障がい、強迫性障がい、家庭基盤の弱さ、過保護家庭etc…。若者を取り巻くこうした困難は、単一だけでも若者のキャリア形成に大きな影響を及ぼすが、貧困と発達障がい、強迫性障がいと過保護など、複合的に絡みながら生じているのが現状である。「resilience」という重要な概念が、はたしてこうした複合的困難を乗り越えるに耐えうるかどうか、慎重な検討が必要であろう。特に、複合的困難ゆえに、支援者とのつながりも弱くなりがちな若者に対して、支援者にも求められるresilienceを検討する。

子どもの「非行」と向き合う親たちの“レジリエンス”

北村篤司（東京大学大学院教育学研究科）

筆者は、子どもの「非行」と向き合う親たちのセルフヘルプ・グループにおいて、語りがどのように構築され、参加者の語りがどのように変化していくかを研究している。子どもが非行に走ったとき、親はその問題行動に振り回されるだけでなく、周囲からも非難を受け、親としての自信を喪失する。そのような困難な状態から親たちが抜け出していく過程を“レジリエンス”という概念から捉えると何が見えてくるのだろうか。“レジリエンス”という視点によって見えてくるもの、および逆に見えにくくなるものについて検討したい。

コミュニティ再生・社会転換の立場から

伊藤哲司（茨城大学）

レジリエンスは、今や工学分野など幅広い分野や文脈で使われつつある。たとえば「レジリエントな社会」という言い方が、社会の持続可能性を追究するサステナビリティ学でも用いられている。そこには、最先端の技術を社会に適用するということに留まらず、一般の人々が持っている「伝統的な知」を見出し、それと科学との対話によって新たな展望を開いていこうというアプローチの試みも見られる。今回は、理系の研究者も含めた協働実践などを通して見える、コミュニティ再生や社会転換にかかわるレジリエンス概念について問題提起する。

談話分析に何ができるか 社会・制度改革の提言へ向けた相互行為の応用談話分析

企 画：岡田 悠佑（大阪大学）
司 会：秦 かおり（大阪大学）
話題提供者：岡田 悠佑（大阪大学）
話題提供者：秦 かおり（大阪大学）
話題提供者：植田 栄子（青森公立大学）

<企画主旨>

書き言葉、話し言葉または両者の時空間的連続体としての談話へのアプローチとして、会話分析、ディスコース心理学、ナラティブ分析、批判的談話分析など様々な「談話分析」が言語学から人類学、社会学、教育学、そして心理学に至るまで多くの学問領域において盛んに行われている。そうした「談話分析」の主な目的の1つは談話の中であるいは談話を通して現れる社会事象を解明することであるが、そうして得た理解からどのようなことを実社会に還元できるのであろうか。本シンポジウムではその一つの回答として、応用的談話分析を実践している3名の研究者がそれぞれ、英語学習者の動機付けに関するフォーカスグループの会話分析（岡田）、日本人女性による子供の養育に関する語りのナラティブ分析（秦）、そして医師と患者の診察場面での相互行為的談話分析（植田）を行い、その分析結果からそれぞれのフィールドに在る社会・制度・規範について具体的提言を行う。岡田は相互行為の実時間の流れの中での参加者が為す社会行為の組織化方法を参加者の文化として捉え、相互行為というシステム内部、特に時間的に前後の振舞いとの関係の中で参加者がどういった方法で何を語るのかに焦点を当て、どのような文化に参加者が志向しているかを分析する。本研究では大学生・院生へのフォーカスグループの分析から、大学が期待する英語学習者として社会化させるためには大学全体で統一した教育談話の構築と日常的実践という英語教育プログラムの管理運営が不可欠であることを提議する。秦はインタビュー・ナラティブを相互行為の場における語りと解釈し、語りの世界の中で語り手が自己及び他者をどのように位置づけているのか、またインタビューの場において、その語りを選択したこと、その語り方を選択したことによって、今・この場にいる相手との相関関係の中で自己の立ち位置をどのように設定しているかを分析する。このことによって、そこに生起するアイデンティティを分析することが可能と考える。本研究では日本から来た日本人のインタビュアーを前にした在英日本人女性の語りの分析から、社会全体が男女共に多様な生き方を当然のこととして認めること、多様性を受容し共生できる社会をつくることこそが重要であることを提議する。植田は医療談話に特化した計量分析RIASの批判的検討を示した後、診療談話1ケースを焦点化して言語学の相互行為的談話分析を行い、さらに専門家である医師と非専門家の潜在的患者である一般人に半構造化インタビューを複数行うことで、診療場面のコンテキスト及びテキストの分析、非言語コミュニケーションの解釈の多様性から談話分析を深化させて考察する。本シンポジウムの最終的な狙いは、上記3つの実証的な応用談話分析研究を示すことで、会話分析、ナラティブ分析、そして相互行為的談話分析といった談話分析は何を行うことが可能でそして各領域においてどのような方向に応用されていくべきか、という質的研究法としての談話分析の在り方を提示することである。

英語学習動機付けフォーカスグループの応用会話分析

大学英語教育制度の問題点と改善案を議論する

岡田 悠佑（大阪大学）

<発表要旨>

本発表では、認知的アプローチが採用されることが主な英語学習動機付け研究に対して会話分析を応用し、動機付けを高めるにはどのように英語教育プログラムを実践していくべきかを社会的視点から提言する。英語学習に関する文系・理系の大学生及び大学院生に対するフォーカスグループインタビューをデータとし、参加者達が「どのようにして何を」語るのかに焦点を当て、行為連鎖とカテゴリーの組織化を分析する。そうして参加者達がどのような資源を用いて英語学習に対するスタンスとアイデンティティを構築しているのかを探り、彼らが志向している文化を解明することで、大学としてどのような制度的・教育的取組が一定方向へ彼らのスタンスとアイデンティティの方向付けに必要なかを考察していく。

ナラティブのマルチモーダル分析

日本は何故、産み育てづらいのかを日本の外から議論する

秦 かおり（大阪大学）

<発表要旨>

本発表では、従来のナラティブ分析にマルチモーダル分析的手法を組み込むことにより、相互行為の場で様々な文化的背景やアイデンティティを表出・協働構築・再構築させる様子を多角的に詳察し、その発話内容と語用・身体言語などの双方を分析することによって、出産・育児に対する女性の躊躇いや生きづらさの所以—社会規範を反映した規範意識—と、それがどのように観察可能なのかを議論する。具体的には、2007年に開始した日本人女性に対する出産・育児体験を聞く半構造化インタビューを用いてナラティブ分析を行ってきた蓄積を元に、特に2010年以降に英国で実施してきた日本人移民である女性達、つまり日本を「脱出」して出産・育児を行っている女性達に焦点を当てて考察していく。

医療コミュニケーションにおける計量分析と相互行為的談話分析

医者と患者の会話の齟齬を議論する

植田栄子（青森公立大学）

<発表要旨>

本発表では、医者と患者の診療場面における談話データ78ケースを分析対象として、1) 欧米を中心に医学領域で汎用されている計量分析手法 (Roter Interactional Analysis System; RIAS) による分析、2) そのRIASに対する言語学からの批判的検討と相互行為的談話分析による質的解釈、3) さらに同一データ中の診療会話1ケースに焦点をあて、医者 (専門家) と一般人 (非医者・患者側) にその音声データを聞いてもらい、半構造化インタビューにより得られた各解釈並びに問題点を比較検討する。特に、2) で示された談話分析と3) とを照合することにより、専門家と非専門家の認識の相違から生じるコミュニケーションの齟齬、医療及び医療制度の問題点に関して、より複眼的・多角的に考察を行い、医者と患者及び制度改革に向けた提言を試みる。

ケア労働者のよそおいによる専門性の表出と感情労働

企	画：木戸 彩恵	（立命館大学）
司	会：木戸 彩恵	（立命館大学）
話題提供者：	伊勢 慎	（福岡県立大学）
	木戸 彩恵	（立命館大学）
	野田敦史	（高崎健康福祉大学）
	正岡里鶴子	（成育しせい保育園）
	奈良修三	（特別養護老人ホーム千寿の園）
指定討論者：	香曾我部 琢	（宮城教育大学）
	中坪 史典	（広島大学）

<企画主旨>

外的な環境・言葉遣い・言葉のトーン・態度（たとえば、よそおいや笑顔など）を含め、よそおいは自己の現れの一つの指標であり、対人援助場面でも重要なファクターとなる。ケア労働者のよそおいについては、①管理的な立場で考え、方法・方略的な役割をみる研究の可能性（実践研究）と、②よそおいは社会を表す1つのフィールドであり、職務・現場・施設の特性を表現するものとしてみる研究（社会心理学的研究）の可能性がある。本シンポジウムでは、前者の立場からよそおいを捉え、感情労働に携わるケア労働者のよそおいにおける専門性の表出について考える。

従来的にケア労働者にとって「よそおい」とケアは関連付けて考えられることが少なかった。一般的なケア労働の現場では、よそおいは申し合わせ事項として定められており、「よそおいについては考えたこともない」、「決められたよそおいを用いている」という意見も多い。

よそおいは、その特徴として、統一化と差異化の両面的な性質をもつが、実際、ケア労働の現場でも、ユニフォーム姿でケアを行うことでケアの同一性を図れるのではないかという考えと、家庭的な環境構成を備えることを目指すケアの現場にはユニフォームはそぐわないという考えが両立している。

本シンポジウムでは、はじめに、よそおい研究理論の立場から木戸氏が観点提示をおこなう。続いて、保育の現場からの話題提供を伊勢氏と正岡氏がおこない、そして、福祉の現場からの話題提供を野田氏と奈良氏がおこなう。最後に、本シンポジウムにおいて、子どもあるいはお年寄りを対象とするケアの現場での専門性の表出についてよそおいという記号を通した質的観点からの議論をおこないたい。

専門性の表出としてのよそおい

木戸彩恵（立命館大学）

<発表要旨>

よそおいについて、被服心理学の理論と対人関係の構築という観点から問題提起をおこなう。関係性を作り上げるという視点からみると、よそおいは関係性の媒介である。ケア労働者の専門性を示すよそおいについて検討することを目的として、一般的な被服心理学におけるよそおいの歴史的変遷、ケア労働者のよそおいと感情労働の関係性について基礎的な考え方を提示し、続く発表の前提を共有したい。

男性保育者にとってのよそおいとやる気

伊勢慎（福岡県立大学）

＜発表要旨＞

保育者の服装に着目して事例報告をおこなう。第1に、発表者自身の保育士時代の経験について、イベント時には決められたユニフォームがあるが、日々は大まかな支持があるだけであり決まったユニフォームが無かった例をあげる。第2に、統一されたユニフォームを着用し日々の保育を実践している幼稚園の例をあげる。第3に、統一したコンセプトで服装が日々異なる園の例をあげる。

保育現場におけるよそおい調査研究

正岡里鶴子（成育しせい保育園）

＜発表要旨＞

①保育士の「よそおい」が保育の質に関係するか？ ②子どもの側から見た時、保育士の「よそおい」はどういう意味を持つか？という2点を主たる関心事とし、現場経験を有する7名の園長にインタビュー調査を行い、所見を得た。服装については、動きやすさ、機能性が共通して求められ、次いで「自由」や「保育士の個性」が強調された。「保育の質との関連性」については、現場ではあまり重要視されていないようだが、保育士の服装は物的環境の大切な要素の一つであり、アタッチメントとも深い関係があると考ええる。保育が長時間化・低月齢化し、保育士達も一人の子どもに対して複数がチームとして関わらざるを得ない昨今、子どもの発達の心理的要求の観点から、この問題を問い直し、実践報告をおこなう。

児童養護施設におけるよそおい調査研究

野田敦史（高崎健康福祉大学）

＜発表要旨＞

児童養護施設の管理監督者4名に対して、インタビュー調査を実施した。インタビューでは「施設開設から現在までの職員の服装変化」、「子どもとの関わりにおける服装の意味」、「管理監督者から職員に対して服装に関する指導を行った経験や服装に関する規則・申し合わせ事項の有無」を聴取した。結果、すべての児童養護施設においての服装は、個々の判断に委ねられていた。管理監督者は一様に「職員の服装の意味を考えたことはなかった」と語り、現場職員の服装は日常的な服装として恒久的な状態であることが把握できた。ただし、「現入所児童と対峙した場面での服装に対する意識」や「入所児童の職員の服装に対する“思い”」について、把握できていない。シンポジウムでは、これらの観点からの調査データも提示する。

特別養護老人ホームにおけるよそおい調査研究

奈良修三（特別養護老人ホーム千寿の園）

＜発表要旨＞

特別養護老人ホーム29施設における管理者・介護職員・看護師・他計54名に「よそおい」の「ケアの質」「意義」等についてアンケート調査を行った。服装が「自由」という回答となんらかの統一した服装があるとしたのが25名、約束事があるとの回答が19名であった。適正な服装については「清潔感、不快を与えない、好まれる、生活の場に相応しい」との回答が多く見られた。意義については「仕事に対する姿勢、その人の心（価値）を表す」等の回答が多く見られた。「質」についての質問から「よそおい」の価値の有用性が問われることが示唆された。

活躍するグローバル人材の大学での経験の探求 大学から社会へのトランジッションを明らかにするための方法論

企画：岸 磨貴子（明治大学 国際日本学部）
話題提供者：山本 良太（東京大学 情報学環）
話題提供者：今野 貴之（明星大学 教育学部）
話題提供者：久保田真弓（関西大学 総合情報学部）
指定討論者：久保田賢一（関西大学 総合情報学部）

<企画主旨>

本シンポジウムでは、高等教育におけるグローバル人材を育成する学習環境をデザインすることを目的とする。近年、経団連をはじめ経済産業省など企業や国から、グローバル人材の育成に向けて要請が強まり、多くの大学が新しい教育プログラムを展開するようになった。本研究では、実際にグローバルな分野で活躍している社会人やグローバルな活動に関心のある学生に焦点を当て、彼らに対してインタビューをおこない、大学教育における正規の学習だけでなく、インフォーマルな学習活動にも着目し、その後の生き方との関連性を明らかにしていく。得られた知見をもとに、グローバル人材を育成するために大学はどのような学習環境を構築すべきか明らかにしていく。本シンポジウムでは、「グローバルに活躍する社会人は、大学でどのような経験をしたのか」をリサーチクエスションとし、それを明らかにするため4つの方法論でアプローチし、その可能性と限界について議論する。

<話題提供者の論題>

「ダイアログ」岸磨貴子（明治大学）

ダイアログは、ディスカッションとは異なり、それに参加することでなんらかの意味を見いだしていくプロセスである。本事例では、筆者と協力者が共に自らの経験を出し合い、大学と社会のトランジッションを全体論的な観点から捉えるためダイアログを用いた。

医者、弁護士、農家、NPO法人スタッフ、デザイナー、コンシェルジュ、会社員など様々な職種において、社会的な活動（例えば、ボランティア活動やワークショップ）に参加している8名と「社会で活躍する人は大学時代にどのような経験をしているのか」というトピックでダイアログを行った。彼らは、情報提供者であると同時に研究協力者として、ダイアログ・セッションで出された内容を共に検討し、考察した。同じテーマで3セッション行い、1セッションには3名（最初のセッションのみ2名）が参加した。1セッションあたり30分である。筆者は、ダイアログを通して出た考えをすべて紙に書き出し、協力者と一緒にそれらを俯瞰して分析した。その結果、同じ新人でも会社で伸びる人と伸びない人の間には「過去の経験」に違いがあることが分かった。また、その「経験」とは、（1）自分のこれまでのやり方や考え方（常識）を一度捨て、新しく作り直さなければならないほどの葛藤を伴う経験（2）経験を意味（価値）づける深い内省の経験、（3）喜びを伴う学びの経験である可能性が分かった。

「テキストマイニング」今野貴之（明星大学）

本発表ではテキストマイニングを用いて事例を分析した結果を報告する。研究対象者は、情報系の大学（学部）を卒業した後、歯科大学へ編入し歯科医を目指した女性である。博士号を取得し、大学病院で歯科医として勤務する一方で、途上国の病院への支援活動にも参加していた。現在は、大学病院を退職し、ミャンマーの診療所で歯科医として活動をしている。本研究対象者へのインタビューをおこない、その特徴を把握するために、テキストマイニングを用いた。テキストマイニングは着目する単語をもとに、その文章を含む単語が他の単語とどのように共起しているのかをまとめ、その特徴を示すことができる手法である。分析の手順として、まず、テキストデータを単語や文節で区切り、それらの出現の頻度や共出現の相関、出現傾向、時系列などを解析した。次に、それら数量化された解析データをもとに定量的な分析をした。テキストマイニングの方法論の留意点として、データの持つ文脈を配慮するために、分析過程の全てにおいて生データ戻りデータの見直しを心がけた。

「複線径路等至性アプローチ」山本良太（東京大学）

複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いた事例では、グローバリゼーションによって生じる様々な問題に取り組む人をグローバル人材と想定し、インタビューからそれらの人材が共通して備える特徴とそれらに至る経験を提示する。TEAでは、ある時点における個人の変化や成長を捉えるのではなく、個人の経験とそこに埋め込まれた様々な意味を、時間という概念を損なうことなく網羅的に捉えようとする点に特徴がある。そこで本研究では、グローバル人材に共通する経験のプロセスと、それらを促す要因は何か、という問いに基づいてデータ収集と分析を試みた。本事例では、医療や建築、教育などのフィールドで活動する対象者を選定し、インタビューからそれぞれの複雑な経験を具体的に聞き、分析のデータとした。

「PAC分析」久保田真弓（関西大学）

PAC（個人別態度構造（Personal Attitude Construct）分析には、直観に基づいた「当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析」という感性のレベルと「クラスター構造についての調査協力者のイメージや解釈の聴取、検査者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度、イメージ構造を測定」から新たな関係性を発見する分析的なレベルがある。これまで、臨床心理学、看護学、社会心理学などで利用されてきている。PAC分析ではその手法から個人も気が付かなかった態度が表出することもあり、調査者は、協力者に寄り添うように聴取し、結果を解釈する必要がある。そこで本研究のテーマでは、アイデンティティとの関係を見ることにし、刺激文で「自分らしさ」を問うことにした。当日は、3人の分析結果から報告する。

議論の観点：久保田賢一（関西大学）

グローバル人材の育成への取り組みは、国からの補助金による影響もあり、多くの大学が取り組むようになってきた。しかし、その取り組みの多くは、語学教育と留学を組み合わせたものが中心であり、従来の取り組みと比べて新しさはない。グローバル人材の要請は、主に産業界からのものであり、一般的に「英語が使えて世界をまたにかけ事業を展開し、競争に打ち勝つ人間」ととらえられている。大学は、このような人材の育成を目指すべきなのであろうか。大学教育の成果として、どのようなグローバル人材を育成すべきか、経済界からの要請ではなく、大学として検討することは重要であろう。大学教育が育てるべき「グローバル人材像」はどのようなものか、そういう人材を育成する環境とはどうあるべきか、4つの研究アプローチを題材として、多様な角度から議論をしたい。たとえば、サンプリングの方法、データ収集、分析手法、前提となる理論を比較検討していく。そして、4つの方法論をトライアングレーションすることで、得られた知見は互いに矛盾をするのか、あるいはより深い知見を取り出すことができるのか、可能性と限界について議論を深めたい。

対話的自己理論の展開と応用 ー共生社会に生きる私とあなたへの接近ー

企 画：安田 裕子（立命館大学）・森岡 正芳（神戸大学）
サトウ タツヤ（立命館大学）
司 会：黒羽カテリーナ（大阪府立精神医療センター）
話題提供者：山田 嘉徳（関西大学）
話題提供者：小澤 義雄（三菱電機）
話題提供者：滑田 明暢（滋賀大学）
指定討論者：サトウ タツヤ（立命館大学）
森岡 正芳（神戸大学）

<企画主旨>

对人的葛藤と関係性の形成、団体や組織の維持と変容、社会や国単位での紛争と解決など、さまざまな次元で、また多様な事象において、「対話」の重要性が注目されている。それは、人と人、ないしは集団と集団の「間」で行われるやりとりを意味するが、そうした対人「間」や集団「間」でのやりとりとあわせて留意すべきが、個々人「内」での対話であるだろう。ハーマンスとコノプカ（2010）は、対話や権力争いのような社会全体のなかでみてとれる多くの過程が、「心の社会」としての自己の内においても位置づけられているという観察にもとづき、“Dialogical Self Theory: Positioning and Counter-Positioning in a Globalizing Society”を執筆した。我々はグループでこの著書の翻訳を進めているところである。

対話的自己論とは、自己と対話という2つの概念をつなぎあわせ、自己と社会の相互関係に対するより深い理解を可能とする理論である。通常、「自己」は、個人の心の内で起きていることに、そして「対話」はコミュニケーションのさなかにいる人たちの間で生じている過程として、連想されやすい。これらの合成概念である「対話的自己」は、外的なものが内的なものに、そして逆に、内的なものが外的なものに関与していくような過程のなかで、そうした二分法を越えていく。

対話的自己論の基礎は、自己の空間的・時間的な拡張によって作りあげられている。空間的に拡張した観点からは、グローバル化とローカル化の文脈における自己の未定性が論じられる。そして、時間的に拡張した観点からは、伝統的・モダン・ポストモダンの3つの自己モデルの比較にもとづき、各モデルの利点と影の両側面より、対話的という第4のモデルが描き出された。このモデルのポジショニングという考えは有用である。人は常にポジショニングと再ポジショニングの過程に連続的に関与しており、それは相手との関係のみならず自分自身との関係においても起きていると考えることができる。このことは、人びとの間で起こる行動（たとえば、コンフリクト、批評、同盟と相談）が、自己のなかでも起きていることを、そして、自己がどのように心の社会として動いているかを、明らかにする。従来のポジショニング論が人びとの間で起きるプロセスに注目しているのに比して、対話的自己論では、間主観的なプロセスとの緊密な関係における自己の経験の豊かさと情動的な性質に関する深い考察が目指されており、ゆえに、対話と情動との双方向的な関係も重要となる。そして現代の組織が、ますます国際的、異文化間的、地域間的になり、多声的な自己とアイデンティティをもった人びとが増え続けているなかで、対話的自己論は、実践的適用、すなわち、組織における対話的リーダーシップ、個々の自己と組織の双方の発達に関連するような動機づけと社会における葛藤・紛争の解消のプロセスへと、架橋されてゆく。

本企画では、こうした対話的自己論についていくつかのポイントを紹介したうえで、語りと自己、時間と自己、問題や紛争の解決、対話的自己理論の研究・教育への応用などについて、議論を行いたい。

対話的自己と教授・学習

山田 嘉徳（関西大学）

＜発表要旨＞

本発表では、ハーマンスとコノプカ（2010）において展開された対話的自己のなかでも、その中核を成すポジショニング理論（positioning theory）の要点を提示することを通して、対話的自己と教授・学習との接点を探る。ポジショニング理論では、自己のポジション同士のつながりを記述し、自己世界をめぐる多様な他者（性）（otherness）の有り様を明らかにする（クーパーとハーマンス, 2007）。一方、ハーマンスとコノプカ（2010）ではむしろ、他者性（alterity）という術語を用いることによって、諸ポジションの間で相矛盾するポジションが競合し、葛藤するさなかに「良い対話（good dialogue）」の萌芽をみいだそうとしている。

その試みのひとつの理論的な方策として、異質で相容れない他者の並存可能性を問い、寛容的なつながりを自己の対話空間に生み出す「他者性-学習（alterity-learning）」という概念を提起している。拡張された対話的自己の考え方は、異質さの寛容という観点から、教授・学習の議論の深めることに貢献できるものと考えられる。

対話的自己と情動

小澤 義雄（三菱電機）

＜発表要旨＞

ハーマンスの自己論のなかで、情動（emotion）は常に鍵概念として位置づけられてきた。本発表では、ハーマンス&コノプカ（2010）において新たに論じられた、対話的自己における極めて複雑な情動のメカニズムを提示し、この新たな理論枠組みを質的研究が咀嚼するための議論へとつなげることを目指したい。ハーマンス（1976）は、萌芽期にあったバリユエーション理論のなかで既に、「意味や価値に満ちた人間の経験は、感情的に掻き立てられた存在（being affectively stirred）である。」と、意味と情動の不可分な関係性を想定している。1992年以降、対話的自己の理論が展開されていく際も、ポジションの有する意味は、常に情動の質を通じて記述されてきた（e.g., ハーマンス, 2001a, 2001b ; ハーマンス&ケンペン, 1993）。ハーマンス&コノプカ（2010）において、「自己と情動の双方向性（bi-directional）」という新概念が導入され、情動はポジションや意味に従属する存在から、ポジションや意味を生成していく存在へと捉え直されることとなった。

対話的自己と対人葛藤、紛争解決

滑田 明暢（滋賀大学）

＜発表要旨＞

対人葛藤とは何か。紛争とは何か。私たちは、対人葛藤や紛争に対して、どのように対応することができるのか。本発表では、ハーマンスとコノプカ（2010）が紹介している事例と見解をもとに、対話的自己理論の視点から対人葛藤と紛争解決についての理解を深めたい。ハーマンスとコノプカ（2010）は、違いに対して不安や怒りなどの否定的情動をもって反射的に反応することが、対人葛藤や紛争を引き起こしていると捉える。そして、その状況を解決へと導くには、自己内において、その葛藤や紛争の相手と対話的關係をもつことが重要であると指摘している。つまり、ひとつの視点からのみ物事を評価するのではなく、自分自身も他者もみえる視点をもつことの重要性を説いているといえる。その効用は、葛藤や紛争にかかわる関係性をめぐる物語が変わること、と指摘することもできるだろう。葛藤や紛争は対話の起点にもなりうる、という対話的自己理論の見解を参照しながら、対人葛藤と紛争解決について議論したい。

ゆるやかなネットワークをどうとらえるか コスプレ、アイドルファン、社会運動から考える

企 画	：青山征彦（駿河台大） 香川秀太（青山学院大） 岡部大介（東京都市大）
司 会	：青山征彦（駿河台大）
話題提供者	：松浦李恵（慶應義塾大）・岡部愛（東京都市大）
話題提供者	：岩男征樹（東京工業大）
話題提供者	：香川秀太（青山学院大） 藤澤理恵 （株式会社リクルートマネジメントソリューションズ組織行 動研究所・首都大学東京大学院）
指定討論者	：秋谷直矩（山口大）
指定討論者	：有元典文（横浜国立大）

<企画主旨>

従来の組織は、明確な境界をもち、持続的、安定的な集団という性質を持っていたが、近年、そうした性質を持たない、ゆるやかなネットワークの存在が注目されるようになってきた。例えば、活動理論で知られるエンゲストロムは、その都度的な協働がくりかえされるノットワーキング、似たような活動があちこちで同時多発的に生じる野火的活動といった概念を用いて、こうしたゆるやかなネットワークを捉えようとする。それは、活動理論の旧来の概念では、こうした新しいつながりをうまく捉えられないからであろう。

ゆるやかなネットワークには明確な境界がなく、不安定なのだが、長続きする。活動はボランティアに行われており、報酬ではなく、熱心さや喜びによってつき動かされている。さまざまな自発的な学びがあちこちで生じており、コミュニケーションも活発になされている。いずれも、旧来の組織では容易に実現できないことばかりである。なぜ、このようなインテンシヴな活動が可能なのか、活動の喜びとは何なのか、どのようなリソースが活動を支えているのかを議論しながら、学ぶこと、発達することを問い直す機会としたい。

ネットワークを仕立てる：コスプレのフィールドワークを通して

松浦李恵（慶應義塾大学）・岡部愛（東京都市大学）

ここでは、自分たちの身体を用いてアニメやマンガのキャラクターを表現する遊び・趣味である「コスプレ」を取り上げ、特に衣装や小道具などの製作プロセスに見られる「自発的な学び」を支える「リソース」について紹介し、検討する。

コスプレイヤーたちにとって、twitterやコスプレ専用のSNSは、製作のための重要な「足場」となっている。そこでは、製作にまつわるさまざまな知識や技術が共有されており、お互いがその足場を掛け合うような状況を通して、製作を実現、発展させてきた（松浦・岡部、2014）。そして、「リツイート」や「お気に入り」といったような「評判」の可視化機能によって、ファンとして「正統な」足場掛けを行っていたか否かが示される。

本発表では、既製品を「素材」とみなして創造的に加工し、意図的であれ無意図的であれ、その知恵を他者に開くことで互いの行為可能性を集合的に拡張する場をつくるコスプレイヤーの活動を、ホルツマン（2014）にならい、「道具と、学習のための環境と、学習そのものを同時に創造」する活動とみなす。このことこそが、ゆるやかな関係性でありながらも、40年近く発展してきた活動を支えるひとつの柱であると考えられる。

[参考文献]

- ホルツマン,L. (2014) . 遊ぶヴィゴツキー: 生成の心理学へ (茂呂 雄二, 訳) . 東京: 新曜社.
- 松浦李恵・岡部大介. (2014) . モノをつくることを通した主体の可視化: コスプレファンダムのフィールドワークを通して. 認知科学, 21, 1, 141-154.

アイドルファンの応援実践における越境創出

岩男征樹 (東京工業大学)

アイドルファンといっても、メジャーと地下現場ではコミュニティの形態が大きく異なる。メジャーのファンはその数が多く基本的に顔を知らない不特定多数であるため、全体で1つのコミュニティを形成するのは難しい。実際、ライブに「ぼっち」で参加する人も多い。ただし近年ではSNSのグループで知り合いになり、数人で一緒にライブに参加したりオフ会で親交を深める人たちもいる。それでもファン全体から見れば散発的であり、いざこざや「他界」(関心がなくなりファンを辞める)で出入りも多いので関係性は不安定である。対して、地下現場は月に10〜20本ライブがあり頻繁に会うので「TO」(トップオタ=リーダー)と「おまいつ」(いつもいる人)を中心にコミュニティが形成されやすい。つまり構造的には、メジャーはゆるやかなネットワーク、地下は従来型のコミュニティということになる。通常、前者は境界が不明瞭で越境しやすく、後者は閉鎖的で越境しにくいと考えるだろう。しかし、実際は逆である。ライブ現場では後者のほうが越境しやすい。なぜそうなのか。その活動を支えるものは何か。本発表ではこの点について具体例を通じて紹介し、境界とコミュニティの関係についてあらためて考察したい。

ゆるやかなネットワークの理論的視座：社会活動、社会運動からのパフォーマンス

香川秀太 (青山学院大学)・藤澤理恵 (株式会社リクルートマネジメントソリューションズ組織行動研究所・首都大学東京大学院)

中央集権型やメンバー／非メンバーの区分が比較的明瞭な組織的集団に代わり、中心が明確でない分散するネットワークの形態は、今や我々が意識的に共有・実践しようとし、無意識的に拡大させている世界イメージである。あえて、単純化すればそれは、競争から共創へ、単線・単一性から複線・多重性へ、物質から非物質へ、認知重視から情動重視へ、消費中心から交換中心へ、細分化社会・個室社会から越境的・複合的流動社会への変化とも言い換えられる。ワークショップ、フラッシュモブ、デモ、草の根の社会活動の流行と拡大は、この変化のうねりを生みそれを象徴する事例である。しかし、とりわけ心理学ではこの議論が遅れを見せていると同時に、それらにどうアプローチするか視点の構築が十分でない。本発表では、異分野の社会人がゆるやかにつながりNPOを支援するプロボノ活動、反原発デモ、発表者自身の実践事例をもとに、ネグリ、モース、アルチュセール、ホルツマンらの概念を援用して、「＜共＞的体験」、「非物質の交換」、「情動の矛盾」、「野火的オブジェクト」、「境界運動」といった概念をその視座として提案したい。

生活世界と雰囲気 農と食と心理学4

企画：木下 寛子・石井 宏典・菅野 幸恵
司会：木下 寛子（九州大学）
話題提供者：石井 宏典（茨城大学）
菅野 幸恵（青山学院女子短期大学）
木下 寛子（九州大学）
指定討論者：浜田 寿美男（奈良女子大学名誉教授／立命館大学）

<企画主旨>

これまで「農と食と心理学」では、農的な営みから都市的生活へと変貌を遂げてきた生活世界の在り方の襞に分け入りつつ、一方では心理学の仕事——単に人間の機能的理解を推し進めるだけでなく、生活世界の在り方に多大な影響を与えてきた——を批判的に問い直すことへと目がけ、議論の場を開いてきた。それは将来と過去を視野に収めつつ問い進める試みだが、同時にその原点にはいつも、私たちが今生きている場所がある。4回目となる今回は、その臨場性を端的に物語るものとしての「雰囲気」を鍵概念とし、生活世界を巡るトピックスが絡み合う3つのフィールド（故郷とそこでの農的な営みから遠く離れた人々が集い語り合うところ（石井）、子どもが育ちゆく場を都心部において自主的に形成し営み続けるところ（菅野）、学びと育ちの場としての規定に隠れて生活世界の諸連関が見え難いと言われる学校（木下））から多様な場面や局面を紹介しつつ議論する。そしてそれを、私たちの居る場所（世界）の現在を見つめる端緒としたい。

雰囲気を反芻する

同郷コミュニティの共同想起場面から

石井宏典（茨城大学）

沖縄の出身集落を同じくする高齢女性たちが集う場において、子ども時代の出来事を思い出して語りあう場面をとりあげたい。この共同想起は、当時の事なりゆきを互いに確認しあうとともに、その出来事に浸みわたる雰囲気や情感を反芻しあういとなみでもある。

例を3つあげよう。①学校から集落までの一里ほどの遠い帰り道についての共通体験。集落を見下ろせる名護原と呼ばれる高台まで辿り着くと、「名護原のぼってわがシマ（集落）見れば、ヤーサノーイ（ひもじい）」という決まり文句が口をつき、じっさい急にお腹が空いたと皆でうなずきあう。②集落にはかつて、葬式を出した晩に当家から集落の外にマブイ（魂）や魔物を追いやるための儀礼があったという話題。その役を担う男たちは「ホー、ホー」という低い声を出しながら目に見えないマブイをムラ外れの目印であるガジュマルの木まで追い立てた。それぞれが「ホー、ホー」と声色をまねて話すなかで、当時全身で感じていた恐ろしさが甦ってきた。③中学卒業後に集団就職で大阪に向かう同級生たちを那覇の港に見送ったときの情景。見送る側は、旅立つ友達をうらやましく思いながら別れのテープを握っていたが、船上のひとりが大声で「アンマー（お母さん）」と泣き叫ぶと、場の空気が張りつめ、肉親と別れる辛さが身に沁みたと語りあう。

それぞれの共同想起場面で、もうすぐ家に帰れると思うからこそその〈ひもじさ〉が、死者儀礼のさい集落全体を包んだ〈緊迫感〉が、そして身を切られるような別れの〈切なさ〉がふたたび味わわれていた。なお、擬音語や歌や声色をまねることは当時の雰囲気や身体感覚を呼び覚ますきっかけになっていた。

内と外のはざまで感じられる雰囲気

自主保育という育ちの場から

菅野幸恵（青山学院女子短期大学）

自主保育とは、乳幼児を育てる親たちが、互いの子どもを預け合う保育活動である。フィールドワークのなかで感じられた“雰囲気”を改めて問い直すと、内の世界と外の世界が接触するときに感じられることに思い当たる。例えば、自主保育グループに入ろうと思ったきっかけを親たちに尋ねると、子どもたちが遊んでいる様子やそれを見守る親たちが醸し出す雰囲気を「なんか、いいなあ～」と肯定的にとらえ、自分もそこに入りたいと思ったと語る者がいる。その一方で初めは排他的な雰囲気を感じて「入りにくかった」という者もいる。また、多くの自主保育グループは園舎や園庭を持たないため、公園や河川敷など公共の場所を活動場所としており、外部の人たちとの接触が常にある。そのような場所においてルールを守っている限りは、お互い干渉せず過ごすのが前提だが、ルール違反や逸脱しているとみなされると、外部から介入されることがある。例えば、夏の暑い盛り、子どもたちが水遊びに興じていると、ものすごい剣幕で見ず知らずの人が怒ってきたりすることがある。そうすると自主保育の大人たちには緊張が走り、矢面に立って子どもたちの世界を守ろうとする。相手に反論したり対決しようとする子どもたちをかえって怖がらせることになるからだろうか、大人たちは相手のいうことをやんわり受け止めその場の收拾を図る。このとき、大人は内と外のはざまに立たされており、守るべきもの（子どもたちの遊びの環境）が照らし出される。それは内の世界に入っているときには気づきにくいものだが、自主保育という活動そのものが際立つ瞬間なのではないだろうか。

学校という「世界」に交錯するすまなざし

公開授業研究会の討議の場と雰囲気から読み解かれるもの

木下寛子（九州大学）

私たちが今生きている「世界」は、さしあたりのところでは「農」的な世界から遠く隔てられたものとして見出される。本発表で話題にするのは、その世界の多様な展開のひとつとしての学校という場である。私が訪れている小学校では、この市の公立学校の例にもれず、数年に一度のペースで「公開授業研究会（通称：発表会・授業研）」が開かれる。先生たちは、市内外から多くの「参観者」が来るこの日を「学校や子ども、授業について改めて考えなおす『良い機会』」と捉え、子どもたちと過ごす日々を通じて、この学校の在り方、辿り着いた授業の形、さらにはこの日に何をどう公開するべきかを時間をかけて考え抜き、話し合いを繰り返していく。しかしながらこの学校が、そうして辿り着いた結論を「発表会」で投げかけるとき、討議の場が往々にしてしらせ、困惑し、時には失望の空気が漂う、という苦い経験を幾度となく経験してきた。この討議の場に起こっていることを解きほぐしていくと、学校という世界に交錯するいくつかの「まなざし」が明らかになって来る。また、「参観者」の眼差しや、それに先回りして「発表者」が取る「対処」には、心理学の知見が独特の仕方ですく深く食い込んでいることも見えて来る。この話題提供では、「授業研」の場に明らかになって来るこの「まなざし」と、そこに見出されるもの——「発表者」である先生たちが出会い、問い、話そうとしてきたことがらと、「参観者」たちが期待するもの、さらにそれへの「発表者」の「対処」と展開の様子を報告する。そこから改めて、小学校という小さな、しかし強固な世界の在り方を見えるようにし、生活世界の現在を問う投げかけとしたい。

※本シンポジウムはJSPS科研費（25380841／研究代表者：石井宏典）の助成によって支えられた。

ケアと「物語」 ケア関係に変容をもたらす物語の生成と可能性

企 画：東村 知子（奈良学園大学奈良文化女子短期大学部）
西川 勝（大阪大学）
司 会：麻生 武（奈良女子大学）
話題提供者：東村 知子（奈良学園大学奈良文化女子短期大学部）
話題提供者：西川 勝（大阪大学）
話題提供者：尾張 美途（NPO法人クリエイティブサポートレッツ）
指定討論者：麻生 武（奈良女子大学）

<企画主旨>

私たち（東村、西川、麻生）は、「関係」と「物語」を鍵概念とし、心理学的観点からケアの現象を捉えるとともに、ケアの現場から心理学理論を立ち上げることを目指して共同研究を行ってきた。質的心理学ではセラピーや教育・保育、看護などさまざまなケアの現場が扱われ、そこで物語が重要な役割を果たしてきたが、研究の方向性に手詰まり感を抱いているのは私たちだけではないのではないだろうか。そこで本企画では、二つの異なるアプローチを通して、ケア関係に変容をもたらす物語の生成とその可能性について考える。話題提供では、「星の王子さま」の物語に暗示されるケア論について西川が発表し、障がい児者とのユニークなかかわりを通じて生まれる物語について尾張氏よりお話しいただく。それらをふまえ、東村より、私たちが考えつつある新たな「ケアの物語論」の方向性を示し、フロアからの指摘を受けてよりよいものに練っていきたいと考えている。

『星の王子さま』からケアを考える

西川 勝（大阪大学）

<発表要旨>

砂漠に不時着した飛行士が、生死の狭間で不思議な少年と出遭う。自身も飛行士だったフランスの作家、サン＝テグジュペリが大空に姿を隠した寸前に、20世紀以降を生きる私たちに遺した物語が、『星の王子さま』（原題 Le Petit Prince）である。発表者は、『星の王子さま』（稲垣直樹訳、平凡社ライブラリー）を用いた学習会を舞鶴市にある特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」において2014年4月から11月まで、毎回2時間計8回に渡って実施した。参加者は施設職員・入居者、地域の住民である。また、大阪市内において、2014年5月より『星の王子さま』から学ぶケアというテーマで、ケア塾たまたまはこの学習会を実施しており2015年7月現在で9回目を迎えて継続中である。この学習会には精神科医や看護師、ケアマネージャー、介護福祉士など医療福祉関係者以外にも、多様な立場の人が参加している。

シンポジウムでは、これらの学習会で交わされた意見を参考にして、『星の王子さま』をケア論として読み込むと、ストーリーの向こう側にほの見える「大切なこと」について、臨床哲学とコミュニケーションデザインの観点から考えたことを発表する。

太田燎君

尾張美途（NPO法人クリエイティブサポートレッツ）

<発表要旨>

太田燎（おおた りょう）君は現在20歳、自閉症、両耳感音性難聴、知的の障害を抱えています。動作はとてもゆっくりで、2階から1階へ階段を降りるのに10分かかります。好きなこと以外ではあまり動こうとしません。声掛けは通じないので、意志の疎通は身振り手振りです。体重は100kgを越し、動こうとしない彼を他の利用者と同じタイムスケジュールで過ごさせたり、運動をするように促すことに周りの人は苦心していました。

初めて会ったのは4年前、浜松特別支援学校の高等部2年生の時に実習生として来ました。

施設に来た当初、職員たちは、タオルを手にもって機敏に文字を書くように動かす彼の動作がとても面白いことに気付き、それを誰がみても楽しめるように工夫しようと考えました。まず、彼のタオルの先にインクを付けて実際に紙に書いてもらおうとしましたが、タオルにインクを付けたり、手が濡れることを嫌がったために上手くいきませんでした。次に、手の動きが伝わるようにタオルの先にライトを付けて、暗闇の中でビデオ撮影したり、長時間露光での写真撮影も試みましたが、上手く映りませんでした。

試行錯誤を繰り返していたある日、私が2階の踊り場で他の利用者さんと過ごしていると、太田君が3階からにこにこしながらゆっくり降りてきました。太田君は階段の手すりにずっと手を添えて、つま先からゆっくり段に足を降ろしました。そしてひと呼吸、一段下がるとまたひと呼吸置いて笑顔で周りを見渡し、もう片方の手をひらひら動かす。その後またひと呼吸、窓の向こうの景色を見て首を傾けて微笑み、2階の踊り場まで来ると、クルッと体を翻して少し立ち止まり、また微笑みながらゆっくりゆっくり階段を降りて行く。日本舞踊の仕草の全てがお話しの筋や風景や情感を物語るように、彼のその仕草には彼がゆっくり動くすべての理由が現れているように感じました。そして不思議と「彼はこれで良いのだ。」と納得したのです。その感覚を私はまだ他の言葉では言い現わせません。彼の佇まいを見ていると、ただ、「何も間違っていない。」と思うのです。

ケアと物語の先にあるもの

東村知子（奈良学園大学奈良文化女子短期大学部）

「ケア」という概念についてあらためて考えてみると、人が人と生きるさまざまな現場が「ケア」という枠組みに包摂されることに気づく。ケアとはすなわち日常であると言ってもよいだろう。また私たちはケアを通常「善いこと」とみなしている。しかし、ケアには「負の側面」もあるのではないだろうか。その一つが、ケアがはらむ権力性と暴力性である。家庭や施設というケアの場でときに虐待の問題が生じることは、ケア関係が暴力に転化する可能性を示している。

ケアの現場を対象とする研究者は、ケアについて聞き取り、それを物語化してきた。ここにもまた権力の問題がひそむ。第一に、言葉をもたない、あるいは言葉でうまく表現することができない子どもや障がい者など、ケアされる側の人々が物語れない場合も多い。そのとき、ケアする側や研究者が勝手に物語を作り上げてしまう危険性がある。第二に、他者が語る自己物語を聴取・理解するとき、聞き手が異議を挟むことはほとんどない。いわば「語った者勝ち」である。一方、研究者はその語りを切り刻み、それをつなぎ合わせることで論文という物語を作り出している。研究者が物語を搾取しているともいえる。

ケアや物語がもつこうした権力性を超え、その先に進むための手がかりが、西川氏と尾張氏が行ってきた実践と、そこから紡ぎだされる「物語」の中にあるのではないかと私は考えている。シンポジウムではその理由を述べ、参加していただく方々とともに議論を深めていきたい。

文化化される身体、身体化される文化

企 画：町田 奈緒子（京都大学大学院 人間・環境学研究科）
司 会：増井 秀樹（京都大学大学院 人間・環境学研究科）
話題提供者：西村 ユミ（首都大学東京大学院 人間健康科学研究科）
話題提供者：大倉 得史（京都大学大学院 人間・環境学研究科）
話題提供者：町田 奈緒子（京都大学大学院 人間・環境学研究科）
指定討論者：荘島 幸子（帝京平成大学 健康メディカル学部）

<企画主旨>

近年の心理学研究においては、言語や行為についての可視的レベルでの分析に留まることなく、意識化・言語化されにくい身体的現象にその焦点を広げたものが見られ始めた。それらの研究において、身体は、社会的・文化的文脈に回収されない生（なま）の経験の媒体として描かれることが多い。確かに身体は人間の生物学的基盤であり、社会・文化に用意された秩序とは別の秩序に沿って動く側面がある。しかしながら、そのことは必ずしも我々の身体が社会的・文化的なものから切り離された独立の存在であることを意味しない。むしろ、身体に根差した行動様式や（無意識的）思考様式は、文化的なものに徹頭徹尾絡めとられているのではなかろうか。あるいは逆に、文化は身体によって咀嚼され、そこに息づくことによって初めて、真の意味で文化たり得るのではないだろうか。本シンポジウムでは、身体（文化）を文化（身体）に深く根ざしたものの、すなわち文化化（身体化）されたものとして捉え直すことによって、身体に関わる諸現象を新たな視座から捉え直すことを試みたい。

本企画では、さまざまな角度から身体というものを意識して臨床実践や質的調査を行ってきた方々の話題提供、指定討論を通じて、身体がいかに文化的なものに絡めとられているのか、あるいは文化がいかにして身体化されているのかについて、考えていく。まず、企画者の町田から、性別違和を有する方々とのインタビューの事例を紹介し、我々の身体に付される社会的・文化的意味について話題提供させていただく。大倉氏からは、心理療法の一技法であるフォーカシングの事例から、我々の身体に社会的・文化的・言語的秩序がいかなる仕方で刻み込まれているかについて論じていただく。さらに西村氏からは、医療現場における看護師の実践がいかに過去の実践や病棟という場の文化（文脈）に根差しているかという切り口からお話しいただく。これらを踏まえて、荘島氏から、各話題提供者の語る「文化化された身体」「身体化された文化」の各側面がどのように関連するのかをまとめていただくとともに、身体感覚が生身の体験ではなく、社会的文脈と切り離せない感覚であると考え、どのような視点がもたらされるのかについて展望していただきたく思っている。

以上の話題提供・指定討論を踏まえた上で、フロアの方々との討議を経て、身体論を心理学研究の中にどのように位置づけるのかについて考えていきたい。

性別違和から考える文化化された身体

町田 奈緒子（京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士課程1回生）

<発表要旨>

性別違和とは、体験または表出するジェンダーと、指定されたジェンダーとの間に不一致を感じ、それに苦痛を感じている状態である。従来の性別違和に関する研究は、性別に対する違和感と心理学的特性との相関、また他の精神疾患や障害との関係にその焦点が当てられてきた。その一方で、当事者の語りから性別違和という体験そのものについて記述し、彼らの性のありようや彼らが生きている困難について考察した研究はそれほど多くない。今回の発表においては、性別違和を有する方々に対して話題提供者が行っているインタビューの一端を紹介する。性別違和体験について考察することは、我々の身体が生身のまま存在しているのではなく、社会的・文化的意味を付与されたものであることに気付かせてくれる。報告を通じて、我々の身体がいかに「文化化」されているのかについて考察することを目指したい。

フォーカシングにおける「治癒」の分析

大倉 得史 先生（京都大学大学院 人間・環境学研究科）

<発表要旨>

心理療法の一技法であるフォーカシングは、一般的に、「身体感覚に注意を傾ける」技法として、あるいは、社会生活において置き去りにされた「生命の声」を聞き取る技法として理解されている。確かに、フォーカシングによって、私たちは、普段の社会生活では気づかなかった「無理」や「違和感」を初めて見出したり、「説明不能な感情」の背後に潜む「心の叫び」を聞いたりすることがある。ただし、そうした諸々の感覚や「心の叫び」は、必ずしも「なまの生命現象」ではないと思われる。言い換えれば、フォーカシングとは「社会・文化・言語」への繫縛から「生命・自然・身体」へと回帰する技法であると理解したくなるかもしれないが、実は、そもそもこの二者はそう明確に切り分けられるものではないのではないかということである。

今回の発表では、フォーカシングの事例を分析することを通じて、私たちの身体に社会的・文化的・言語的秩序がいかなる仕方で刻み込まれているか、また「治癒」のプロセスにおいて身体がそれらをどのように編み直していくのかを考えていきたい。

医療現場における“看護師たち”の協働実践と生成

西村 ユミ 先生（首都大学東京大学院 人間健康科学研究科）

<発表要旨>

医療現場において看護師たちは、患者の命や生活を、複数人で交代しながら支えている。私はこれまで、こうした看護師たちの実践がいかに成り立っているのかを、フィールドワークやインタビューを通して探究してきた。その結果、看護師たちの実践は、一方で、患者の苦しみや変化への直接的な応答として記述された。しかしこの応答は、単にその都度の患者の状態に応じたものではなく、その看護師が蓄積してきた過去の実践が捉え直され、かつ未来を先取りしつつ作り出す現在の応答であった。この直接経験と時間性を孕んだ実践には、いつも患者の状態を申し送り、相談し、ともに動くこと等を繰り返してきた他の看護師たちの実践が反映され、協働の素地となっていた。また、それは同時に、その現場（病棟）の実践の方法とも言える“文化”を表わすものとして生成されていた。本発表では、協働実践とともに、その場の文化がいかに生み出されているのかを考察したい。

質的心理学研究・実践における「ま」の可能性

企画・話題提供者： 天野美和子（白梅学園大学）
小林恵子（榊富士ゼロックス総合教育研究所）
駒崎 俊剛（東京医療保健大学）
宮本匠（兵庫県立大学）

企画主旨

昨年開催したシンポジウム「質的心理学研究・実践における『ま』の探求」では、多くの会員に参加していただき、私たちの社会における「ま(間)」がどのような意味をもっているのかについて様々な議論が行われた。本年は、昨年のシンポジウムの議論の中から、『ま』(間)とは未だ意味づけられていない可能性ではないか」といった「ま(間)」が何らかの新しい関係性や意味を創出する場になりうるのではないかという意見に着目して、参加者とともに議論を継続し深めたい。その際に、私たちの世界に新しい意味を生み出す「ま(間)」とは、あくまで偶然の産物なのか、それとも何らかの場の設計は可能なのか、つまり「ま(間)」は「目的的にデザインできるのか」という点を論点とし、私たちの生を豊かにする可能性を秘めた「ま(間)」を質的心理学研究・実践としてどのように捉えられるのか、本年もさまざまなバックグラウンドをもつ参加者とともに考えてみたい。

「間」は意図的に作り出せるものなのか

一幼児にとって「間」という概念はあるのかという視点を手がかりにして—
天野美和子（白梅学園大学）

私の研究フィールドは幼稚園や保育所などの保育の場である。言うまでもなく幼い子どもたちが集団で生活する場である。多くの幼児は、この保育の場において就学までの数年間を過ごし、やがて小学校へと進んでいく。しかし、その移行時に今まで慣れ親しんだ園生活から小学校への移行がスムーズに行かず「段差」を上手に越えることができず困難を抱える子どもが少なくない。これには幾つかの要因がある。その一つに、園生活では、「遊び」をととても大切にし、「生活」「遊び」「学び」が連続している一方、小学校での生活は教科ごとに時間割が区切られており、授業の一定時間はその教科に集中して取り組むという形態の違いがある。保育の場では「生活」「遊び」「学び」が一方向的ではなく互いに循環している。つまり、幼児は例えば興味を持った「遊び」をすることで何かを発見し「学び」、それが日常の「生活」の様々な場面や事に繋がり、その「生活」を模倣的な「遊び」にしする…というように。このように考えた時、私たちがテーマとしている「間」というのは、そもそも幼い子どもたちに存在するのであるか？「間」というのは大人、もしくはある程度の年長者が捉えるものなのではないか？という疑問が筆者の頭を過ぎった。昨年のシンポジウムにおいて多くの参加者とともに見出したことと併せて、幼児に「間」という概念が存在するものなのかも視野に入れて、さらに「間」というものの真相について参加者と共に深めたい。

異質性の中の「ま」の持つ意味

小林恵子（榊富士ゼロックス総合教育研究所）

私は、企業組織という環境で人々はどのように学び成長していくのか、をテーマにしている。前回の問いは「一見無駄とされている非公式のやりとりの中で、人々は学び合い動機づけられている。組織行動として項目化されない『ま』に起こるそのような学び合いを、なんとか促進できないだろうか。」「『ま』がもたらすあいまいで感情にあふれたやり取りこそ、予期しない新しいことを生み出す可能性なのではないか。」というものであった。それは、「ま」というものが、まさに人々の意味

の交換を促進する場になっていたことを示していたからである。

この、存在としてあいまいで、合理性を追求する時には無駄とされる「ま」が、必然として促進される可能性が見えてきた。それが多様性の高い、多文化の入り混じるビジネス環境で成果を出すという、企業組織にとって今一番切実な課題の一つと向き合う時である。価値観、生きてきた背景、得意分野、長年使ってきた言語、どれをとっても自分と異なる他者と、境界を越えて成果を出せる組織をつくることを目指してもなかなか難しい。ある分野の専門家になればなるほど、狭い世界の、井戸を深く掘ることに知力が費やされ、全く違う井戸で何が起きているか気にしなくなるからである。しかしこれでは、目まぐるしく変わる環境で企業は生き残れない。

異質なことにあふれ、不確実性の高い、あいまいで変化しやすいビジネス環境で、実は「ま」が異質を埋めていく空間のような働きがあるのでは、と考えている。「異なること」が、ギャップとしての「ま」を生む。そのギャップをどうしたら埋められるのか、どうやれば相互に歩み寄り意思の疎通が図れるのか？という行動が、ともに同期していこうという思いを生むのではないか。それを考えると、「ま」は、実はもっと積極的な意味があるのではないか。

異質なものをつなげる、意外なコトがつながる、非連続がつながっていくための、はやり言葉で恐縮だが「イノベーション」を引き起こす可能性をもった「ま」の潜在力を皆さんと一緒に考えていきたい。

仕事と仕事の「間」＝休暇における看護師の他者への関心と関与の構造

駒崎俊剛（東京医療保健大学）

看護師は、勤務時間外にも看護業務に関連する様々な活動を行っている。例えば、新人看護師を対象にした勉強会や新しい技術の習得などである。一見すると業務上、必要な資源の不足から起こるようにも見える。しかし、2011年に行った筆者による調査によれば、先に例示した活動は、看護師の同僚や患者に対する関心に駆動された関与のあらわれであるとも言える。また、休暇における他者への関心と関与のあらわれた方には、看護職の経験年数により4つのあらわれ方があることが示された。これらの活動のあらわれ方の異なりは、看護師個人の何らかの特性によるものなのか、それとも職位や経験年数によるものなのか、病院や病棟の組織風土によるものなのか。また、これらの活動は、再生産され続けるのだろうか。そこで、前回の調査時と同一の看護師から協力を得て、休暇における活動の様子を再び調査している。この調査結果をみなさんと共に検討したい。

内発的な災害復興プロセスと「ま」のデザイン

宮本匠（兵庫県立大学）

私が研究してきた災害復興のプロセスにおいて、未だ意味づけられていない可能性としての「ま」は、2通りの意味での「他者」との出会いの中にあると考えられる。第一の「他者」は、連続体としての日常を断絶する「災害」である。災害による破壊は、「当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかった」というような言いまわしで表現されるように、日常時に存在していたものが、もうここにはないことを人々に強く感受せしめることによって、それが存在していたときとは異なる形で新たな意味づけを人々に促す。第二の「他者」は、災害を引き金として、被災地内外でもたらされる人々の交流を通じた「他者」との出会いである。いずれも、災害からの復興過程において、被災した人々が回復を遂げていく際に、自らの生をどのように意味づけなおすことができるのかについて、重要な役割を果たす「他者」であるが、被災者の生の実存を満たすような意味づけにいたるかどうかは、さしあたって蓋然的であるとしか言えないようにも考えられる。ワークショップでは、こうした蓋然的であるとしか言えない他者との出会いを何らかの形でよりよい形で設計することが可能なのか、議論を行いたい。

『質的心理学フォーラム』編集委員会企画 「境界のデザイン」と質的研究

企画：岡部 大介（東京都市大学）・中塚 朋子（就実大学）
司会：岡部 大介（東京都市大学）・中塚 朋子（就実大学）
話題提供者：南部 美砂子（はこだて未来大学）
話題提供者：秋谷 直矩（山口大学）
話題提供者：西倉 実季（和歌山大学）
指定討論者：香川 秀太（青山学院大学）

<企画主旨>

本シンポジウムでは、質的研究のフィールドで観察される「境界のデザイン」というべき実践やその意義について議論を行う。

これまで「境界」をめぐる現象は、質的研究において分析の対象とされてきた。最近では、近年の境界論を検討する論集『越境する対話と学び』（香川秀太・青山征彦編,2015,新曜社）が刊行され、そこでは心理学のみならず、組織経営、看護医療、教育といった様々なフィールドにおける「越境」論が議論されている。

人々が「境界」を問う事象は、さまざまな文脈において生じる。とりわけ、異なる背景を持つ人々の間で行われるコミュニケーションやコラボレーションは、「境界」を可視化あるいは不可視化する。たとえば、地域や国境などを巡る争い、組織や集団間の協働、社会的な属性や自己認識に関わるカテゴリー化実践など、「境界」に関する相互行為は多岐にわたる。

「境界のデザイン」は、異なる領域の人々の交流を促し、互いの重なりや共有部分を創出することがある。それは同時に、文化的、歴史的に生じた差異を単純に解消するのではなく、むしろ変化の原動力として活かすこともある。本シンポジウムでは、「境界のデザイン」という活動をより動態的のものとして捉えながら、その意味とともに検討していきたい。

<話題提供>

大学連携ワークショップにおける境界のデザイン ——記録係のリフレクションの分析から——

南部 美砂子（はこだて未来大学）

ワークショップは「みんなといっしょに何かを創りながら学ぶ」という活動の場である。ひとりではなくみんなといっしょであることには、どのような意味や価値、苦労や困難、努力や戦略があるのだろうか。またそこでは、どのような創造と学習が起きているのだろうか。

本発表では、ふたつの工学系大学による連携ワークショップを取り上げ、そこに記録係として参加した上級生たちのリフレクションの発言・議論の分析から、境界をめぐるできごとをとらえた事例を紹介する。この分析において導入した状況論、越境論、そして境界のデザインという視点は、ワークショップにおける学び、とりわけ学習目標の想定の外に生じた学びを浮き彫りにする強力なツールとなった。ワークショップとは、想定外を生みだすための装置であり、境界へのアプローチ（境界上での躓きや挫折も含む）こそが、ワークショップならではの学びなのである。シンポジウムでは、境界デザインとしてのワークショップの可能性について、実践例にもとづき議論したい。

“境界のデザイン”におけるカテゴリー化実践

秋谷 直矩（山口大学）

「Xを『境界』と呼び、かつ、それを創りだしていく手続きを『デザイン』と呼ぶ」——こうした記述を可能にしているものはなにか、がまずもって問われるべきである、ということが私の話題の趣旨となる。おそらく、こうした言葉で研究者によって再記述された「活動」は、「人びとが実際にやっていること」とは幾分異なる概念布置のもとで再構成された何かである可能性がある。では、「人びとが実際にやっていること」と「研究者による再記述」の間に何があって、何が起きているのだろうか。こうした問いを立てると、ときに「研究者の権力論」のようなものに回収されてしまうが、そうではなく、この問いを探究することで、活動の理解と記述の関係についてひとつの見通しを与えたい。それにより、「境界のデザイン」として名指されたさまざまな人びとの活動（それは企画側から明示されると期待している）をどう記述するのかという点についてもフロアとともに検討したい。

公／私の境界を引き直す

——個人的な経験を排除しない「障害の社会モデル」であるために——

西倉 実季（和歌山大学）

「障害の社会モデル」とは、障害者が直面する困難の根本原因をその人の心身ではなく、社会の側の障壁に求める考え方である。これに従えば、疾患や外傷が原因で顔に外観上の損傷をもつ人々も新たに「障害者」に含まれ、法的保護が受けられる可能性がある。しかし、日本国内の外観上の損傷をもつ人々には「障害者」とみなされたくないという反発が根強い。

本発表では、このような反発が生じるのは社会モデルが外観上の損傷をもつ人々のリアリティを包摂できていないためではないかという観点から、社会モデルの射程を批判的に検討する。これまで個人的とされてきた事柄を政治的問題へと変換してきた社会モデルにおいてさえも、公／私の境界線が恣意的に引かれることで、依然として個人的な性格が与えられがちな問題がある。外観上の損傷をもつ人々にとってはこうした問題こそが重大であることを指摘し、社会モデルにおける公／私の「境界のデザイン」について議論したい。

『質的心理学フォーラム』第7号 特集テーマ「境界のデザイン」

企画趣旨

岡部 大介・中塚 朋子

基幹論文

境界のデザイン —ソーシャルファブリケーションの現場から—

岡部 大介

論文

人工物の利用を通じた成員性と「境界する物」

—キャラクターを支える遊びとしてのコスプレを対象に—

松浦 李恵

大学連携ワークショップにおける境界のデザイン

—記録係のリフレクションの分析から—

南部 美砂子・大塚 裕子・富永 敦子・藤野雄一

アーカイブづくりの活動における境界のデザイン

—水戸芸術館現代美術センター高校生ウィーク「アーカイ部」を事例として—

石田 喜美

“境界のデザイン”におけるカテゴリー化実践

秋谷 直矩

公／私の境界を引き直す

—個人的な経験を排除しない「障害の社会モデル」であるために—

西倉 実季

討論 生の運動としての「境界のデザイン」

岡部 大介・中塚 朋子

身体知としての「参与しつつの観察」の研究 — 初期過程における深化の目印（指標）—

企 画：南 博文（九州大学）
司 会：南 博文（九州大学）
話題提供者：澤田英三（安田女子大学）
話題提供者：濱田裕子（九州大学）
・ ：南 博文（九州大学）
指定討論者：石井宏典（茨城大学）

<企画主旨>

Sullivan（1961）が提唱した「参与しつつの観察」という方法概念は、臨床面接において用いられたものが、自分とは異なる背景を持つ他者の生きる生活文脈に自ら飛び込んでいくフィールドワーク全般に適用される「場に入っていく」過程について、参与と観察という指向の異なる極を同時に実現する生身の体験を描く指導原理として用いられてきた。フィールドに入った初期に起きる、まだ「なじまない」者が呈するいくつかの行動上、体験上の特質に着目し、そこに展開しつつある「場が分かっていく」様子、感じとその前後の変化の目印を、深化の指標として捉える可能性を議論する。具体的な場として、漁業者のコミュニティに入っていく発達の参与観察の場、看護実習で病院・病棟に入っていく制度的な施設での実習生の指導の現場、都市における祭礼に自ら行為者・担い手として参入する例を取り上げる。

1. フィールド内で自分らしくあれる場ができること

澤田英三（安田女子大学）

<発表要旨>

フィールドワークの初学者にとって、フィールドで自由に調査活動を行えるようになるまでの過程では、そのフィールド内に自分らしくあれる場（居場所）ができることが重要であり、初期過程における深化の目印（指標）となると思われる。

調査者がフィールド内で活動するとき、その「異人性」（佐藤，2002）を確保しておくことが不可欠である。異人性とは、当事者でも完全な部外者でもない視点を保つことであり、現場の人と適切にラポールをとりつつ、異人の視点をもって調査活動を行うことである。そしてこの異人の視点を活かすためには、フィールド内での活動の自由さが求められる。しかし一方で、この何にも偏らない立場の不明確さは、初学者の行動に不自由さをもたらすだけでなく、フィールドにおける居場所のなさが時には耐えられないほどのストレスにもなりうる。フィールドワークの始まりは重要なインフォーマントとの出会いと関係の構築から始まるが、初期の居場所のなさがある特定の人との関係を深め、逆に立場の異なる人からの有力な情報を得る機会を逸することにもつながりかねない。フィールドへの参入を繰り返した経験者はこの弊害を知っており、意図的に人間関係が偏らない工夫を凝らしながら参入していくのである。

本話題提供では、上記のことを踏まえて、フィールド内で自分らしくあれる場を居場所としてつくっていく過程を例示するとともに、そのような場ができてくる過程で感じられる場所に対する感じ方や自分の身体・姿勢に対する意識をモニターする指標を提案する。

2. 看護学生が隣地実習の現場に身を置くということ

濱田裕子（九州大学医学研究院）

<発表要旨>

看護学生は病院や施設などの現場に身を置き、1年近く、実習を重ねていく。「臨床実習」や「隣地実習」と呼ばれるその現場は、病気や何らかの健康障害をもつ人々が治療や検査、ケアを

受ける場であり、同時にケアの提供者である専門職が働いている場でもある。また、その現場は、時に患者や家族から「こんな世界があった」と表現されるような特殊な場でもある。

そのような場に参入する初期過程にある看護学生が直面するのが、その場への「居方のわからなさ」である。ここでの「居方」には大きく2つの側面があるといえる。一つにはその場に流れている時間や空間への居方であり、もう一つは病気や障がいと直面している患者や家族との向き合い方であろう。例えば、前者の例でいうと廊下を歩く動作一つとってみても、学生の歩くスピードや場所は、職員のそれとは明らかに異なっている。また、学生にとっては、患児や家族とのコミュニケーションが大きな課題となり、中には「会話ができる」ことが目標になる学生もいる。しかし、熟練した看護師は会話の有無に関わらず「いっしょにいる」ことや具体的なケアを通して、コミュニケーションをはかり、点の情報をつなげ、患者や家族の具体的な「像」を結び、向き合っていく。

ここでは看護学生が隣地実習の場に身を置く中で、身体知としてその現場を感じて、変化していくプロセスをどのように捉えていけるのか、「指標」となるものは何か、会場の皆さんと一緒に考えてみたい。

3. 書く〈からだ〉の生成

南 博文（九州大学人間環境学研究院）

＜発表要旨＞

「山を昇ってみた博多」（南, 2008）に記した、行為者として祭りに参与した過程を、「場に臨む〈からだ〉の生成」の観点から、エスノグラフィーを書く基礎論として捉え、論じる。具体的には、福岡市の夏の祭礼行事に祭りの「昇き手（走り、かつぐ人）」として10年間関わった経験から、山（神輿）といっしょに走るという一見単純な行為の中で、「足並みが揃う」「山の前の間（空間）がひらける」「山に勢いがある」という事が、了解されていった過程を扱う。それらは昇る行為の外に立っていたらわからない、その中に居ないとわからないことであり、その身体にならないとわからないことであった。しかし、逆にその身体になりきっている人はもう話さないことでもある。その身体に完全にはなりきっていない、まさに今なろうとしているという中途半端な「初期状態」において感取され、さらに言葉に置き換える作業に乗せられる「現象（現れること）」であるという仮説の下で、エスノグラフィーを「書く人になる」過程を議論したい。

ここでの身体は、意識される過程ではなく、例えば「足が痛い」といった感覚において感じられる場所であり、「足が揃う」もそれが出来なかった際に「躓く」という出来事において出来事化する事象である。スムーズに運んでいる状態は、「共同身体」と名づけられるような協応した多数の足がリズム良く運行している全体性を持っており、こうした分化しがたい作用する身体を〈からだ〉と呼んでおく。この水準を扱う際に、現象そのものではなく、それが表面化する、衝突、不具合、ちぐはぐ、などの変調を、現象の突端として捉える「指標」の視点がもたらされると考えてはどうか。

以上の話題提供を受けて、出来事としてのフィールドワークの初期の過程に起きていることを、石井宏典氏（茨城大学）のコメンタリーを受けながら会場の方と相互検討する。その際に、熟達者・熟練者、初学者、新参者、初期過程など、関連しながらも異なる側面を扱う用語と共に、体験様式の変化を議論する。

ビジュアル・ナラティヴの方法論と多様なこころみ

企 画：やまだようこ（立命館大学衣笠総合研究機構）
司 会：やまだようこ（立命館大学衣笠総合研究機構）
話題提供者：やまだようこ（立命館大学衣笠総合研究機構）
話題提供者：村上賀子（写真家・武蔵野美術大学造形学部）
荒川歩（武蔵野美術大学造形学部）
話題提供者：後藤一樹（慶應義塾大学大学院社会学研究科）
指定討論者：家島明彦（大阪大学教育学習支援センター）

<企画主旨>

ナラティヴが「経験の有機的組織化」と定義されるならば、その組織化のしかたは、狭義の言語様式に限定されないはずである。従来、ナラティヴ分析は、「時間順序」「時間秩序」など時間軸を重視したものや、「主人公」に注目するものが多かったが、これは言語構造、特に西欧語の語り方の様式に基づくところが大きかったと考えられる。

本シンポでは、ナラティヴ（語り・物語）研究における言語中心主義から「ビジュアル・ターン（視覚的転回）」へという方向性を打ち出してみたい。それは、かつて写真やVTR映像などビジュアル・データを、単なる研究素材とし、言語による論述を示すための証拠資料として補助的に使った方法とは根本的に異なる。ビジュアル・ナラティヴは、それ自体がビジュアル特有の「テキスト」であり、独特の「経験の組織化のしかた」「語り方」「コミュニケーション方法」をもつので、その特徴を生かすべきである。ビジュアル・ナラティヴは、狭義の言語とは異なる特徴をもつ、優れた語り様式である。

ビジュアル・ナラティヴは、言語によって構成される時間構造や、言語によって作られる概念枠組を超え、イメージを飛躍させ、感性や感情の伝達を容易にし、異文化コミュニケーションに威力を発揮する。現代社会では、ビジュアル・プラクティス、つまりマンガ、アニメ、映画、ゲームなど、ビジュアルで考え、ビジュアルで語り、ビジュアルで伝える方法は、すでに大いに使われている。しかし、学問は旧態依然とした言語中心主義で語られている。ビジュアル・ナラティヴを学問の方法論として練りあげていく必要がある。

喪失と再生のビジュアル・ナラティヴ：日系アメリカ人の強制収容所の事例から

やまだようこ（立命館大学衣笠総合研究機構）

第二次大戦における日系アメリカ人の強制収容所のフィールドワークとビジュアル表現「尊厳の芸術としてのものづくり」「戦争と少女の写真」「収容所の風景画や絵本」をもとに、ビジュアル・ナラティヴの理論と方法論を「レジリエンス（復活力）」と関連させながら考えてみたい。喪失は「ものの語り」の母である。大切なものが失われたとき、失いそうになったときこそ、新しいいのちを得て「ものの語り」は生まれ変わる。感動につき動かされる出会い、美術品に真に出会うときがそうであるように、「もの」と向き合うときには、言葉にならない熱いものが身体をかけぬける。教義の言葉による説明は、不十分な器でしかない。「ものの語り」は、生きもの、生もの、生まれるものである。現場（フィールド）で出会うビジュアルな体験、いきいきした感動、身体で感じとる感覚こそ、ものの語り生成の母胎になると考えられる。

見る者に開かれたメディアとしての写真：私的経験としての震災におけるパブリック性 村上賀子（写真家・武蔵野美術大学造形学部）・荒川歩（武蔵野美術大学造形学部）

震災の写真というと、津波の写真であったり、無残に破壊された家であったり、その恐ろしさを前景化した写真が多い。それはもちろんこの震災という出来事の顕著な特徴を表している。そして、被災者というこのような生死にかかわるような体験や長きにわたる避難所生活が第一に思い浮かべられることが多い。しかし、他方で、そのようなレベルでの被災はなかったとしてもその人生を大きく乱された人たちは多くいる。その人たちは「（それだけですんで）よかったね」といわれ、語る言葉を奪われてしまう。

たくさん奪われたこのような言葉、自分自身どのようにとらえていいのか分からない、乱された個々の生活への何とも言いようのない思いを、写真は判断保留のまま、他者に提示可能な形にすることができる。しかし、写真は、光そのままを「無意味に」張り付けるものではない。写真は、語りと同様、それを撮る側とも対話する発見のメディアであり、見る側をその意味を強制しないままに、感じとる現場に巻き込むことのできるメディアでもあるだろう（写真家の視線がその手掛かりとして埋め込まれているだろう）。発表者の村上は、写真家として、このような写真の特性を生かし、作品を作り続けてきた。本発表では、村上が自身の作品の一部を紹介しながら、何が写真によって、写真だからこそ表現できるのかについて話し、荒川が、質的研究の立場からそれを位置づけることを試みる。写真を作る側と見る側の共有の有り様とその可能性を他の方法と比較することを通して、ビジュアル・ナラティブの可能性を考えたい。

<関係イメージ>の生成：「歩きながら撮る」四国遍路のビジュアル・ナラティブ調査を事例として

後藤一樹（慶應義塾大学大学院社会学研究科）

本発表は、2015年に後藤が歩きながら撮影した四国遍路の映像を分析対象とする。

巡礼する「遍路（被写体1）」、遍路を迎える地元の「お接待者（被写体2）」、自身も遍路として歩く「研究者（撮影者）」の関係の動態が現れた映像を<関係イメージ>と名付け、その社会的特性を明らかにすることが本発表の目的である。

ジル・ドゥルーズは、『シネマ1』（1983=2008）、『シネマ2』（1985=2006）において、<運動イメージ>と<時間イメージ>を記号の体系として類型化したが、後藤の提示する<関係イメージ>を概念化することはできなかった。

一方、ドキュメンタリー映画作家の間では、被写体と撮影者との相互作用において変容する<関係イメージ>について、活発な議論がなされてきた。

佐藤真が、撮影者を「黒子」としてカメラの後ろに配置し、被写体の語りや行為のみを映像で表現する方法をとったのに対し、松江哲明は、撮影者を「語り手」あるいは「被写体」として画面に映し出す戦略をとった。口述史研究の文脈から解釈するのならば、佐藤は中野卓らの「ライフヒストリー研究」の立場に近く、松江は桜井厚らの「ライフストーリー研究」の立場に親和的であると言える。

本発表では、松江の撮影手法を用いて<関係イメージ>の生成に積極的に関与し、それを再帰的に分析する後藤の方法論から、ビジュアル・ナラティブ研究の可能性を探求する。

語り直しの心理学 —その様相と機能の探求—

企画・司会：能智 正博（東京大学大学院教育学研究科）
話題提供者：広津侑実子（東京大学大学院教育学研究科）
坂口 由佳（東京大学大学院教育学研究科）
横山 克貴（東京大学大学院教育学研究科）
指定討論者：山口 智子（日本福祉大学子ども発達学部）
川野 健治（国立精神・神経医療研究センター）

＜企画主旨＞

人が物語り（ナラティブ）を通じて自己や体験を理解し、世界を構築していることは、ナラティブ研究においてはもはや1つの前提と言ってよい。ただ、物語りは一度限りで完結するものではないという点もまた忘れてはならないだろう。ある意味で、物語るとは語り直すことにほかならない。その物語りが本人にとって重要なものであればあるほど、物語りは異なる状況のもとで異なる聞き手に対して語り直される。そして語り直しのたびに物語りの「本当らしさ」が高まることもあれば、内容のバリエーションが増えたりすることもある。何度かの語り直しの末には、語り手が当初考えていなかったような語りが生成されていることもまれではない。

私たちの世界には語り直しの実践やそれに関わる現象が満ちあふれている。たとえば心理療法的なアプローチは、そうした語り直しを引き起こして語り手の自己理解を深めたり問題を解決したりしようとする試みであるとも言える。また、冤罪などに伴う虚偽自白は、特殊な状況のなかでの語り直しが物語りをねじ曲げてしまった結果であると考えられるだろう。語り直しは、語り手の認知の変化を反映しているという面を伴うばかりではなく、語り手の生きる世界を変化させてしまう可能性も孕んでいる。

そうした語り直しは場当たりの生じるわけではなく、ある種の規則性や共通特徴をもっていると考えられるが、まだその知見は質的心理学のなかでも蓄積され始めたばかりである。そこでこのシンポジウムでは、様々な形のインタビューを「語り直し」という切り口で検討した研究をいくつかとりあげて、語り直す行為がどういう条件のもとでどのように生じるのか、そしてまた、それはどういう機能をもちどういう帰結をもたらすのか探求してみたいと思う。具体的には、聴覚障害をもつ人の語り、自傷体験をもつ人の語り、大学生のネガティブ体験の語りについて、語り直し資料のマイクロ分析の結果を示していく。指定討論には、独自の立場からナラティブ研究を蓄積してこられた二人の研究者の方をお願いした。時間の許す限りフロアとの対話も交えながら、語り直しの様々な面についての議論を深めていきたいと思う。

ろう者と聴者のコミュニケーションの場での語り直し

広津侑実子（東京大学大学院教育学研究科）

＜発表要旨＞

近年、手話に対する関心や社会的認識が広まってきている。ろう者（聴覚障害のある人）に関しても、障害という枠組みから離れて、聴者（聴覚障害のない人）とは異なる文化をもつ存在と捉えられることもある。今回、手話が堪能なろう者（Aさん）に対して、手話を学習中の身であ

る聴者（発表者H）が実施した二度のインタビュー事例について発表する。この事例の特徴の一つに、Aさんの用いる「表現のチャンネル」の違いがある。1回目では音声日本語を話しながら、日本語対応手話（日本語を手で表すこと。語順も単語もすべて日本語の話しことばをそのまま手話に置き換えたもの（長南, 2005））で表出していたが、2回目では音声は一切発さずに日本手話（ろう者独自の手話）のみで表現する、という変化があったのである。それは、唐突に起こったわけではなく、語りの流れや両者の関係性の成熟などに関連して生まれてきたものと考えられた。他にも、諸々の背景や条件の影響を受け、Aさんの語り口や表現の仕方、またそれに対するHの解釈や応答は異なっている。発表ではいくつかの場면을提示し、ろう者・聴者との接点における手話をういた語りや語り直しの様相と機能について検討していきたい。

自傷行為経験者における学校での体験の語り直し

坂口 由佳（東京大学大学院教育学研究科）

＜発表要旨＞

中学生・高校生の約1割に自傷行為の経験があると言われており、学校現場では彼らへの対応が日々求められている。しかし、自傷行為をする生徒たちの視点や体験を扱った研究が乏しく、よりよい対応を考える上で対応の受け手側の体験を知る必要がある。また、対応の受け手のその場におけるニーズに応えるだけでは不十分であり、その場では低い評価を受けたとしても、生徒たちが成長一定期間後に振り返ってよかったと思えるような対応も重要である。坂口（2013）では学校の対応を受けている最中に書かれたブログの語りを分析したが、今回は自傷行為をしていた生徒たちにとって学校の対応はどのような体験であったのか、その数年後にその体験がどのように語り直されるかについて検討を行った。調査対象者は2名の自傷行為経験者である。体験直後のブログでの語りと卒業から数年経った時点でのインタビューでの語りの比較の結果、語られる内容の違いや同じ出来事に対する評価の違いが見られ、体験に対する意味づけと自傷行為の捉え方の関連性が明らかになった。

語り直しにおける時制が想起の仕方に与える影響について

横山 克貴（東京大学大学院教育学研究科）

＜発表要旨＞

過去の経験を語り直す時、たいていの場合、私たちは過去形という時制を用いて当時の出来事を語ることになる。これは、人間が経験を時間軸上の過去に位置づけて捉えていることの表れであり、この時制の選択は、意識されることなく自然に行われている。しかしその一方で、いくつかの心理療法において、敢えて現在形で経験を語るという手続きが存在する。これは、現在形で経験を語ることが、経験を再体験するような想起を促し、このことが過去の経験にまつわる心理的な問題の解決に役立つと考えられているのである。筆者は今回、大学生の研究参加者を募集し、これまでに経験したネガティブな経験を題材として、時制（現在形／過去形）を統制した語りを行ってもらおうという実験を行った。そして、この特殊な語り体験を回顧的にインタビューすることで、経験の語りに特定の時制を用いることが、想起の仕方に与える影響について考察を行った。発表ではこの実験結果を材料に、時制という語り方が、経験を語り直す際に果たす機能的な側面について検討していきたい。

Nvivo10のワークショップ

講師：木村裕三（富山大学医学部英語講座教授）

専門は英語教育学。教室現場をフィールドとした量的・質的アプローチによる第二言語教育・学習の動機付け研究を展開。

本ワークショップは、NVivo 10 (Windows) のデモを通じ、質的データを系統的に分析・探索する方法を体感・習得して頂くことを目指します。デモ内容は、①様々な質的データのインポートとコーディング・ノードの整理、②データの分類化・グループ化、③系統的なデータ探索です。当日NVivo10をインストールした個人PCの持ち込みも可能ですが、限られた時間ですので、ワークショップ中個人へのフォローは実施しません。代わりに、スクリーンに一定のスピードでデモを展開し、その様子を視聴していただき、デモ内容は録画後、録画リンクを参加者に後日一定期間配信します。スマホ・ビデオ等によるスクリーンの撮影はご容赦下さい。尚、体験版NVivoソフトウェアのダウンロードやWindows版とMac版の機能差等、必要な事前知識についてはQSR Japan (<http://www.nvivo.jp/>)をご参照下さい。

TEAアプローチ

講師：サトウタツヤ（立命館大学）

TEA（複線径路等至性アプローチ）はTEM（複線径路等至性モデル）、HSI（歴史的構造化ご招待）、TLMG(発生の三層モデル)の鼎立による統合的なアプローチです。今回のWSにおいては、良い研究を行うためのTEM的飽和、ということについて焦点をあてつつ簡単なレクチャーを行います。TEM的飽和とは、1）研究者が設定した等至点に対して適切な両極化した等至点（Polarized Equifinality Point; P-EFP）を設定できること、2）研究者が設定したEFPの後に起きたであろう調査参加者にとって意味のあるEFPを設定できること、3）そしてそのEFPに対して意味のあるP-EFPを設定できること、です。つまり研究者から見て適切なだけでなく、参加者にとって適切なEFPを設定し、そこに至る複線径路や、様々な力を描くことができれば、研究者自身としても研究をやりきった（TEM的飽和）と思うことができるでしょう。このTEM的飽和について、可能であれば簡単なデータ実習を行うことで体得してもらいたいと思います。

心に響いた体験は、いかに伝えうるのか ーエピソード記述への招待ー

講師：勝浦眞仁（桜花学園大学）・藤井真樹（名古屋学芸大学）

保育や教育の臨床の場に入り込んでいく中で、子どもたちの興味惹かれる姿に接して心が強く動かされることや、養育者の揺れ動く思いが深く印象に残ることがあります。また、障害のある子どもたちとかかわる中で、どのように受け止めていけばよいのか分からない体験に出会すこともあります。このような私たちの心に響いた出来事や体験を描き、誰かに伝えたいという方々を対象とした、「エピソード記述」のワークショップです。

このワークショップでは、模擬体験として、ある映像をご覧ください。その映像の中で、皆さんの心に響いた場面を切り取り、エピソードとして描いていただきます。描き方（背景・エピソード・考察）は当日詳しく紹介します。そして、そのエピソードをフロアの方々と互いに読み合い、語り合う中で生まれる、描き手と読み手の「ずれ」と「重なり」を体感することを通して、エピソード記述がなぜ必要とされているのかを考えていければと思います。

10月4日（日） 15：45-17：45 【ワークショップ】 720教室

自己エスノグラフィ入門

講師：沖潮（原田）満里子（湘北短期大学）

自己エスノグラフィ（autoethnography）とは、研究者自身の経験のエスノグラフィという質的研究のひとつの形態である。自叙伝的な記述をとおり、個人と文化を結びつける重層的な意識のあり様を開示していくものである（Ellis, 2004）。近年、心理学や社会学において注目を集めつつあり、この手法による論文も散見されるようになった。本ワークショップでは、はじめに自己エスノグラフィの歴史、基礎概念、利点や難点について紹介する。また、従来の自己エスノグラフィに対話の要素を取り入れて発展させた、対話的な自己エスノグラフィ（沖潮, 2013）について、その具体的な方法を研究例と合わせて概説する。それらをふまえて、自己エスノグラフィを進めるための工夫や、遂行していくなかで生じる困難や注意点、および自己エスノグラフィのもつ今後の可能性についても考えていきたい。

No001 **特別支援学校教員が捉える「キャリア教育」実践の問題意識とは
一教員の意識調査における探索的分析から見てきたもの一**

石山貴章

就実大学教育学部 教育心理学科

矢野川祥典（高知大学教育学部附属特別支援学校）・宇川浩之（知大学教育学部附属特別支援学校）・田中 誠（就実短期大学幼児教育学科）

近年、特別支援学校における「キャリア教育」の実践研究が数多く行われるようになってきている。これは、これまでの特別支援学校「キャリア教育」の取組に関する見直しはもちろんのこと、日々の実践の成果と課題を実証的に検討していくことによって、現場実践と子どもたちの卒業後を見据えた支援のあり方が、どのような関連性をもっているのかを明らかにしたいという学校教員のねがいでもある。

本研究は、筆者が、継続的に「キャリア教育」を検討していくための第1報としての位置づけである。「キャリア教育」実践のあり方と教員の問題意識を明らかにしていくことを目的として、授業および教員の問題意識について探索的な検討を試みた。

今回は、特別支援学校教員に対して、質問紙調査を実施し、得られたデータを量的、質的な視点から分析を試みた。そして、分析結果を根拠として、現場教員は、一体、どのような思いをもって「キャリア教育」を実践しているのかについて仮説を生成しようとしたものである。

No002 **実践知の復活における断絶された世代をつなぐナラティブの役割
杉原紙復活における生成継承性の意義**

竹内一真

多摩大学グローバルスタディーズ学部

継承者が途絶えた実践知においては、先行世代から直接指導を受けられない。そのため、復活しようとする世代の間に埋めようのない断絶がある。本稿では断絶があるにもかかわらず1970年前後に復活を果たした実践知である杉原紙に着目し、復活にまで至った過程を明らかにする。具体的には実践知の復活に深く携わった当時35歳前後の3人の研究協力者にライフストーリーインタビューを行うことを通じて実践知の復活を捉える。本研究において特に着目したのが芸芸の復活に生成継承性がどのように関係しているのかという点である。3人が共に仕事においも家庭においても大きな負担となるにもかかわらず、実践知の復活に多大なる力を割いている。分析の結果、杉原紙という由緒正しい和紙という物語を基に、地域に眠る文化を掘り起こし、次世代につなごうとする語りが見られた。

*本研究はJSPS科研費 26885102の助成を受けたものです。

No003 **発達障害が想定されるきょうだいの想いと支援のあり方に関する探索的研究**

草野江里加

就実大学大学院人文科学研究科初等教 育学先攻 石山貴章（就実大学大学院）

本研究では、発達障害が想定されるきょうだい（姉妹）の心理体験を、PAC分析を用いて明らかにし、支援のあり方を検討した。「妹のこれまでの生活に関して、重要な出来事やイメージについて連想されること」という刺激文を用いて抽出されたクラスターは、「つらさ・母への不満・恐れ」「楽しい体験」「周囲とのかわり」「家庭の協力」「成功体験」の5つであった。一方、姉から抽出されたクラスターは「人とのつながり」「マイナスイメージ」「発達障害的」「諦め」の4つであり、思春期に妹へのかかわりについて葛藤を抱えていたことが確認され、その背景には妹に発達障害の診断が無く、長年、姉妹関係に「違和感」を抱いていたことが想定された。今回、当事者同士のPAC分析を行うことで、これまでの互いの想いが全体的な構造として意識化され、明確化された。また、PAC分析を行うことによる姉妹の心理的な安定の相互作用が見いだされた。

No.004 **社会人経験を有する新人看護師の研究**

柴田直之

帝京大学大学院医療技術学研究科看護 学専攻 星直子（帝京大学大学院医療技術学研究科看護学専攻）

国は、看護職不足の中、社会人経験者の看護職への取り込み促進施策を打ち出した。これを踏まえ、これまで少数であった社会人経験者の看護職を対象に、人材確保・管理の視点から検討することは、今後の重要な課題であり、本格的な研究開始が必至の段階である。

まず日本における研究動向を見ると、国の施策が策定された2013年以前はほとんどなく、2013年以後では年間数件から5件程度の調査報告が見られるようになり、方法はインタビューが主流であった。一方、高校卒業から直結しないアメリカなどの研究では、second degree、career changeなどの視点で、研究がなされていた。本研究では現在、公的機関の広報、報告書などの分析作業を進めている。今後は当事者のインタビューを計画である。今回は、本テーマに関するデータの広がり提示し、インタビューの対象者選択、特徴、分析上の留意点について、質的研究を熟知されている方々から助言をいただき、研究の進行へと繋げたい。

No005 基礎看護技術における実践としての〈相互身体的〉な関わり

鮫島 輝美

京都光華女子大学

井川 啓(京都光華女子大学短期大学部)・杉島優子(京都学園大学)

看護技術では「人による人に対する実践」にもかかわらず、「実践としての身体の有様」についてほとんど議論してこなかった。河野はこの「実践としての身体」の不在の原因の一つに、行動主義の影響を指摘しており、今後は認知科学において身体性の議論の必要を説いている。看護技術概念も「技術は人間実践における客観的法則性の意識的適用である」という「意識的適用説」が主流であり、多くの看護研究者が科学的根拠をもった「看護技術の法則性」を見いだすことに勢力を注いできた。しかし、この意識的適用説とは、元来〈物の生産〉技術として評価された概念であり、看護者や患者の主観的側面は軽視されがちで、〈人による人に対する〉技術には、別の概念：〈相互身体的〉な関係が必要だと、吾妻は指摘している。今回は、看護学生の技術練習の場面を分析する事で、基礎看護技術における身体性について考察する。

No006 創造性・即興性・協働性を鍵として「コミュニケーション」を問い直して開発した英語学習アクティビティ

三野宮春子

神戸市外国語大学

英語を含む言葉の教室では往々にして知識・技能の習得に目が奪われ、暗記・再生のプラクティスが偏重されることが多い。こうして「インプット」した知識・技能は、結果として、穴埋め問題のように予定調和的な活動において「アウトプット」できたとしても、その場で相手と意味を創っていく真正なコミュニケーションを支えるものにはならない。

本発表では、上述のような問題意識を出発点として試作・試用・修正を繰り返して開発した英語学習アクティビティと教材をいくつか紹介する。即興的・協働的な意味交渉が起こりやすくなるようなアクティビティ構造を設計することにより、思考・身体・感情が統合された主体としての学習者の創造的言語使用を刺激することを開発目標としている。

会場では、教材を手に取り、その場でできる簡単なゲームを試してみ、英語アクティビティ(日本語でも可能)についてのアイデアを交換・共有していただければ幸いである。

No007 向老期における人生の最終段階に向けた過ごし方

荒木亜紀

茨城県立医療大学

本研究の目的は、地域で生活する向老期にある人々の人生の最終段階に向けた過ごし方の特徴を示すことである。定年退職後、地域で活動している60~69歳の男女28名を対象に、4グループのフォーカスグループインタビューを行った。データを質的に分析した結果、『前向きに考える』『心身の調子を整え主体的に暮らす』『世話をし合える関係を家族や仲間と作る』『継がれるいのちに望みを託す』の4のコアカテゴリが抽出された。向老期の人は、前向きな考えを持ち、健康を維持しながら地域で活動して他者との交流を深め、家族とも良好な関係を築いていた。それにより人生の最終段階を見据え、自らの後始末をして、死後の望みを家族や友人に託すことで自律した死を決めていた。今後は、「死は生き方の先にある」と当事者自身が気付き、自らの言葉で死について語ることでできる場を設ける必要がある。

No.008 中高英語教員志望の大学生の理想的自己未来像の変化：コミュニケーション能力を育てる英語教育への動きをめぐって

熊澤雅子

桜美林大学

本研究は、中高英語教員を志望し大学の教職課程に在籍する学生を対象とし、彼らの英語教師としての自己未来像が、教職課程での学び、教育実習、留学などの経験の中でどう変化するかを継続的に調査している。理論的枠組みに可能自己理論(Markus & Nurius, 1986)を用い、特に文部科学省の推進するコミュニケーション能力を育てる英語教育にまつわる自己像に焦点を当て、約10名の研究参加者との定期的なインタビュー、授業観察などからデータを収集している。本発表では、大学2年次の教科教育法履修開始から、4年次の教育実習までの期間のデータを総括し、参加者個々の各種の可能自己の変遷を報告する。データ分析にはnarrative inquiry (Clandinin & Connelly, 2000)を参照し、参加者の語りの中に表出する自己像の変化を、研究者の視点からの語りとして提示する。

No.009 幼児の介入は対人葛藤場面の状況をいかに変化させるか：幼稚園における3年間の縦断的調査から

松原 未季

奈良女子大学大学院・日本学術
振興会

本発表では、幼稚園における3年間の縦断的調査から、幼児の介入は他児が起こしている対人葛藤場面の状況をいかに変化させるのかということ明らかにすることを目的とする。その手法として、幼稚園3歳児クラスに入園直後から5歳児クラスの修了まで3年間同一のコホートの幼児を縦断的に観察し、介入事例について、カテゴリーのコーディング及び解釈的分析を行った。その結果、3歳児では、葛藤場面に対する関心や要解決の事態としての認識はあるが、介入は教師の模倣的なものを中心であり、貢献としては葛藤場面を中断させることに留まった。4歳児では、介入児が自主的な意思を示すようになり、当事者の意図や内的状態に言及するようになり、介入が実質的に機能し始めた。さらに、5歳児になると、葛藤場面の原因の理解が進み、介入が中立的になり、介入児同士が葛藤場面の情報を整理、共有することで集団での協同的解決も可能になった。

No.010 青年期後期における生きる意味の諸相

福田律子

名古屋大学大学院教育発達科学
研究科

本研究では、個人が自分の人生における過去および現在、未来をどのように意味づけるのかという視点から、生きる意味の語りの背景について考察した。20～26歳の大学生あるいは社会人の男女17名に半構造化面接を実施し、M-GTA(木下, 2003)を用いて分析された。その結果、意味の内容としては【過去のみ】【現在のみ】【未来のみ】【過去と現在】【現在と未来】【全体的】【関連なし】の7カテゴリーが生成された。考察として、時間的に連続した意味を持っている場合には「恩返し」や「世代継承」といった概念を含んでおり、時間的に変化が少ない心情を表す語りになる可能性が示された。一方で、過去・現在・未来それぞれに意味を見出しはいるが関連があるようには語られない場合、またはぼんやりした語りである場合は、その後の人生の中で各概念が変化した、あるいは変化する可能性があり、流動的な心情を表すような語りになりうることを示唆された。

No.011 フリースクール設立者の志向性—複線径路・等至性モデル(TEM)による分析—

橋本あかね

大阪府立大学大学院

フリースクール設立者のライフストーリーを報告者は先にKJ法によって分析したところであるが、本発表ではTEMで分析することにより、KJ法による分析で見出された、個人の志向性以外のフリースクール設立・運営の要因を見出そうと試みた。そのため、〈フリースクールを設立する〉と〈フリースクールを継続する〉を等至点(EFP)に、〈フリースクールを設立しない〉と〈フリースクールを辞める〉を両極化した等至点(P-EFP)に設定した。同時に、フリースクールの設立・運営が最終目的なのではなく、それは設立者の人生における1つの到達点にすぎないということを示したいと考えた。そこで、概念ツールに統合された志向性(SPO)を加えた。その結果、設立者たちは様々な出来事や社会的方向づけの影響を受けつつも、統合された個人的志向性がフリースクールの設立・運営には強く影響を与えていることが改めて明らかになった。

No.012 言葉の力を探る：人を喜ばせる言葉、不快にさせる言葉

町田佳世子

札幌市立大学

言葉には人を喜ばせ、元気にする力、人を落ち込ませ、不快にする力があると言われる。人々はどのような言葉をかけられたとき、うれしく、または不快に思うのだろうか。本研究では、「言われてうれしかった言葉」、「言われたら嫌なことば」を大学生約100名に書き出してもらい、それらをコーディングし、複数のカテゴリーを抽出した。うれしかった言葉からは、認めてほしいという人間の欲求を満足させる「感謝」「人柄などに対する肯定的評価」「存在価値を認める」などのカテゴリーが見いだせた。「おはよう」「またね」など慣習的表現による「関係の確認や継続」もうれしく受けとめられていることがわかった。言われて嫌な言葉からは、上記の欲求を脅かす「人柄などに対する負の評価」「関係の拒絶」、自分が「不快の要因」とされること等が浮かび上がってきたが、これらが大学生の世代が経験してきた人間関係を反映したものかどうかは課題として残った。

No.013 地球環境問題ボランティアに取り組む青年Mの「自己/社会形成」過程

長坂朋美

信州大学大学院 教育学研究科

近年ボランティア活動における教育効果が注目されている。中央教育審議会(2013)「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」において、体験活動の1つとしてボランティア活動が挙げられており、社会の一員としての自覚と責任感を高める効果が期待されている。またボランティア活動は単なる社会奉仕ではなく、自己形成と社会形成の両面から大きな役割が期待され、田中(2011)は、自己と社会の再帰的変容を促す「自己/社会形成」であると指摘している。

そこで本発表では、ボランティアがもたらす効果について、学校外で地球環境問題のボランティア活動に取り組む青年Mの事例をTEA(複線経路等至性アプローチ)による分析を基に、人生の経路や自己形成と社会形成の再帰的変容を捉えることで、ボランティア活動が「自己/社会形成」にどのように影響をもたらしているのかを明らかにすることを目的とする。

No.014 被災写真返却活動における「めざす」と「すぞす」

宮前良平

大阪大学大学院人間科学研究科

渥美公秀(大阪大学大学院)

2011年3月11日に発災した東日本大震災は、多数の死者行方不明者を出したと同時に、町そのものを流し去った。その中で、思い出の詰まった写真が、家の流出とともに流された。震災直後には、がれきの中にあるそういった写真を拾い集め洗浄し、保管するボランティアが数多くいた。現在では、その保管してある写真を持ち主に返す活動「被災写真返却活動」が各地で起こっている。本研究は、被災地の一つである岩手県野田村にて継続的に行われている被災写真返却活動の実践から、どのような活動が被災者の生活復興に寄与するのかを論じる。被災写真返却活動には、2つの側面がある。1つは、「1枚でも多く」という言葉に代表される「めざす」活動である。もう1つは、「最後の1枚まで」という言葉に代表される「すぞす」活動である。本研究においては、「すぞす」活動に着目し、写真に写る震災前の思い出を想起し、思い出を語ることの意味を明らかにする。

No.015 地域社会における精神障がい者との接触経験とその意味
～大学生におけるこれまでの記憶をひも解いて～

小松 容子

宮城大学 看護学部

佐藤一恵(元国立精神・神経医療研究センター病院)

精神障がい者への偏見・差別などの態度および社会的行動を左右する要因の一つとして接触経験がある。接触経験の豊富さと精神障がい者に対する態度との関連性について、いくつか研究がなされているが(大島ら、1989)、接触の量よりも接触経験の質が重要であることが指摘されている(清水、1989)。しかし、地域社会における精神障がい者との接触について、人はどのような体験をしているのかについては明確化されていない。

そこで本研究では、日常場面あるいは地域社会における精神障がい者との接触体験について明らかにすることを試みた。大学生を対象に、これまでの記憶をひもときながら、過去の経験について記述してもらい、質的分析を行った。分析の結果から、よかった体験、よくなかった体験についてそれぞれの側面から、精神障がい者との接触経験の内容およびその意味について抽出された。

No.016 ステップファミリーにおける親子関係に関する研究 ―子どもへのインタビューから―

勝見吉彰

県立広島大学

欧米においては膨大な数のステップファミリーに関する心理学的研究が行なわれており、ステップファミリーにおいて育つことの子どもの心理的影響についての研究も数多くなされているが、その結果は一様ではない。一方、日本においては血縁によらない親子関係を生きる子どもの心理的体験については、これまでほとんど注目されてこなかった。本研究は、ステップファミリーでの生活体験のある青年が、継親との関係のあり方、ならびにステップファミリーでの生活体験そのものをどのように捉えているのかについて検討することを目的として実施された。ステップファミリーで生活する大学生4名に対して個別に半構造化されたインタビューを行ない、その逐語記録をKJ法を用いて整理した。親の再婚を肯定的にとらえている者とそうでない者との間での、継親との関係のとらえ方、継親との生活体験の意味づけにおける差異と共通する部分等に焦点を当て考察を加えた。

No.017 三宅島へ帰島した高齢者の生活再建に関する研究 ―認知症の夫と帰島した後期高齢者の場合―

成島ますみ

桜美林大学大学院博士後期課程

2000年に起きた三宅島大噴火により全島避難した島民は、2005年避難指示解除により帰島することが出来た。民宿を営んでいたAさんは認知症の夫と避難していたが、復興作業員の宿舎提供のため島民より一足早く2004年に夫と帰島した。避難中夫の症状に変化はなかったが、帰島後「家に帰る」と言って夕方になると徘徊するようになった。目を離すと出て行ってしまふ為、夜も休めない状態の中Aさんは一人で夫の介護をした。2005年に島民は帰島したが、4年半離れ離れになっていた集落の人間関係は避難前とは異なり、付き合い方も変化した。夫を介護する時、同じ集落の人より避難先で親しくなった隣の集落の人が心の支えとなり、夫が老人施設に入所するまでの3年間、介護しながら宿舎を営んだ。

本研究では、要支援の夫と帰島した高齢者がどのように生活再建していったか、長期避難生活がその後の人生に及ぼした影響を高齢者の語りから明らかにし、そのサポートを考えたい。

No.018 ベジタリアンの食に関する価値観

三村千春

淑徳大学院 総合福祉研究科 臨床心 中坪太一郎（淑徳大学）
理学専攻

既に欧米では定着しているヘジタリアンであるか、日本でばまた、野菜しか食べない人、偏食者としてしか見られていない。国内ではヘジタリアンに関する文献も非常に少なく、一般に認知されているとはいえない（角田,2011）。そこで本研究では、どのようなきっかけや背景があり、ベジタリアンとなったのか、周囲からの理解は得られているのか、欧米に比べて理解が少ない日本において、どのような困難を抱えているのかを明らかにし、食に関する認知の構造モデルを作成することを目的とした。対象者に対し1時間ほどの半構造化インタビューを行い、得られたデータは逐語に起こした後、グランデッド・セオリーを用いて分析した。その結果、ベジタリアンの食に関する価値観についての構造モデルが示された。

No.019 「被害者」の集団力学的構造：「いじめ」の言説分析から

ハッ塚一郎

熊本大学教育学部

深刻な「いじめ」事案が繰り返され報じられ論じられる一方、「金持ちいじめ」「身体をいじめる」等の軽薄な表現が社会を流通し続けている。「いじめられる側にも悪いところがある」という信憑も、いまだ根絶されてはいない。「いじめる」―「いじめられる」関係は、加害と被害の対、能動性と受動性の対称的な関係と単純に理解されるべきではない。日本語文法に依拠すると、「いじめられる」ことは、具体的な「被害」という結果に立ち至ることではなく、主体性を失った制御不能の状態に追いやられ、そのプロセスがとめどなく継続している状態を指す。「いじめられ」ている者はただ制御不能の状態を甘受し続けるよう強いられるのであり、それが「いじめ」かどうか、「被害」かどうかを認定する権限すら奪われている。膨大な言説の流通にもかかわらず、尊厳の棄損や学習権の剥奪として被害が語られていない現状を指摘し、より適切な記述のあり方を検討する。

No.020 結婚移住女性の異文化適応―TEMを用いて

一條 玲香

東北大学大学院教育学研究科博士 上埜 高志（東北大学大学院教育学研究科）
課程後期

近年、日本に暮らす外国人の増加にともない、在住外国人のメンタルヘルスの重要性が増している。異文化で生活することは、非常にストレスフルであることが指摘されている。一方で、長年日本で生活してきた人々がいる。彼らの経験に着目することで在住外国人のメンタルヘルスへの示唆が得られるのではないかと考えた。

本研究では、日本人男性と結婚した結婚移住の外国人女性のライフストーリーをもとに、来日から現在までをTEMを用いて描く。TEM図をもとに、異文化社会におけるメンタルヘルスのリスク要因、保護要因を探ることを目的とする。

No.021 中国大陸東北部生まれのニューカマーの文化統合過程—青年期の漢族男性へのインタビューから—

市川章子

一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程

本研究の目的は、中国大陸東北部生まれのニューカマー（漢族、男性一名）の来日から現在までの文化統合過程をTEM（安田・サトウ,2012）によって明らかにすること及び寄与する要因について質的に探ることである。分析の結果、文化統合過程ではアイデンティティの変容として、中国人であることを隠す自分に対する意味づけの変容がTLMGとして描かれた。さらに特徴として、編入先の公立中学校でのいじめ、大学在学中にアルバイト先での人種差別、青年期の葛藤、来日による夢の変化が見られた。文化統合に寄与する要因として、幼少期の外国語学習および豊かな文化体験が影響していることが示される一方で、より良い教育環境を求めて来日した結果、日本人化する息子に対しての両親の葛藤が生じており、こうしたことが青年期を迎え中国人であることを意識し、通名と本名の間で揺れ動き中国人アイデンティティの再萌芽につながっている様相が示された。

No.022 看護学生による他者の身体を扱った技術修得過程—車椅子移乗の演習場面におけるエスノグラフィー

森嶋純子

熊本保健科学大学

岩瀬裕子（熊本保健科学大学）・
佐川佳南枝（熊本保健科学大学）

本研究の目的は、人を対象とする看護技術を、学生同士が他者の身体を使ってどのように学んでいるか、その修得過程を明らかにすることである。研究方法には、ビデオエスノグラフィーによる手法を用いた。看護技術は1年次に初めて他者の身体を直接扱うことになる活動の演習項目で「車椅子移乗」とした。今回は4人1組の集合体の中で、援助者と患者および観察者の各役割を遂行しているグループを分析対象とした。本研究は研究者の所属する倫理審査委員会の許可を経て実施した。結果、この集合体における学習体験には、援助者として【既習知識の想起】【手順・正しい動作意識】【動作の意味づけ】【身体感覚獲得の試み】【対象意識】【技術の評価】のカテゴリーが抽出された。このほか、患者として、また観察者としての学習体験から、初学者同士が集合体の中でどのように互いに関与しながら学んでいるのか技術修得のプロセスを考察する。

No.023 小学校新任教員の就任1ヶ月目の授業にはどのような特徴があるのか

田中あかり

九州大学大学院人間環境学府

公立学校では、団塊の世代の大量退職やベテラン教師のストレスによる離職・休職等により、若手教員の割合が増加しており、新任教員支援の充実は、迅速な対応が求められている学校教育の課題の1つである。新任教員の教師としての学びを支えるには、実践の中で新任教員が抱える課題を実態に沿った形で拾い上げ、それを活かした支援のあり方を検討する必要がある。著者は、新任教員として学校に着任した機会を活かし、新任教員への実践形成型の支援のしくみ作りを目指している。今回は、ビデオ記録と音声記録を用いた分析から、就任後1ヶ月間の新任教員の授業の特徴を示す。また、新任教員が記録したフィールドノート記述との比較から、新任教員の省察と実際の授業実践との繋がりについて考察する。

No.024 保育の社会的環境におけるアジールとしての「境の場所」の構造と条件

境 愛一郎

広島大学大学院

保育の社会的環境における子どもの生活は、保育者を源とする規範や習慣に則した「みんなのなかの一人」として展開される側面を有する。他方、そうした在り方から脱し、個々の生活が許容されるアジール（避難所）の機能を持つ場所として、場所と場所の間に存在する「境の場所」の存在が指摘される。

本研究では、そうした「境の場所」の1つとして対象施設のテラスに着目し、そこでの子どもの過ごし方に対する保育者の認識や介入の方針を検討することで、「境の場所」のアジールとして機能を成立させている成員間の関係性の構造を明らかにする。

対象施設の保育者6名に対して行ったグループインタビューの内容をSCAT（大谷 2007; 2011）によって分析した。その結果、子どもと保育者の「目の端の関係性」を構築する物理的特徴、保育者の寛容さとそれを促す施設方針、場の秩序を司る子ども関係の形成といったアジールとしての場の機能を成立させる条件が明らかとなった。

No.025 **災害体験の持続的な伝承を目指すための実践的研究
ー被災地の継続的な定点観測活動を通じてー**

高森順子

大阪大学大学院人間科学研究科

山口洋典(立命館大学)
渥美公秀(大阪大学大学院人間科学研究科)

災害体験は、当事者が不在となっても、その体験を確かなリアリティを持ったものとして感じられなければ、次世代に活かすことは難しい。つまり、現前していない当事者の体験に接近する方法を編み出すことは、持続的な災害伝承を目指すにあたり不可欠である。本研究では、その方法を実践的に検討した。本研究は、第一筆者と第二筆者の指導のもと、第二筆者が担当する全学教養科目「減災×学びプロジェクト」の学生たちとともに、2013年度から毎年夏に行っている、被災地の定点観測撮影という継続的な活動を扱う。この活動は、1995年の阪神・淡路大震災を体験し、現在すでに亡くなっている被災者が撮影した定点観測写真を用いて、被災体験のない学生たちが定点観測の再撮影を行い、彼らが出会ったことのない撮影者(＝被災者)の災害体験を覚知できたかどうかを検討している。今回は、その継続的な活動の最新(2015年度)を中心に発表する。

No.026 **コミュ障脱却のきっかけについての質的研究**

下林咲

淑徳大学

中坪太一郎(淑徳大学)

日常生活で自らを「コミュ障」と紹介することで、対人場面においての接触緩和や距離をとる傾向が一部の世代で垣間見ることができよう。本研究では、以前にコミュ障だった人がどのようにコミュ障から脱却を図ることができたのか、そのきっかけを明らかにすることを目的とする。本研究の方法として、自らを元コミュ障とする男性1名に対し「自分のコミュ障体験」についての半構造化面接を行い、そのデータを元にグラウンデッド・セオリー・アプローチをベースとした質的分析を行った。また、脱却体験構造をモデル図に表した。その結果対象者は、自分の中のコミュ障イメージや自らのコミュ障の特徴・体験、周囲の反応を受けつつも、ある程度コミュ障から脱却していた。その脱却の経緯には、他者と関わろうとする意識やコミュ障を直そうとする試行錯誤、また、ホームステイなどの状況の変化のようなきっかけによってなされていたことが示された。

No.027 **重複のため削除しました。No.36を参照ください。**

No.028 **教師の「学び続ける力」の向上と職場環境の関係性に関する研究**

時任隼平

関西学院大学

寺嶋浩介(大阪教育大学)

本研究の目的は、教師の学び続ける力の向上と、教師を取り巻く職場の制度的・文化的環境の関係性を明らかにする事である。近年、教師は医者や弁護士などのように、専門職として高度な知識や技能を身に付け実践する事が求められており、D. ショーンが示す「反省的实践家」として学び続ける力が重要視されている。反省的实践家の概念では、省察をキーワードに個人の具体的経験を振り返り、内省し、次の行動へと変容させていく事が求められているものの、学校教育現場のもつ様々な問題や複雑な構成によって、誰もが学び続ける事をできる訳ではない。本研究では、教師の学び続ける力を向上あるいは阻害する職場の制度的・文化的特徴を明らかにする事を目的に、現職教員を対象に半構造化インタビューを実施した。

No.029 **家族による余暇活動の受容に関しての一考察
——女性達の二次創作活動を巡る虚の受け容れを例に**

石田沙織

明治大学大学院

腐女子と呼ばれる女性達による二次創作活動は、就業のかたわらの余暇を利用し、現代日本における同人文化の一環として活発に行われている。本発表では未婚の腐女子の家庭内における「娘」としての立場に着目し、彼女達による同人活動を「子の余暇活動」として位置づけ、家族からどのような受容のされ方をしているのかについて調査した。その結果、彼女達の自己実現・自己充足的な創作活動に対して、家族からは完全な受容ではなく、「虚の受け容れ」と呼ばれる曖昧な受容の態度が多いことが明らかになった。従来指摘されてきた、社会制度としての家族からの抑圧の程度を腐女子が感じることは以前と比較して減少していると考えられる一方で、彼女達と家族との間の空隙は常態化しているといえる。このような家族の受容の程度と相互作用のあり方が、当該余暇活動の質だけではなく、彼女達のアイデンティティ形成にも関わってくる可能性を検討する。

No.030 **探究活動における学修者の成長の実感—高校生徒を対象とした事例検討を通して**

蒲生諒太

京都大大学院教育学研究科

全国の小中高校・特別支援学校において「総合的な学習の時間」が導入されて以降、その中核となる「探究活動」（探究的な学習）の実践研究が進んできている（浅沼編、2008など）。他方で「総合的な学習の時間」について現場は手探り状態が続いている。探究活動のパイロット校からも学修者の成長についての報告がされているが（荒瀬、2007）、活動内容と成長（学力形成）との関係性は研究がそれほど進んでいない。活動内容と学力形成との関係を検討することでより有効な探究活動を実施することができると考えられる。

報告者はこれまで高校現場と協同して少人数での探究活動を企画し実施してきた。そこで得られた振り返りの「語り」をもとに探究活動における学修者の成長の実感を分析し、(1)学習指導要領に掲げられた目標（学力）との一致点、(2)どのような学習活動が学修者の成長に資する可能性があるのか、検討する。

No.031 **生活困窮者を対象とした医療支援の在り方：患者インタビュー調査からの検討**

福田茉莉

立命館大学衣笠総合研究機構

本研究の目的は生活困窮者を支える医療実践の在り方について医療従事者と患者との両側面から検討することであり、本報告では、患者を対象に実施されたインタビュー調査から、医療実践における問題や課題を検討する。調査協力者はA病院にて本人あるいは家族が生活保護あるいは無料低額診療制度を受給している者、計6名であった。以下の項目を含む半構造化面接を実施した（質問項目：生活上の困難や要請される支援、医療受診時に抱える問題、医療機関への要望や改善点等）。

インタビュー調査の結果、患者の多くは、A病院が無料低額診療事業を実施している医療機関であることを医療受診行動のきっかけとしていた。しかし、医療費負担のみを問題としていたのは少数であり、社会復帰の難しさや介助者の不在等の問題を抱えていた。また、医療受診時に生じる問題は、患者を医療受診行為から遠ざける要因となり、病態の重症化を招く危険性を含んでいた。

No.032 **中学校数学学習における図が媒介した学習過程の分析
—関数授業での極限（無限小）の理解の過程に着目して—**

茂野 賢治

東京大学大学院教育学研究科

本研究は、中学校数学学習で、生徒たちの課題解決における話し合いにおいて、極限の考えである無限小を理解するため図が媒介し、学習課題の解決に至った学習過程を対象として、図と教師の役割を検討したものである。あるクラスの中学校数学の関数の授業を20時間観察し、そこで使用された図と教室談話と生徒の記述したワークシート及びフィールドノーツの分析から、以下の点が示された。クラスでの学習課題の解決を通した無限小の理解のためには、図が相互作用のツールとして機能し、生徒たちによる図の理解の過程が必要であることが示された。そして、無限小の数学的な意味の共有のためには、その過程において①生徒たちが図を理解するための図の表し方②図の理解を深めるための生徒たちによる図を使用した操作活動③図の理解を促進させる教師の足場がけの三つの存在が、必要であることが示された。

No.033 総合的な学習に対する意味づけの変容過程 ―この時とあの時―

安達 仁美

信州大学

学校から社会への移行過程は、文化・社会的文脈の中で様々な要因が影響して多様にキャリアが分岐していく時期である。都築(2007)をはじめとする青年の時間的展望と自我同一性に関する縦断的な研究の中では、青年が過去に対する意味づけを変容させながら、過去の経験を再解釈し、再定義した上で、過去・現在・未来の自分を統合的に捉えていくキャリアの発達の様相について明らかにされている。

高等学校の総合的な学習の時間は、キャリア形成のひとつの契機になりうると考えられる。そこで、本研究では、高等学校の総合的な学習の時間がキャリア形成にとっていかなる影響を及ぼすのかについて、調査対象者のHさんの高校1年生から大学卒業後までの縦断的なインタビュー調査のデータから明らかにする。その際、インタビュー当時の「この時」として語られる言葉と、回顧的に振り返り物語として語られる「あの時」としての言葉の違いに着目し、意味づけの変容過程を追いながらキャリア発達を質的に捉える上での課題についても明らかにしたい。

No.034 祈りにおける心の変容過程と宗教性発達の検討
～質的研究法TEAとテキストマイニングを用いた変容と構造の分析～

森本真由美

白百合女子大学大学院発達心理学
専攻博士課程

欧米では宗教性発達について多くの知見が提供されているが、日本での宗教心理学的研究は、発達の視点から宗教性を検討した実証的研究は少ない。本研究では、宗教的社会化と祈りの構造が宗教性発達に及ぼす影響を、複線経路・等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA)とテキストマイニングを用いて提出する。非キリスト教的文化背景を持つ社会や文化の中でカトリックの信仰を選んでいく、経験事象の変容の契機やプロセスでは、人生の危機に出会う度に、祈りを通じたアイデンティティ再体制化プロセスのモデルが描き出された。キリスト教的価値観の生活様式の選定に至る経路の変容点である祈りがどのような意味を持って当事者に立ち現われたのか、個人の変容を個別活動レベル、記号レベル、信念・価値観レベルの3層で捉える発生の三層モデル(TLMG)で捉え、祈りの構造と機能をテキストマイニングを用いて分析し、宗教性発達に及ぼす影響を考察する。

No.035 作業療法を学ぶ学生が中途退学・休学の意志を凌いで就学継続できた過程の解明

東野幸夫

吉備国際大学通信制大学院, 岡山 岩田美幸(吉備国際大学)
医療技術専門学校

現在、作業療法士を養成する高等教育機関は、学生の中途退学(以下、中退)や休学を防止するための解決策を見出すことが喫緊の課題である。文部科学省の2012年度調査では、中退の理由をその他と回答した教育機関が25.3%、休学が47.6%であった。しかし、先行研究では、その対策が教員個人の資質と努力による報告が中心であり、未だ十分な対策が見出されたとは言い難い。実際、中退・休学は学生個人の問題のため、現在の教育機関では個別に対応していくことが主体である。そこで、本研究は、中退や休学の意志を訴えた経験がありながらも、その後も就学継続できた学生を対象にした面接調査を実施する。その調査結果を複線経路・等至性モデルによって分析し、就学継続できた過程を視覚化し、どのような関わりや手段が問題解決へ至ったのかを解明することを目的とした。本研究によって、今後、教員が取り組むべき支援の手掛かりとして提示することができる。

No.036 性同一性障害者におけるホルモン療法の開始に至るまでの心理的プロセス

田中千尋

奈良女子大学大学院

本研究の目的は、性同一性障害をもつ人々が身体的な違和感を覚えてから、ホルモン療法の開始に至るまでの心理的なプロセスを明らかにすることである。調査では、既に医師からの診断がおりた性同一性障害者に半構造化面接を行い、4名の語りを分析の資料とした。得られた語りを逐語化した後、複線経路・等至性モデルを用いて経験のプロセスを経路と選択の観点から、描き出した。それに加え、語りの行為的側面を分析した。その結果、「身体的な違和感を覚える」「うつ・ノイローゼなどの精神不良」「医師から性同一性障害の診断がおりる」「ホルモン治療を始める」という協力者の語りに共通したこれら4つのポイントとなる経験を軸とし、その経験の間に3つの時期区分が現れた。セクシュアリティについての語りは診断がおりる前と後では、その内容や質、意味合いが異なった。また、語りの意味づけにおける多様な可能性が示唆された。

No.037 ろう者の自己の語りにおける聴者の聴き手の存在

広津侑実子

東京大学大学院教育学研究科

ろう者（聴覚障害のある人）の語りでは、場面によって自己像・他者像に変化が見られており（広津, 2014）、たとえば自己を「障害者」として位置付けたり「自立・主体者」とみなしたりと、ゆらぎがみられる。本発表では、インタビューの場での聴者（聴覚障害のない人）の聴き手とのかかわりあい、ろう者の自己イメージにいかに関与しているのか、ミクロの視点から検討したい。聴者である筆者が二名のろう者に実施したインタビューを分析対象とする。聴き手がどのような想定をして話をきいていたか、どのような質問を投げかけたりしているのか、そして、それらの動きに応じて話し手はどのような反応を返しているのか、自己像にはどのような変化があるのか、どのような相互作用が起こっているのかなどの点に着目する予定である。

No.038 動画投稿者の心理的葛藤とそのプロセス

田汲由佳

淑徳大学院 総合福祉研究科 臨床 中坪太一郎（淑徳大学）
心理学専攻

今日の情報化社会において多数の人に利用されている動画共有サイトでは、個人により投稿された動画が多数のユーザーに共有されている。これまで、動画を視聴する側のユーザー特性に関する研究はされているが、投稿者の心理的特性についての学術的知見は未だ十分であるとは言えない。そこで本研究では、動画を投稿する以前と以後での心理的变化について明らかにすることで、投稿者が辿る心理的なプロセスをモデルとして示すことを目的とした。研究方法は対象者1名に対し1時間ほどの半構造化インタビューを行い、得られた質的データに対しグラウンデッドセオリー・アプローチによる分析を行った。その結果、①期待と戸惑い、有名になりたいという葛藤を経て投稿に至るまでの心的モデル、②投稿後の、投稿することへの評価や懐古、カミングアウトへの葛藤を経て、現在の自己像と今後の展望へと向かう心理的な変遷のプロセスの2つのモデル図が示された。

No.039 土地の記憶と歴史の語り：米国先住民ノーザン・シャイアの史跡化営為の検討を通して

川浦佐知子

南山大学人文学部心理人間学科

歴史的、文化的地所を認定史跡として保護する試みは、近年、世界随所で散見される。本発表では1990年代以降、部族関連地所の史跡化を推進してきた米国先住民ノーザン・シャイアの事例をもとに、先住民の土地保全と記憶継承の試みについて検討することで、人々に記憶を想起させる「場」の保持と、国の歴史のプロットに則った「史跡」形成の関わりについて報告を行うものである。発表者はモンタナ州に保留地を持つノーザン・シャイアの集合的記憶の継承について、現地フィールドワーク、及びインタビュー調査をもとに検討を重ねてきた。先住民部族の「記憶」と国立公園局が司る「歴史」が、現在どのようなかかわりにあるのかを考察することで、歴史・記憶に関わるナラティブ研究の一例としたい。

No.40 性同一性障害を生きる経験についての一考察：性別移行期にある当事者の語りから

町田 奈緒子

京都大学大学院 人間・環境学研
究科 博士課程1年

本研究は性同一性障害（GID）を生きる経験を描き出すことを目的に行われた。従来のGIDに関する研究は、心理学的特性との相関や発達上生じる問題点、また他の精神疾患や障害との関係にその焦点が当てられてきた。実際に身体的に性別を移行している最中にある者の生育史や経験を記述することを試みた研究は未だ十分とはいえない。しかるに、生育史や経験も踏まえて性別移行期にある当事者の体験を理解することは、支援を考案するにあたって重要であろう。

そこで本研究は、GID当事者1名を対象に、2回にわたり語り合い法を用いたインタビュー調査を実施した。その結果、戸籍上の性別の制服を着用するよう求められることは当事者にとって苦痛であること、また自身がGIDという認知を行うことが、他者へカミングアウトを行うきっかけになっていることが明らかになった。また支援として、制度上の支援のみでは不十分であり、周囲の者の理解が必要であることが示唆された。

No.041 **同化政策経験の想起の「語りにくさ」に関する心理学的研究—アメリカ統治下の沖縄における方言札を事例として—**

野原みゆき

青山学院大学大学院社会情報学研究科

[目的]本研究は老年期の沖縄人の「方言札」の想起を通して、事後的に差別・抑圧的な体験と社会的に枠付けされた際、当事者は自伝的記憶をどのように再編成するのか、その過程を明らかにすることを目的とする。

[方法]現地の高齢者を対象に半構造化インタビューを行った。逐語化したデータを元に「方言札」に関する語りの発話構造に着目し、ポジショニング分析(Harré, 1999)を行った。

[結果]方言札の想起の特徴として(1)「個人的な経験に基づいた一般的な方言札の概要」、(2)「『当事者』ポジションへの選択的回避」、(3)「希薄な方言札の語り」という3点の語りの特徴が確認された。

[考察]研究協力者たちの「方言札」体験は、メディアが中心となり事後的に差別・抑圧的な体験として社会的に枠付けされてしまった。そのため、研究協力者たちは自身の方言札の体験とは異なるため、彼/女らの自伝的記憶の調整が機能していないと考えられる。

No.042 **保育者が幼児の遊びを継続させるプロセス：餅つき行事までの自由遊び場面に着目して**

濱名 潔

広島大学大学院

河口 麻希(広島大学)・保木井 啓史
(広島大学大学院)

保育者は、次の活動の時間が決まっている場合、幼児の主体的な遊びをどの時点まで継続させるかという判断や、それに基づいた援助が求められる。しかし、次の活動開始が不明確な場合、保育者はどのような判断をしながら、幼児の主体的な遊びを継続させるのであろうか。

本発表では、餅つき行事がいつ始まるかわからない状況下において、保育者はどのような判断をしながら幼児の遊びを継続させたのかを明らかにする。

4歳児クラスにおける餅つき行事までの自由遊び場면을ビデオで記録し、保育者に当時どのような意図で援助をしていたのかインタビューを行った。そして、それらのデータをTEM(安田・サトウ2012)により分析した。

結果、保育者は外的環境の状況に基づいた判断だけではなく、自身の「(自分が離脱しても)遊びが継続するだろう」という曖昧な判断をしていた。保育者はこれらに基づき援助を変えながら、幼児の遊びを継続させていたことが明らかとなった。

No.043 **日常において好奇心が醸成される構造と活動の継続性に関する研究—M-GTAによるハイアマチュアの科学実践の分析—**

木村優里

立教大学

本研究の目的は、複雑で多面的な日常に埋め込まれた好奇心が、多様な要因とどのように関わり合いながら存在しているのかを明らかにすることである。そこで、科学的趣味を長年継続的に実践しているハイアマチュアを対象に半構造化インタビューを実施し、M-GTAを用いて分析した。分析結果より、好奇心が醸成される構造と活動が継続される構造、加えて、それらに重要な要素が示された。まず、好奇心は科学的目的意識の高い活動だけでなく、一見無駄にすらみえる活動やコミュニティからの刺激といった社会的要因と関わることで醸成されていることが示された。その好奇心が醸成される構造には3つのプロセスが存在し、環境を利用し、非常に冗長的に好奇心が醸成されていることが明らかになった。次に、社会的要因の影響を強く受ける日常に埋め込まれた実践を継続するためには、好奇心の醸成に加えてリソースを捻出するという構造が重要であることが示された。

No.044 **大学生活における大学生の学びの発生過程—4回生へのインタビューから—**

清水大地

立命館大学大学院

サトウタツヤ(立命館大学・大学院)

本調査では大学生の授業と課外活動における学びがそれぞれどのように発生しているのかを明らかにすること、また、授業と課外活動がどのように関係しているのかを明らかにすることを目的として、大学4回生以上を対象に授業や課外活動の経験について質問紙を用いて予備調査をおこない、その後本調査としてインタビュー調査をおこなった。

インタビュー調査からKJ法を用いて分析をおこなった結果、授業の意欲上昇と意欲低下に関して先行研究と同様の結果が得られた。授業と課外活動の関係については授業がきっかけとなり課外活動につながる、課外活動から授業への意欲が高まるなど、学びの発生を促す関係性が示唆された。

No.045 両者の体験に焦点を当てた相互的描画法におけるコミュニケーションの質的考察

小林規江

明治大学大学院

心理面接における相互的描画法には、1枚の紙に対して、一方がなぐり描きをして、他方がそのなぐり描きに対して線や色を加えたりして、一つの表現にするということを、役割を交代しながら行う、というものがある。この技法の代表として、英国の小児科医であり精神分析家であったD.W.Winnicottが開発したスキグル・ゲームがある。本技法において、そのコミュニケーションの体験を扱った質的研究は多くない。

本研究では、調査者と大学生協力が5往復のスキグル・ゲームを行い、インタビュー調査を実施した。17名の協力者とスキグル・ゲームを実施したうち、両者が固有のインパクトをそれぞれ体験したと思われる、4名のデータに焦点を当てて分析を行った。その際、音声記録と描画、調査メモといった質の異なるデータを組み合わせた。

本発表では、両者に固有のインパクトが生じた描画を巡るコミュニケーションの体験を考察する。

No.046 「Days-Before」の語りの質的分析
～ウェブ投稿記事『震災の前日』を例に～

杉山高志

京都大学情報学研究科

矢守克也(京都大学防災研究所)

本研究は、被災前の日常、すなわち「Days-Before」の視点から、神戸新聞NEXTのウェブ投稿記事『震災の前日』に対する質的分析を行う研究である。『震災の前日』とは、2014年12月から2015年1月に実施された企画で、「1995年1月16日、震災の前日のことを教えてください」という質問のもと、ウェブ上で投稿記事を募集した。本研究の特徴は、被災直後や被災後ではなく、被災前の日常生活に焦点を当てた被災者の経験談を分析する点である。本研究では、このような被災前の経験談を「Days-Before」の語りと名付けている。現在、震災経験談の語りとして多くの手記が出版されているが、その多くは震災直後から始まる語りである。震災を夢にも思わなかった穏やかな日々が震災前にあったはずなのに問わず、震災の語りの中で震災前の生活、「Days-Before」の視点から経験談が話されることは少ない。そこで、本研究では『震災の前日』の投稿記事に対する分析を通し「Days-Before」の語りの特徴を考察する。

No.047 若年期発症のクローン病者とその家族の心理過程

益永しげり

淑徳大学大学院総合福祉研究科修士課程

近年の医療技術の進歩は患者自身が治療法などを決断しながら、治り難い病を抱えて生きていくという課題をもたらした。慢性疾患者は外来受診や入院時よりもはるかに長い時間を自宅や所属する社会で過ごし、今までの生活を再編成しながら闘病と折り合いをつけていかなければならない。

本研究では若年期発症のクローン病に焦点をあて、患者とその家族の日常的体験に病気がどのように影響しているかを考察する。クローン病は消化管のどの部位にも炎症や潰瘍をひきおこす原因不明の疾患である。再燃と寛解を繰り返し、たとえ症状がなくても徐々に進行し慢性の経過を辿るとされる。患者は心理社会的に様々な困難に直面し、家族も同様の心理的葛藤を生じる可能性がある。語られたことから生活場面を理解し、病状の不安定なこの疾患の難しさに対処している当事者の体験の一端を明らかにすることは、QOLを高める支援を組み立てる上で有用であると考えられる。

No.048 TEM図による英国在住日本人女性の心理的文化変容とキャリア選択プロセスの分析—国際結婚した調査協力者Bの5年間に焦点を当てて—

石盛真徳

追手門学院大学

国際結婚を機に日本での仕事を辞めて海外に移住した日本人女性が移住先の国で職業上のキャリア追求を志した場合、その個人は異文化でストレスフルなライフイベントと遭遇しつつ、私生活上の問題をはじめとした様々なキャリアバリアを乗り越える必要にも迫られる。本研究では、国際結婚した協力者Bの英国移住後の5年間の経験に焦点を当てて、TEM図により彼女の心理的文化変容とキャリア選択プロセスの分析を行った。面接データは2007年と2012年に実施された半構造化面接により収集された。協力者Bは結婚、出産、家業のレストラン手伝いといった様々なライフイベントを経験する中で、英国生活への心理的文化変容を試みていることが明らかとなった。

No.049 シカゴ大学における共感研究の一大動向

中妻拓也

立命館大学客員研究員

サトウタツヤ(立命館大学文学部)

現在、心理臨床や対人援助においては「共感(共感性)」という概念は、カウンセリングや支援を行う際の基本的姿勢や援助職を目指す人物が獲得すべき性質として着目されている。

この考え方に大いに影響を与えたロジャーズ.Cが所属していたシカゴ大学には、同時代に精神分析学派のコフト.Hや初めて共感能力を測定する尺度を作成したダイヤモンド.Rなど共感研究に影響を与えた人物が多く存在する。よって本発表では、共感の概念、研究の変遷をシカゴ大学に関係した研究者という観点で整理し、共感の研究法、概念の変容を検討する。

No.050 小学校外国語活動における子どもの聞き取り活動の検討

黒田真由美

京都大学大学院

小学校外国語活動では、話すことだけではなく、聞くことの重要性も指摘され、英語を聞く力を伸ばす授業も試行されている。本研究では、子どもの聞こえを捉えるために、発音を文字で表現する活動を行った。そして、子どもが発音の聞き取り活動に対する思いを明らかにすることを試みた。

対象としたのは小学5年生の授業である。通常の授業では、発音を書き取る活動を行ったことはなく、初めての試みであった。音を出来るだけ聞こえたように書くよう促した。さらに、書き取る活動に関する質問紙調査を行った。

その結果、できるだけ音を正確に表現しようとする子どもの様子、日本語で英語を表現することへの違和感、英語の音の区切りへの気付き等が見られた。さらに、子どもは他者との比較して同じ答えを書くことや正解を書くことだけではなく、聞く段階、表現する段階で、できるだけ聞こえたままに取り組もうとしていることが明らかになった。

No.051 **喪失体験の語り
—羅生門的手法による検討—**

小林日香梨

富士見高原医療福祉センター

本調査の目的は、家族の喪失体験をその家族に関わる近親者がそれぞれどのように受け止めていたかを検討することである。筆者は近親者5名に協力を得てインタビューを行い、逐語録を作成し個々の語りを羅生門的手法を用いて考察した。近親者それぞれの「現在の思い」「記憶」「周囲からのサポート」の3点に関し、それぞれの語りを比較検討した。

結果、年齢・性別・故人との関係性がそれぞれ異なる協力者間で多くの認識の違いが示された。それぞれの認識の違いから、本調査は「二人称の死」に関わる近親者の様相とその喪失体験についての意味づけを考察することを通して、遺された者のグリーフの「在りよう」とそれぞれの（在りようの）違いについても示唆することとなる。

No.052 **無痛分娩における助産実践と助産観**

水尾智佐子

日本での無痛分娩による出産数は、欧米と比較して少ない。その背景には、技術的問題より、社会的文化的な問題が横たわっていると考える。未だ導入の過渡期にある無痛分娩の現場には、複数の価値観や知識体系の併存や葛藤状況が予想される。

出産に関わる者の出産観の変化や知識の動態、そうした複雑な現場に身をおく助産師たちの助産実践や葛藤を探り、日本社会において、自然なこと、母になるための試練などと捉えられてきた陣痛の痛みを、比較文化や多様な出産の選択という視点から相対化することで、これまでの陣痛をめぐる母性言説だけでない出産の医療化における理解が必要と考えることができる。

そこで本研究では、無痛分娩における助産実践をエスノグラフィック的に記述化し、実践に埋め込まれた助産師たちの価値観や考え方を探った。無痛分娩における助産実践という行動レベルと助産観という内的レベルを可視化する試みをここに報告する。

No.053 **大学生の心理学科入学に至るまでの経験と将来への展望
—複線径路・等至性モデル（TEM）を用いて—**

山本孝子

大阪人間科学大学

心理学科への進路を決めた学生たちは、それまでの人生でどのようなことを経験し、どのような学びを求めて入学してきたのであろうか。本研究では、心理学科3回生4名に半構造化面接を行い、複線径路・等至性モデル（TEM）を用いて分析し、記述を行った。彼らはいじめや不登校など様々な人間関係に関する悩みを抱えつつ生きてきたが、それゆえに人を支える専門家に会う機会が多く、専門家らのかかわりがいかに心の健康回復に役立つかを肌で感じていた。それらの専門家や周りの人々に支えられ、徐々に自己肯定感を取り戻していく過程で、それぞれに心理学を学ぶことへの意味づけが行われ大学入学に至っていた。入学後は、心理学科での学びをもとに自分の適性を見極めて、心理職に就きたいという当初の思いから、福祉施設や一般企業などに就職し間接的に心理学の知識や経験を役立てたいとの思いに移り変わっていった。

No.054 **ボランティアと被災地の人々との「ズレ」から見た復興活動
—石塚観光ボランティアバスの事例を通して—**

蔡 倩如

茨城大学

伊藤哲司（茨城大学）

2011年3月11日、後に東日本大震災と呼ばれる大震災が発生した。中国人留学生である筆者は、2013年から茨城大学東北ボランティア団体Fleurに加入し、茨城県内から復興ボランティアバスを出し続けている観光会社に協力をしてもらって、活動に参加しつつ記録をしている。

本研究では、宮城県東松島市東名地区におけるボランティアたちが行っている復興支援において、ボランティア活動の内容と被災住民のニーズの間には「ズレ」があることを見出した。「善意は善行ならず」という言葉があり、ボランティアが頻繁に被災地に行って行う活動に対して住民たちは一体どう思うのか。この「ズレ」はボランティア活動にどのような作用を及ぼしているのか。そして、今後のボランティアたちがどのような行動を取ったらよいのか。筆者は参与観察及び関係者へのインタビューを通して検討した。

No.055 学部留学生と日本人学生による対話的教室活動における学習者の心理

福岡寿美子

流通科学大学 商学部

学部留学生が日本の文化や社会について学ぶ「現代日本事情」と日本人学生が異文化交流や異文化理解を目的とした「異文化交流」の授業において、対話的教室活動（peer response）を試みた。対話的教室活動は、2014年6月～7月に、3つの学部の2年生～4年生の中国人、ベトナム人留学生および日本人学生によって行った。

文化や社会に関する紹介記事を、グループに分かれ、ワープロで書いた（A4・1枚）。第1稿および第2稿を書いた。留学生および日本人学生ともに、対話的教室活動を行うのは、初めてであった。対話をICレコーダーで録音した。

対話的教室活動を通して、異学部、異学年、異言語の学習者の心理がどのように変化したかを、ポートフォリオおよび振り返りシート等を質的分析することによって明らかにした。

No.056 ナースステーションにおけるながら立ち聞きコミュニケーション

南部美砂子

公立はこだて未来大学

福住伸一（NEC 情報・ナレッジ研究所）

谷川由紀子（NEC 情報・ナレッジ研究所）

ナースステーション（NS）内のアーティファクトとコミュニケーションに注目して、看護師の業務中の発話やインタビューの分析を行った。看護師たちは申し送りのあと、狭いNSのなかで並列的に個々の作業（入力や記入）を行っていたが、同時に、そこで散発的に生じる会話を互いに立ち聞きしており、他の看護師間の会話にも頻繁に介入していた。このような「ながら立ち聞きコミュニケーション」は、このNSの空間的な制約や配置によって可能になったものであり、結果的に、情報共有や安全確保において重要な役割を果たしていると考えられる。しかしその一方で、若手の看護師にとってはアクセスしにくい（あるいは意図的にアクセスしない）コミュニケーション空間になっていた可能性も示唆された。これらの分析結果にもとづき、仕事の場における情報共有と熟達化について議論する。

No.057 住民による政策立案システムに関する研究
—鳥取県智頭町：百人委員会の事例—

叶 好秋

京都大学 人間・環境学研究科

従来、地域活性化における行政と住民の関係は、「住民は意見を言い、行政がそれに応える」構図が自明視されてきた。その構図のもとでは、住民は地域活性化の主体とさえみなされていない。近年、行政と住民の協働が重要視されるようになってきたものの、従来の構図を打破した事例はほとんどない。では行政—住民協働の地域活性化はいかにして可能になるのだろうか。本研究では、この構図を打破し、行政と住民の協働を実現した先駆的な事例として、鳥取県智頭町の百人委員会を取り上げた。百人委員会は、従来行政の領分であった政策立案や予算編成活動の一部を住民主体で行う、行政—住民協働の活動である。具体的には、参与観察やインタビュー調査および文献資料に基づいて、百人委員会が成立した経緯と活動内容を明らかにし、その特徴を規範の伝達プロセスとして考察した。

No.058 女性バイセクシュアルを生きる
—〈語られる〉内容と〈語り合う〉行為の質的検討から—

金 智慧

東京大学大学院教育学研究科

能智正博（東京大学大学院）

今日、性的マイノリティ研究の殆どはLesbian やGayを対象にしており、Bisexual（以下、Bi）を対象にした研究は、未だ置き去りにされている（Fox, 2004）。このような現状により、Biの複雑な両性愛的傾向は単純化され（Klein, 1997）、臨床心理学的な観点からはLesbianやGayよりも深刻かつ複雑なBiの心理的問題が注目されずにいる恐れがある（Cheryl, 2009）。

本研究では、他の性的マイノリティとは異なる存在としてBiを捉え、特に心理援助が強く求められている女性Bi（Miller, 2009）の自覚前から現在に至るまでの一連の時系列な体験の語りに注目した。その結果、「女性Biの自覚モデルと特徴」や「その過程における心理的な悩み及び葛藤」に関する知見が得られ、今まで沈黙してきた女性Bi当事者達が、自分の体験を語ることの意味について考察できた。また、当事者達が自分をBiだとカテゴライズしながらも確信が持てずにいる「不確実な自分」に初めて気づき、向き合おうとする姿を捉えることができた。

No.059 **インタビュアーの省察：「心理臨床家の勤労者としての体験に関する質的研究」にかかる研究者の内省プロセス**

坂本憲治

筑波大学人間系

中岡千幸（筑波大学人間系）

質的研究における研究者の主観はデータ収集から分析、解釈に至るまで、すべてのプロセスに影響を与え続ける。そのため質的研究者は、自身の価値や経験、興味、信念などを内省（reflexivity）し、それが研究に与える影響を十分認識する必要がある（Willig, 2001）。本発表では「心理臨床家の勤労者としての体験に関する質的研究」のインタビュー調査を行うにあたり研究者2名が事前に行った内省を報告する。具体的には、第一に、自己記入式の質問紙（キャリア指向質問票（Schein, 1990）, 労働価値観尺度（江口ら, 2009））を行い、勤労者としての価値観を可視化した。第二に、予備調査を兼ねてキャリア・アンカー・インタビュー（Schein, 1990）をお互いに取り合い、心理臨床家としてのキャリア経験を確認した。第三に、これらをふまえて、Willig（2001）, 能智（2011）を参考に研究者の主観を書き出し、研究に与える影響を予測した。本発表ではこの内省作業を報告し、インタビュアーの省察について検討する。

No.060 **心理臨床家の勤労者としての体験に関する質的研究**

中岡千幸

筑波大学人間系

坂本憲治（筑波大学人間系）

苦悩を抱えた人々を支援対象とする心理臨床家は、自身の精神面・生活面の安定を得ることが重要である（Corey & Corey, 1998）。しかし、日本の心理臨床家の約半数は非正規雇用にあるなど（日本臨床心理士会, 2012）専門職として必ずしも安定しているとは言えず、生業者としてもさまざまな体験をしていると考えられる。本研究では、心理臨床家を対象にキャリア・アンカー・インタビュー（Schein, 1990）を参考にした面接調査を行い、勤労者としての体験を探索した。研究者2名による予備調査を経て、勤労者としてのやりがいや葛藤を含むインタビューガイドを作成し、90分程度の半構造化面接を実施した。現在、心理臨床家8名（男性4名、女性4名）のインタビューを終え、グラウンデッド・セオリー法（Strauss & Corbin, 1998）を用いてカテゴリ生成を進めている。本発表ではインタビュー調査の中間報告を行い、今後の分析可能性や理論的サンプリングについて議論する。

No.061 **東日本大震災で直接的被害を免れた一大学生の被災体験 一対話的な自己エスノグラフィを用いて一**

堀井祐希

茨城大学大学院

守屋英子（茨城大学大学院）

2011年3月11日、当時大学生だった筆者は、一人暮らしをしていた仙台市中心部で東日本大震災を経験した。津波被害は皆無であり、被災の程度も周囲と比較してかなり軽かった。少なくとも筆者の被災経験は、報道等からイメージされる所謂「被災者」とは大きく異なっていただろう。その一方で被災経験は、筆者に未だ大きな影響を及ぼし続けている。筆者以外にも、被災の程度は軽くてもその影響が長く続いている被災者はいるのではないだろうか。軽度被災者はどのような体験をしているのだろうか。

そこで本研究では、軽度被災者である筆者自身の、被災からライフラインが完全に復旧するまでの約1ヶ月間の被災経験を、対話的な自己エスノグラフィを用いて探求した。被災状況が軽度だった一被災者として経験を語り、検討し、TEMで表すことで、軽度被災者が実際にどのような経験をし、どのような分岐点を辿ってきたのかという新たな視点を提示することを目的とした。

No.062 **知己関係在院者の語りに見る「更生に向けた距離感」について**

小澤豊

法務省置賜学院

東北管内においては唯一の短期間の教育課程を有する男子少年院である当院では、某地域における非行グループ内で知己関係にある3名の少年の入院を立て続けて受け入れ、更生に向けた指導を行うこととなった。本企画では、「知り合い指導」と称して行った本指導に参与観察し、観察結果をTEAを用いて分析し、指導者と3少年の語り、当初は集団生活を円滑に行うために始まったが、次第に3少年の社会復帰後の関係（関係しないことも含めたもの。）の築き方へと変容する過程を描く。

No.063 「団士郎家族漫画展」が見る人の心に喚起するもの
～「未来のための思い出：ココロかさなるプロジェクト」で集めた声の分析を通して

村本 邦子

立命館大学

齋藤 清二（立命館大学）

清 武 愛 流（清 武 シ ス テ ム ズ）

前阪 千賀子（立命館大学）

東日本大震災を受けて立ち上げ、十年にわたって毎年、東北4県を巡回する「東日本・家族応援プロジェクト」は、「団士郎家族漫画展」を中心に据えている。直接、被災を扱っていないが、傍らに置いた感想ノートを見ると、漫画に描かれた誰かの小さな物語が見る人の中に眠っていた記憶を呼び覚まし、何かが活性化するように思われる。今回、京都の京阪三条駅にて、「未来のための思い出：ココロかさなるプロジェクト」という形で9日間の漫画展を開催し、簡単な3つの質問からなる街頭インタビューを実施した。集まった250人の声のうち、今回は、感想を尋ねた最初の問いの回答をM-GTAによって分析することで、漫画展が人々の心に何を喚起し、どのような効果をもたらしているのかを明らかにする。さらに、東日本で集めてきた声、冊子アンケートやWeb展アンケートによる声ともこれを照らし合わせ、「心の防災」のために活かしていく可能性についても検討する。

No.064 Jrome Brunerと意味の行為論の展開

横山草介

青山学院大学社会情報学研究科

ナラティブ心理学の学的展開は概して、人々の人生や経験といった諸個人の生きた「行為の意味」の探求に傾倒してきた。だが、「行為の意味」を問うためには当該の意味が規定されるに到ったその過程が問われる必要がある。というのも、物事の意味は帰結だけで存立しているわけではなく、過程の帰結として存立すると考えられるからである。しかし、ナラティブ心理学の学的展開は屢々、この事実を不問としてきたのではないか。ナラティブ心理学の主唱者の一人に数えられるBruner（1990）は、その著書Acts of meaningの中で、人々の生きた「行為の意味」の探求ではなく、人間が意味を希求する行為としての「意味の行為」の探求を主唱した。本研究は彼の「意味の行為」の議論を「行為の意味論」ではなく「意味の行為論」として読み直すことによってナラティブ心理学の学究の中に意味の行為論の展開可能性を論究するものである。

No.065 二つの団体を中心とした過疎地域の活性化への取り組み
——山口県長門市向津具半島の事例

向井 大介

京都大学大学院人間・環境学研究科

今後日本は更なる高齢化社会を迎え、人口も減少していくことがほぼ確実とされている。それに加えて都市への人口集中も起きているため、将来的には地方で消滅する集落も多く出てくることが予測されている。本研究の目的は、今後の過疎地域のあり方、日本社会のあり方について、事例研究を通じて検討することである。研究フィールドは、過疎化・高齢化が特に進行する山口県長門市の向津具半島である。筆者は向津具半島の二つの地域活性化団体の活動に参加し、地元住民との協同的实践を通じて、そこで生じている様々な問題を明確にし、過疎地域のもつ価値について考察した。結論として、今後の過疎地域のあり方、日本社会のあり方として求められているのは、それぞれの地域に特有な「ローカルな論理」をもとにして「身の丈に合った目標と方法」を地域住民が主体的に考えることであることが示唆された。

No.066 ソーシャルワークにおける現象学の意義と可能性
—方法論的独我論の対人支援実践・研究への応用

植田 嘉好子

川崎医療福祉大学

ソーシャルワーク（以下SW）の対象者は疾病・障害だけでなく、暴力や経済的困窮、社会からの疎外・孤立・差別など、あらゆる背景をもつ人々である。中には加害者や犯罪者など一般社会から理解しがたい立場の者も含まれ、この意味でSWにおける対象者の理解は、いかにその人の立場に深く歩み寄り、接近した視点に立てるかが課題となる。また、チームで支援するためには、対象者の理解内容を支援者間で共有することが求められる。現場ではしばしば、支援者間のそれぞれの専門性に由来する意見の対立が見られ、ソーシャルワーカーはその調整を図りつつ、対象者の要支援性だけでなく“生きる主体”としての理解を求めていかねばならない。現象学は認識の原理の哲学であり、（1）いかに対象者を理解するか、（2）その理解をいかに共有していくか、の2点を達成するための方途を与えている。またその伏線として、実存哲学と言語論との関連も同時に明らかにする。

No.067 **ボランティア体験による大学生の心理発達に関する質的研究
- グランド・セオリーとの比較検討 -**

櫻井由美子

茨城キリスト教大学

大学生のボランティア活動が盛んである。彼らは、ボランティア体験によって、自分自身、どのように発達したとらえているのであろうか。

そこで、本研究では、ボランティア活動体験のある大学生12名を対象に半構造化面接による調査を行い、「ボランティア体験による心理発達」および「心理発達をもたらす要因」についてカテゴリーの生成を行った。

結果としては、「ボランティア体験による心理発達」としては、①キャリア発達②個性化③社会化④世界観の発達が、「心理発達をもたらす要因」としては、①ボランティア体験の場②社会的承認③人との出会い④学生自身の学ぶ意欲が得られた。さらに、これらのカテゴリーとエリクソンの心理社会的発達理論とを対比させ、結果の理論的検討を行った。

No.068 **「団士郎家族漫画展」が見る人の心に喚起するもの
～「未来のための思い出：ココロかさなるプロジェクト」で集まった声の分析を通して**

村本邦子

立命館大学

齋藤清二（立命館大学）

清武愛流（清武システムズ）

前阪千賀子（立命館大学）

東日本大震災を受けて立ち上げ、十年にわたって毎年、東北4県を巡回する「東日本・家族応援プロジェクト」は、「団士郎家族漫画展」を中心に据えている。直接、被災を扱っていないが、傍らに置いた感想ノートを見ると、漫画に描かれた誰かの小さな物語が見る人の中に眠っていた記憶を呼び覚まし、何かが活性化するように思われる。今回、京都の京阪三条駅にて、「未来のための思い出：ココロかさなるプロジェクト」という形で9日間の漫画展を開催し、簡単な3つの質問からなる街頭インタビューを実施した。集まった253人の声のうち、今回は、感想を尋ねた最初の問いの回答をM-GTAによって分析することで、漫画展が人々の心に何を喚起し、どのような効果をもたらしているのかを明らかにする。さらに、東日本で集めてきた声、冊子アンケートやWeb展アンケートによる声ともこれを照らし合わせ、「心の防災」のために活かしていく可能性についても検討する。

No.069 **知的障がい者のきょうだいのライフコース選択を包括的に理解する: 親・きょうだいの語りから**

笠田 舞

榊原記念病院

障がいを持つ者と兄弟姉妹（以下、きょうだい）であることは、きょうだいの親子関係や家庭生活を変容させ、彼らの心理社会的発達に影響を与えることが指摘されている。笠田(2013)は、親の直接的な言葉がライフコース選択における重要なサポートになっていることを示した。しかし、親ときょうだいのどのような関係性やコミュニケーションによって、きょうだいの主体的なライフコース選択が後押しされるのかということは明らかになっていない。そこで、本研究では複線経路等至性モデルを用いて、きょうだいの養育に関する親の体験ときょうだいのライフコース選択の体験を提示し、きょうだいが進むライフコース選択のプロセスを親・きょうだいの視点から包括的に捉えることを目的とした。

No.070 **東京都多摩市における興味・関心のネットワーク**

篠川知夏

東京都市大学大学院 環境情報学
部 環境情報学研究科

小池星多（東京都市大学メディア情
報学部社会メディア学科 教授）

東京都多摩市における地域の起業家へのインタビューや、コミュニティの参与観察を通して、多摩市で活発になってきている地域の「興味・関心のネットワーク」の現状を明らかにする。「興味・関心のネットワーク」とは同じ興味や関心を持つことをきっかけに人同士がつながり、ネットワークを広げることであり、このネットワークのつながりを基に、ビジネスや地域活性化の活動へ拡張していく。具体的には多摩市にある、ワークショップ型コミュニケーションカフェの活動や、ビールイベントを通じた活動の中で越境し続ける人々をフィールドワークしていく。

No.071 5~6歳児にからだの構造と機能を教えることに対する大人の認識とかかわり

世良 喜子

国際医療福祉大学

「保健医療2035」が策定され、20年後を視野に入れたビジョンが提言された。このビジョンのひとつとして「ライフデザイン～主体的選択を社会で支える」が掲げられている。人々が主体的に自らの健康のために、適切な健康情報を選択し、意思決定していくためには、体(構造と機能)に関する知識が基盤となる。学習指導要領では、人の体のつくりや発育・発達については、小学校4年生からの学習にあげられている。しかし先行研究から体についての学習を始めるのは、体の偏見が少なく、自分自身の体への興味・関心が高まり、素直にその関心を示す就学前の5~6歳児が適切であることが報告されている。本研究は、保育園と連携して5~6歳児に向けた体(構造と機能)の知識を獲得するための系統的な健康教育プログラムを開発するための基礎資料を得るために、5~6歳児の体の知識を学ぶことについて保護者や保育士の認識やかかわりを明らかにすることを目的とした。

No.072 英語コースの中国人留学生の価値観変容のプロセスー葛藤と対話に着目してー

田一葦

立命館大学

サトウタツヤ（立命館大学）

留学することは社会的・文化的環境の変化とともにない、元の安定する意味づけのシステムが変化・崩壊し、新しい安定する形を作るための継続性・プロセスを含意する(Zittoun, 2006: P4-5)。本研究の目的は、英語コースの中国人留学生が来日後、世界中からの留学生、教師に取り巻く環境の中で、どのような葛藤と対話が生じ、どのような価値観の変容に至ったかというプロセスを明らかにすることである。本研究は、4人の英語コースの留学生を対象に3回半構造化インタビューを行い、逐語録のデータを意味のまとまりごとに切片化し、SCAT (Steps for Coding and Theorization, 大谷, 2008) を用いて項目抽出を行った。プロセスを描くために、複線径路・等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach: TEA)を用いた。結果として、価値変容は政治関心・勉学・母国への評価という3つの領域で見られた。価値の変容に至るプロセスには価値の崩壊と不安・新しい価値の代替・異なる価値の共存・元の価値の維持というタイプが見られた。

No.073 自己を語る「私」と分析する「私」の倫理的関係ー研究者の批判的自己形成の実践ー

村田観弥

神戸大学大学院

ライフストーリーやナラティブ研究など、質的研究を実施するにあたり、インタビュー調査が有効な研究方法であることについては、言を俟たない。他者に向かって自己を語るという行為は、語り手・聞き手にどのような意味をもたらすのだろうか？発話者が自己内の意味内容を言語化して表現し、無色透明な研究者が対象化した他者を分析する、といった素朴な世界観ではなく、自己が他者を前提としており、対話を通じて研究者も影響を受け変化する主体であるとされ、言葉の意味が発話行為そのものに依ると考えるならば、「分析する研究者である自己を分析する」という行為は研究者態度を再考する上で有意義であるといえよう。本研究では、ニーチェの「疚しい良心」を起点に、アドルノ、フォーコー、バトラーを経由し、自己を開示する機会を「省察」でなく、研究する者の倫理や応答可能性 (responsibility: 責任) として捉えることで、研究倫理について考えるひとつの契機としたい。

No.074 実感としての「つながり」を考えるー身体存在への回帰から

藤井真樹

名古屋学芸大学

人は、他者とのつながりを希求し、そのつながりの中で自分という存在を感じ、生きている。人は、生まれ落ちたときから他者のなかに投げ出され、他者と関わることを通して自己を成立させていく存在である。これは、人間の根源的なあり方である。私たちは、その生のなかで出会うさまざまな他者とコミュニケーションを取ることによって、他者のことをわかったり、わからなかったりしながら、より好ましく感じられるつながりを模索しながら形成していくのである。

近年、情報社会の高度化により、コミュニケーションの形態が多様化し、物理的に距離のある他者や現実では顔を会わせたことのない他者とのつながりの形成も可能となる一方で、人々は以前にも増してつながりを強く求めているように見える。

私たちにとって、本質的な意味でのつながりとは何か。従来の心理学における他者理解の議論に欠如していた身体次元に回帰し考える。

No.075 **認知症高齢者と家族の家庭訪問における保健師の直観の特徴**

山田理絵

西武文理大学

著しい認知症高齢者の増加に伴い、厚生労働省は、2015年に認知症施策推進総合戦略を公表した。その施策の1つとして、保健師が認知症者と家族の家庭訪問を行い、観察・評価に基づき適切な治療に繋げる体制構築が掲げられた。家庭訪問には時間的制約が伴う上に、認知症高齢者はニーズの表出が困難になり、家族メンバーも平然を装うことが多い。そのため、保健師は語られざる複数のサインを短時間でキャッチし臨床判断を行う必要がある。

Benner (1987)は、臨床判断に必要不可欠な要素として、理論に依拠せず複雑な情報から問題の的を絞る能力である直観を挙げている。保健師がこの直観を獲得できれば、認知症高齢者や家族の表情、醸し出す雰囲気といった微細なサインから状況を見極め、援助を見出すことが可能になるだろう。そこで、本研究は、保健師の直観の特徴を明らかにし援助の示唆を検討する。なお、本研究は、公益財団法人日本生命財団の助成を受けて行った。

No.076 **家族の自死をめぐる僧侶のナラティブの分析**

松下弓月

東京大学大学院教育学研究科

世界でも最も高齢化の進んだ日本では、グリーフケアの必要性が高まっている。グリーフケアの担い手は医療従事者による専門的な支援から、同じく死別を経験した遺族によるピアサポートまで幅広い。中でも、日本で伝統的にグリーフケアを担ってきたのが仏教の僧侶である。

僧侶はグリーフケアの担い手であると同時に、大切な人を失った時にはグリーフケアの非支援者にもなる。そうした悲嘆経験の中でも、家族の自死は僧侶にとって多層的な意味を成す経験である。ひとつは、大切な家族を亡くすという個人的な経験。そして、仏教寺院という葬送儀礼を司る公的な場所を運営する立場を通じた社会的な経験。さらに、悩み苦しむ人を救うという宗教者としての経験である。

本研究では、親族を自死で亡くした僧侶が自らの悲嘆経験をどのように捉えているのかを明らかにするため、僧侶による自死に関するナラティブの分析を行う。

No.077 **障がい児育児サークル代表者のアイデンティティに関する縦断的研究**

渡邊照美

佛教大学

菅原伸康（関西学院大学）

家族に障がい児者がいることは、偶然に過ぎない。しかし、その偶然によって形成された障がい児者の家族は、障がい児者の存在によって影響され、親もきょうだいの存在によって家族の在り方に影響を受けることとなる。これまで、障がい児者の母に面接調査を実施したが、母親自身の個のアイデンティティは、子どもとの関係の中に埋め込まれていることが明らかになった（渡邊・菅原, 2013）。

そこで本研究では、母親自身の個と関係性のアイデンティティ様態を明らかにするため、障がい児育児サークルを立ち上げ、代表を行っている母親1名を対象に面接調査を実施した。面接回数は3回で、実施時期は2013年6月、10月、2015年6月であった。2年間の意識の変化と共に、個と関係性のアイデンティティを分析し、その結果を報告する。

No.078 **高校教師の語りによる生徒認知の多様化プロセス**

阪下ちづる

東京大学大学院

本研究の目的は、高校の担任教師を対象とし、教師の生徒認知の変容プロセスを明らかにすることである。対象は、生徒の家庭環境や友人関係のような「背景的側面」の生徒認知を有し、生徒認知の転機として「特定の生徒との出会い」を挙げた教師3名である。教師には、生徒認知とその転機経験に関するインタビューを複数回実施し、TEA（複線経路・等至性アプローチ）のTLMG（発生の三層モデル）を用いて、生徒認知が多様化するまでのプロセスを検討した。

その結果、特定の生徒との出会いは、教師が複数の教師と情報を共有し、生徒の言動や行動を多面的に解釈するようになるという変容をもたらすが、その変容は教師によって様々な文脈の中に位置づけられていることが明らかになった。また、転機を経験すると同時に新たな実践を積み重ねることにより、教師としての価値観や指導観は揺るぎないものとなり、次第に生徒認知が多様化していくプロセスが検討された。

No.079 単学級と複学級での生活における中学生女子への影響

小室 厚子

茨城県東海村立東海南中学校 教諭

本研究の目的は、単学級中学校と複学級中学校それぞれで学校生活を送った生徒に人とのかわりや自分に対しての感覚に違いがあるのかどうかを検討することである。それぞれの生徒約1000人に対し、「時間的展望尺度」「親和動機尺度」「満たされない自己尺度」を用いた質問紙調査を実施したところ、とくに女子に違いが見られた項目があった。違いが見られた下位項目は「時間的展望尺度」の目標志向性、希望、過去受容、「親和動機尺度」の親和傾向、「満たされない自己尺度」の自分らしさ希求、自己愛、目標喪失・停滞感であった。違いとは、それぞれの項目で学年が上がるにつれて違う傾向を示したことである。単学級、複学級それぞれに在籍している女子中学生、さらに単学級経験者の女子大学生にグループインタビューを実施した結果、地域性や人間関係の関わり方の長期化や親密性が関係していることが示唆された。

No.080 介護福祉士の職業継続プロセスの多様性について

小川喜英

筑波大学大学院 人間総合科学研究科 博士前期課程 筑波大学大学院 人間総合科学研究科 博士前期課程

【背景】介護サービス需要の急増を支える介護職の離職率は高いとされ、これまでに職業継続意向や離職意向と様々な要因との関係性が量的分析手法を用いて数多く報告されている。しかしながら、仕事を続けるか否かの葛藤は時間経過の中で随所に存在すると考えられるため、介護職員が経験した様々な事象のありさまを時間経過とともに描き出すことも重要である。【目的】3年以上の勤務年数を有す介護職員が職業上経験した様々な事象を捉え、職業継続プロセスの多様性を可視化する。それにより、介護職員がこれまでどのように職業継続の径路を選択してきたのかを明らかにする。【方法】A地区の入所系施設に在籍する勤務年数3～5年の介護福祉士9名を研究協力者とした。筆者が研究協力者と60分程度、個別に半構造化面接を行った。データは、複線径路・等至性モデル（以下TEM）を活用し分析する。【結果】データ分析中（当日発表予定）。

No.081 不登校状態から社会で活動を再開し継続していくプロセス

谷口 須美恵

青山学院大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程

不登校とは、病気や経済的な問題などの理由なしに、年間30日以上学校を欠席しているという状態（文部科学省の定義）をさす用語である。現在では日本の高校進学率は97%を超えており、義務教育機関である小中学校から高校までの学校システムの文化的な意味合いは大きい。不登校という文化的マイノリティとなった子どもたちがどのように社会で活動を再開し、それを継続していくのかを知り、如何に支援できるのか、という手がかりを少しでも見出すことは、スクールカウンセラー、病院の小児科・精神科臨床心理士として心理的支援をしている筆者にとって重要なテーマである。すでに活動を継続している不登校体験者に実施したインタビューデータをもとに、本発表では、状態像によってさまざまに移り変わる他者との関わり方、支援の在り方に焦点をあて、TEAとM-GTAの2つの手法で分析した質的研究の一端を発表したい。

No.082 心理療法におけるセラピストの身体とクライアントの人生の交差
ー女性セラピストの妊娠から子育て早期に至る語りの分析ー

山口慶子

国立精神・神経医療研究センター

本研究では、妊娠、出産から子育て早期に至る時期にいる女性セラピストが、心理面接においてクライアントと関わるなかで、自らの身体の変化をどのように体験しているのかを検討する。セラピストが人生で直面するさまざまな出来事は、臨床実践を高めることもあれば制限することもある（Gerson, 1996）。なかでも、妊娠から子育てに至る体験は心身の変化を伴い、そのセラピストの臨床的関わりや臨床観に対して重大な影響をもつとされる。そこで本研究では、妊娠期、出産期、子育て早期に行ったインタビューから、身体に関わるエピソードについて内容分析を行い、セラピストがクライアントとの関わりにおいて自らの身体をどのように体験し、身体がふたりの間でどのような意味をもっているのかを検討する。そして各期を具体的にみていくと、妊娠、出産、子育てという一連の流れにも、各期に隔たりや異なる様相がみられることを報告する。

No.083 あるALS患者さんの在宅療養の道のり～主介護者だった遺族の視点から～

杉原正子

独立行政法人国立病院機構 久里浜
医療センター（慶應義塾大学医学
部精神神経科学教室）

【背景】未曾有の高齢社会に直面した日本では、専門性、病院志向から介護・福祉優位の対応に変革することが急務である。中でも、筋萎縮性側索硬化症（Amyotrophic lateral sclerosis, ALS）からは、その難治性、進行性、介護の難しさにより、人工呼吸器装着や中止の議論も含め、様々な課題点を学ぶことが可能である。

【方法】本研究では、ALSで人工呼吸器を装着した実母を在宅で介護し看取ったある遺族にインタビューを行った。

【結果】診断の難さなど、患者さんやご家族が遭遇し、乗り越えてきた困難だけではなく、学生教育を兼ねたケア体制など、予想を超えて功を奏した対応策も明らかになり、一般の医療者や市民には未知の重要な視点が多数語られた。

【結論】ALSに関しては、これまで医学的な量的研究が主流だったが、一人一人の当事者の声に丁寧に耳を傾け考察する所に常に立ち帰り、質的研究と量的研究との協同により、すべての難治困難例の介護福祉政策に還元する方法を模索し続ける必要がある。

No.084 東日本大震災における「書道教室」の参与観察研究(3)

河合直樹

京都大学

永田素彦（京都大学）

第一発表者は、東日本大震災被災地である岩手県野田村において、2012年10月以降、住民を対象とした「書道教室」を、ほぼ毎月開催してきた。発足当初、この書道教室は、参加者が書道を学ぶ対内的な学習コミュニティであった。そして、開催回数を重ねるにつれて、どことなく閉鎖的な雰囲気が書道教室内に見られるようになったことに、第一発表者は一抹の危惧の念を覚えていた。ところが、参加者の一人が野田村総合文化祭への出展を提案し、他の参加者の賛同を得ることで、2014年11月、「河合書道教室」の初出展が実現した。多くの参加者は、出品に向けて普段以上の練習を積むとともに、次年度の出展への強い意欲と結束を示すようになった。本発表では、これまでの研究成果を踏まえながら、対外的な活動が対内的な結束を高める可能性を理論的に考察し、復興支援活動としての書道教室の意義を論じる。

No.085 治療者となる針路を選んだ口唇口蓋裂者の体験プロセス

梶原和美

鹿児島大学大学院医歯学総合研究
科

口唇・歯槽部・口蓋などの口腔顎顔面領域に披裂を生じる先天異常である口唇口蓋裂（Cleft Lip and/or Palate: CLP）の子どもは、出生直後から成人期に至るまで口腔衛生管理、手術、言語治療、歯科矯正治療を系統的・継続的に受けることになる。その間、患児は治療を受ける理由、顔の変形、周囲との関係等をめぐって様々な思いを抱え、それを自分なりに消化しながら、ある者は自分自身が将来、治療者になることを希望する。

本研究では、基本的な治療を終え、現在CLP治療に従事している当事者がこれまでにどのような体験をしたか（CLPであるという現実とどのようにつきあってきたか、CLPをめぐって親や家族、周囲の人々との関係でどのような問題を感じ、それにどのように対処してきたか）についての語りを質的に分析し、患児と家族の支援に関わる要件を検討する。

No.086 高校生の交流による障害理解過程—交流及び共同学習の経験の語りから

楠見友輔

東京大学

国際的なインクルーシブ教育の潮流の中で、障害児との交流を通じた健常児による障害理解がますます重要になってきている。本研究で筆者は、年度内の特別支援学校中学部と普通高校の「交流及び共同学習」の参与観察とビデオカメラでの記録を行い、そのビデオを編集した映像を高校生に見せながら再生刺激法による交流経験の半構造化インタビューを行った。インタビュー結果からは、障害一般に関する心像(Mental Imagery)と、他者としての障害児についての印象(Impression)が相補的に形成されていたことが明らかになった。交流という具体的経験を通して高校生の障害理解は、概念変化、関心の深まりによる変化として進み、スキーマがそれに影響を与えていることが考察された。また、障害理解における他者理解は、自分の先入観についての内省的な検討が行われるという方法で、最終的に自己理解にも繋がり、このような過程としての障害理解過程が明らかにされた。

No.087 保育カンファレンスを通じた保育者の子どもを見る視点の変容プロセス

富山 大士

秋草学園短期大学

都内のA保育所において、研究者とともにアクションリサーチ的に職員間の保育カンファレンスを開始し継続するなかで、日々共に保育をする保育士たちが子どもを見る視点に変容していくプロセスを理解することを目的として研究を推進した。

さまざまな年齢・経験年数の保育者が、自分たちの実践する保育ビデオを題材に語り合いを積み重ねていくなかで、保育中に自分が感じた事や子どもの姿から読み取れる事を語り合った。その保育カンファレンスでの保育士たちの発言を逐次記録するとともに、本カンファレンスに参加した8名の保育士を対象に子どもを見る視点の変容に関するインタビュー調査を実施し、複線径路等至性アプローチ（TEA）を用いて、変容のプロセスを解析した。

保育者間の話し合いを通して、保育者間の風通しの良さを生むことや、先輩保育者の発言を転機として後輩の視点の揺れが新たに子どもの見方が再構築していく過程が明らかになった。

No.088 ナラティブ・アプローチを臨床教育にどう生かすか
—文学授業のなかの教師と学生の対話を事例として—

荒木奈美

札幌大学

本発表の対象フィールドは、自身が担当する「文学」を扱った授業である。あいだに文学教材を置き、その解釈をめぐる学生と対話を繰り返すことで、授業者も学習者も、自分の問題と出会うことになる。——自身が知らずしらずのうちに作り上げていた強固な「枠組み」の存在への気づき。それが足枷になって自己理解を妨げたり他者を許すことができなかつたのかもしれない。あるいは自分の「強み」とは何か。「芯」の部分で「私」を支える「軸」になっているものって何だろう。自分とは異なる意見の存在によって気づかされたかもしれない—— クランディニンがNarrative Inquiryと名づけ実践した、教育現場のなかでの対話をもたらす「意味の生成」という観点から、改めて「語る」という行為の持つ力とその無尽蔵の可能性を再発見したいと考えている。

No.089 「団士郎家族漫画展」が見る人の心に喚起するもの
～「未来のための思い出：ココロかさなるプロジェクト」で集めた声の分析を通して

前阪 千賀子

立命館大学

村本邦子（立命館大学）

齋藤清二（立命館大学）

清武愛流（清武システムズ）

東日本大震災を受けて立ち上げ、十年にわたって毎年、東北4県を巡回する「東日本・家族応援プロジェクト」は、「団士郎家族漫画展」を中心に据えている。直接、被災を扱っていないが、傍らに置いた感想ノートを見ると、漫画に描かれた誰かの小さな物語が見る人の中に眠っていた記憶を呼び覚まし、何かが活性化するように思われる。今回、京都の京阪三条駅にて、「未来のための思い出：ココロかさなるプロジェクト」という形で9日間の漫画展を開催し、簡単な3つの質問からなる街頭インタビューを実施した。集まった250人の声のうち、今回は、感想を尋ねた最初の問いの回答をM-GTAによって分析することで、漫画展が人々の心に何を喚起し、どのような効果をもたらしているのかを明らかにする。さらに、東日本で集めてきた声、冊子アンケートやWeb展アンケートによる声ともこれを照らし合わせ、「心の防災」のために活かしていく可能性についても検討する。

No.090 「訪問支援」のオルタナティブ
—ひきこもり支援におけるアウトリーチのありかたについて—

滝口克典

ぶらっとほーむ

ひきこもり支援の定番とされる「訪問支援」「居場所」「就労支援」。このうち「訪問支援」は、自力で「居場所」につながるできない若者たちのもとを、支援者が訪れ、外へと誘い出すアウトリーチの実践を意味している。近年は、各地で「訪問支援」の制度化の動きも進んでいる。とはいえ、「訪問支援」とは、対象となる若者のプライバシー領域への侵襲性を伴いうる実践でもあり、決して手放しで肯定できるものではない。では、「訪問支援」に代わるアウトリーチの実践としては、どのようなかたちが可能であろうか。本報告では、ひきこもり状態から脱した経験をもつ若者たちへの聞き取り調査から、彼（女）らがどのような契機でひきこもりから脱することに成功したのか、そしてそれを一体どのような資源が支えていたのか、について明らかにし、それらを抽象化するかたちで、「訪問支援」に代わる侵襲性のより少ないアウトリーチのありかたについて考察する。

No.091 技術-社会的ネットワークとしての市民デジタルアーカイブ

中村 雅子

東京都市大学

東日本大震災を契機に地域の記録の保全・活用に関心を集めているが、震災以前から（歴史のあるものでは1990年代から）、地域のデジタルアーカイブに取り組んでいる市民活動（市民デジタルアーカイブ：市民DA）も全国に存在する。本分析では国内の主だった市民DAの事例研究を行った。運営者インタビューを中心とする分析から、市民DAの運営には、運営団体単独ではなく外部の多様な組織や個人、テクノロジーをどれだけ動員できるかという戦略が重要であり、活発な市民DAでは、次々と生じる状況の変化の中で社会-技術的ネットワークが動的に生成・維持されていることが明らかになった。

No.092 子どもがいない中高年期女性が抱える心理的問題—「親の存在」に着目して

佐藤佳淑

東京大学教育学研究科

【背景と目的】中高年期以降にも子どもがいないことで悩む女性が存在することから(Allen & Wiles, 2013)、子どもがいないことは生涯にわたる問題となることが示唆され、子どもがいないことによる心理的問題を中高年期まで含め検討する必要がある。また、子どもがいないことによって、その親にも「孫がいない」という意味で影響が生じる。本研究では、子どもがいない中高年期の女性を対象に、子どもがいないことによる心理的問題をその女性の「親の存在」に着目して検討した。

【方法】子どもがいない50代の女性を対象に半構造化面接を行った。分析は竹家(2008)を参考に、対象のエピソードを抽出した。

【結果と考察】子どもをめぐる問題として、「親の存在」と「親との関係性」がかなり大きな割合を占めていた。具体的な語りとして、「孫の顔を見せてあげられなかったことが残念」や、「親が自分に子どもがいないことをどう捉えているかわからず、苦しんできた」が挙げられる。

No.093 大規模災害を契機に乳幼児と被災地を離れ、九州北部での生活を継続する保護者達の人生の径路 —複線径路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach：TEA) —

松永妃都美

佐賀大学医学部 地域・国際保健 新地浩一（佐賀大学医学部）
看護学講座

2011年3月11日に発災した東日本大震災は、地震・津波・原子力発電所の事故が併発した複合災害であった。この災害により住み慣れた町を離れた人々が存在する。復興省は、現在も約22万人（福島・宮城・岩手県内に約17万人 平成27年4月現在）が避難生活を継続していると公表しているが、これは名乗り上げ者の累計であり避難者実数、実態は明らかでない。本研究では、東日本より遠く離れた九州北部地域に広域避難し、生活を継続する乳幼児の保護者達に焦点し、発災から現在に至るまでの人生の径路を複線径路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach：TEA) により分析描写し、発災直後からの広域避難者支援の在り方を検討する。

No.094 インタビューアによる個人差の分析(1)

黒須正明

放送大学

橘爪絢子(首都大学東京)

インタビュー調査では、インタビュー担当者(インタビューア)による個人差が存在し、いわゆる「うまい人」「下手な人」が存在する。まず、その実態を把握するために、同一の条件でインタビュー調査法について授業を行った学生にインタビューを行わせ、書き起こしをさせた。その結果についての定量的、定性的結果を報告する。

No.095 「ぼうさいCREDO」のポテンシャルに関する基礎的考察

近藤誠司

関西大学社会安全学部

杉山高志（京都大学大学院情報学研究科）

東日本大震災以降、地域防災活動を強化することが急務となっている。ところが、こうした取り組みにおいては、現況の課題や不足—たとえば、家具が固定化されていないことや、住宅が補強されていないことなど—がクローズアップされるあまり、ネガティブな言説や後ろ向きなイメージが拡大再生産されてしまうことがしばしばであった。そこで、本研究では、ポジティブなことば、すなわち「ぼうさいCREDO」（クレドはラテン語で、未来に向けた約束や信条という意味）を、地域や学校において数多く拾い集めることを通して、人々の意識や態度にどのような変容を及ぼすのか注視していく。神戸市長田区真陽地区で実施した予備調査を中心に報告する。

No.096 Xジェンダーを通して考える性自認のあり方

山田苑幹

名古屋大学大学院 教育発達科学 川浦佐知子（南山大学）
研究科

本研究では、Xジェンダーという概念のあり方を再考し、ジェンダー・アイデンティティ研究に新たな知見をもたらすことを目的に、男女のいずれかではない性自認を持つ4名にインタビュー調査を行った。インタビュー内容は逐語に起こし、ナラティブ分析によって分析した。分析結果について、性自認が男女のいずれかではない人々にとっての（1）Xジェンダーという言葉の捉え方（2）カミングアウトの意味（3）男女のいずれかではない性別を生きるということ（4）Xジェンダーの存在を知ることの4つの視点から考察した。その結果、男女のいずれかではない性自認を持つ人々の、男女二元論が主流となっている社会の中での性自認の捉え方や、自身の性自認との折り合いの付け方の多様性が明らかになった。これにより、Xジェンダーという概念の可能性と限界の両面が浮かび上がった。

No.097 児童養護施設における大学生の学習ボランティアの役割

保坂裕子

兵庫県立大学環境人間学部

さまざまな家庭背景を理由に児童養護施設に暮らす子どもたちは、日常生活のサポートは保障されているものの、学習面での遅れの問題が多く指摘されている。そのことが社会的排除、またその連鎖へとつながっていると考えられる。そこで本研究では、施設入所児童の学習面での支援を実施する大学生ボランティアの視点から、その役割とこれからの課題について検討してみたい。大学生によるボランティアは、学力の向上を目指すことはもちろんであるが、入所児童の学習への動機づけへと働きかける可能性をもつのではない。社会との多様なつながりにふれることで、自らの将来や社会との別なる接点を見出すことは、子どもたちに新たな人生の展開可能性への示唆をもたらす役割を果たしていると考えられる。

No.098 独居高齢者の在宅終末期支援における医療・介護・本人／家族連携：サービス付き高齢者向け住宅の事例から

竹内みちる

高齢者住宅研究所

現在、わが国では看取りの場は病院・診療所といった医療機関が中心となっているが、死亡者数が急増する「多死時代」を迎えるにあたり、看取りの新たな担い手として有料老人ホームやサービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）といった高齢者住宅に大きな期待が寄せられている。樋口（2010）が、質の高い終末期ケアには4条件（①本人・家族の意思表示、②ケアを支える介護力やサポート、③医学医療ケア、④ケアマネジメント）が必要であると述べているように、在宅終末期支援においては医療・介護・本人／家族の連携が必要である。

本研究では、サ高住における在宅終末期支援で、医療・介護・本人／家族の連携とはいかなるものであるのかを、12住宅での看取り事例22件の記録（ケアプラン一式、介護サービス事業者提供記録等）とサ高住のサービス連携や実際のサービスに詳しい職員（一般には運営・管理責任者）に対して行ったインタビュー調査から明らかにする。

No.99 コミュニケーション論におけるTEA（複線径路等至性アプローチ）の活用

サトウタツヤ

立命館大学

JHC（Jリーグ人材育成事業）において「コミュニケーション論」を担当した際に、TEA（複線径路等至性アプローチ）をイノベーションに活用することを考えた。具体的には、JHCの第1期講座参加者に対して、自身がこの講座に参加した経緯をTEA（複線径路等至性アプローチ）で表し、どのような要因が促進・妨害していたのかを理解し、この場に参加できなかった人の存在を想像することによって、次期応募者への働きかけをする手がかりにするためにTEAを用いてみたのである。マネジメント講座におけるTEAを用いた実践のあり方を素材にして、その可能性について検討したい。

No.100 現象学的研究方法間の比較によるアプローチの共通点と相違点の検討

戸口太功耶

兵庫教育大学大学院 連合学校教 葛西真記子（鳴門教育大学）
育学研究科 博士課程

これまでの質的研究では、Creswell（2006）が挙げる5つのアプローチのひとつとして位置づけられるように、ひとまとまりの体系として現象学が用いられてきた。しかし、方法論として取り組まれてきた現象学は、研究者によって手続きの展開がいくつか異なってきた。例えば、Keenの現象学的心理学（1975）、Colaizziの現象学的分析（1978）、Moustakasの現象学（1994）、Watsonの記述的現象学的方法論（1997）、Smith, Flower & Larkinの解釈学的現象学（2009）、Giorgiの現象学的アプローチ（2009）、これらは手続きの構造や、主として想定しているデータ収集の手段、段階的な方略の強度といった点で異なっている。これらの差異をどのように考え、それぞれのアプローチを捉え、利用し、今後の質的研究としての現象学を展開していくべきなのであろうか。本研究では、それぞれのアプローチをさらに体系的に比較し、共通点と相違点を検討する。

No.101 エリクソンのアイデンティティ概念の検討について竹田による現象学の捉え方を

小沢一仁

東京工芸大学

日本において現象学は、これまで西平(1964)、山下(1981)、吉田(1987)、佐久川(2013)、渡辺(2013)、西村(2014)等が導入を行っている。本発表では、竹田による現象学の捉え方をエリクソンのアイデンティティ概念の検討に適用する。竹田(1986)は、フッサールが提示した、主観－客観問題を解くための「現象学的還元」は「確信成立の条件を明らかにする」ことをめざすものとする。また、対象に対する確信を「存在確信」と「存在様態の確信」に分類した(竹田,2012)。そこで、竹田の現象学を適用し、青年期等のアイデンティティ危機では、自分が生きていることについての主観－客観問題が生じており、自分が生きていることは確信している（存在確信）が、その自分を納得して受け入れることができない確信を持っている（存在様態の確信）と捉えることができる。この現象学を用いたアイデンティティ概念検討は、質的研究の基盤とすることができる。

No.102 原爆体験者の対照的な語りーディスコースの用い方に視点を当てた分析ー

松尾純子

福島県緊急スクールカウンセラー

原爆の語りにおける反戦・反核ディスコースまたは平和ディスコースは、イデオロギーに回収されたと言われてきた。だがディスコースとは、個人的体験を社会に向けて語るには必要で、用い方が異なるものではないだろうか。本研究は、どのようなディスコースを用い、どのようにポジショニングして語るのかをリサーチクエスチョンとし、語り手のポジションをハーマンの被害者と生存者という視点から分析した。対象者は1950年代に語り始めたSさんとFさんであり、データ収集法はライフストーリーインタビューである。結果、両者ともディスコースに基づく定型的な語り方をするものの、Sさんは、生存者ポジションで反戦・反核ディスコースを平和ディスコースにつなぐのに対し、Fさんは、被害者ポジションで反戦・反核ディスコースの中心に自己を位置づけていた。その語り方は、ハーマンの言うように被害者から生存者へと段階的移行するのではなく、他者に対するあり様を示した。

No.103 防災教育における「弱さ」の意味について～「クロスロード：大洗編」の取り組みを通じて～

李 勇昕

京都大学防災研究所

矢守克也（京都大学防災研究所）

「クロスロード：大洗編」とは、東日本大震災の被災地茨城県大洗町の住民が、自分の震災体験に基づいて作成した防災教材である。その内容は、住民が作った二選択一の設定カードと当事者本人が設問についての見解を語る映像である。これらの映像は、当事者が決断しなければならない際に、矛盾、葛藤、苦悩、恥ずかしいなど「弱さ」の言葉、表情や振る舞いを呈している。当教材が防災教育として地域で実施されるとともに、当事者解説の映像を通じて、これらの個人の「弱さ」も公開している。そこで、「弱さ」は地域の防災取り組みにおいて、どのような反響があるのか。また、映像というツールを用いて、当事者はどのように自分自身の「弱さ」と向き合っていくのか。本研究では、以上の問題意識を踏まえ、「クロスロード：大洗編」の取り組みにより、当事者と参加者の語りに着目し、「弱さ」の意味について検討する。

No.104 絵本でつながる子どもたちー共感性を高める絵本活動の実践ー

増山由香里

旭川大学短期大学部

幼児は園生活の中で、どのように他者とつながる体験をしているのだろうか。また保育者は、幼児が他者とつながるためにどのような援助を行っているのだろうか。本研究は、2園の絵本活動の実践に焦点を当て、幼児期の子どもたちが、絵本を仲立ちに、どのように他児や保育者とつながり、どう共感性が高まっていったのか、また、絵本は他者と他者をつなぐ一助となり得るのかを検証した。

その結果、保育者による継続的な絵本の読み聞かせは読み合わせに変化し、オリジナルの絵本作りなどあそびとして深化していった。その際、保育者は子どものつぶやきや子どもの関心に気づき、そこで共感的他者となり、子どもと子どもをつなぐ役目を果たしていた。クラスの共感性は、子どもに寄り添った保育者の言動や思いを契機に、あそびという形で言葉や身体を通して高まっていったと考えられる。＊本研究は全国保育士養成協議会北海道ブロックの研究助成を受けたものである。

No.105 脊髄損傷患者の体験や経験に関する文献検討
ー国内外の質的研究に焦点をあててー

村上 優子

首都大学東京大学院

脊髄損傷は、突然の事故などにより脊髄に損傷をうける病態であり、一度脊髄を損傷すると、多くの場合知覚・運動障害などの永続的な障害が残存する。このような脊髄損傷患者が、受傷後の苦痛の強い時期を乗り越え、安定した状態で今後の生活を送っていくことができるように支えることが看護の重要な役割であると考えられている。そのため、患者の体験や経験を理解するために様々な研究がなされている。先行研究の中では、脊髄損傷患者の体験や経験とともに、「希望」、「立ち直り」、「生きる力」、「障害受容」といった側面に焦点をあてて探究されている傾向があった。このようなテーマ設定がなされること自体に、脊髄損傷患者についてのある見方が含まれているのではないかと考えられる。そのため、本研究では、脊髄損傷患者の体験や経験がどのような見方で研究されてきたのかを明らかにし、新たな患者理解につながる視点について検討したい。

No.106 摂食障害からの回復プロセスにおける心的体験に関する考察
ー身体的・心理的回復の2つの観点からー

川上侑希子

東京大学大学院

本研究は、摂食障害からの回復プロセスにおける主観的な体験を、2つの意味の回復という観点から考察することを目的として行った。11名の摂食障害経験者に回復プロセスに関する心的体験についてインタビューを行い、得られた語りのデータの分析を、MGTAを参考に行った。結果、身体的回復には【他者から受容されていると感じる】、そして他者に守られる中で【新しい環境、生活に踏み出す】ことが、心理的回復には【現実の他者性に直面し、受容する】ことが重要であると示唆された。また回復プロセスに欠かせないものが「他者」と「体感」であると示唆された。すなわち摂食障害からの回復プロセスは、病にある内は他者性を閉め出す心性を持つ彼らが「他者」から受容される中で現実世界における他者性を「体感」し、徐々に他者性を受容していくプロセスである。そして、そのプロセスには彼らにとっての「重要な他者」の存在が必要不可欠であると示唆された。

No.107 **参与観察法における「データ」の成り立ちに関する考察**
—フィールドワークとフィールドノーツとのあいだに起こっていること

細野 知子

首都大学東京大学院人間健康科学
研究科看護科学域

参与観察法でのフィールドワーク（以下FW）からフィールドノーツ（以下FN）を作成する過程では、いかなる現象が生起しているのか。筆者は現在、病いの経験を探究する現象学的研究において、FWからFNを書き起こす「データ収集」を実践している。重ねられていくそれらの実践では、研究者がその現場で見たこと、見たことをいかに書くのかという葛藤に直面する。探究する現象がその方法を要請するために多様なデータのスタイルがある一方で、明確な方法を持たないがゆえにその形態は無限の可能性を孕む。データが持つその性格は、研究成果の評価や伝達を困難する場合もあるが、このことに言及した文献は少ない。本稿では、筆者によるFN作成過程から、研究者の体験したこととその言語化とのあいだで生起したことを分析する。次いで、先行研究の視座との議論によって、このような質的研究における「データ」の成り立ちを考察し、病いの経験を開示する可能性を探る。

No.108 **「実践共同体」としての保育や授業を見合う研究会の場の構成**
—対話における相違性と方向性の出現を規定する制約と関係性—

岸野麻衣

福井大学

保育や授業に携わる実践者にとって、複数の実践者・研究者が協働で実践を見て、見たことを持ち寄り、共同で再構成しながら、解釈を交流していく研究会がしばしば行われ、そこでなされる自身の見方や行為の省察が力量形成に結びつくとされている。しかしそこでどのような対話が起き、どのような制約の下で方向づけられうるのかは明確にされていない。報告者は、保育や授業を見合う複数の研究会に参加しながら、実践場面のビデオ記録と研究会の音声記録を収集した。研究会では、経験年数や立場等の違いを越えて「私」の語りが交錯する中で、着眼点の相違、出来事の読み取りの相違、価値の相違が立ち現れていた。研究会の場は、実践を共有して学び合いながらより良い実践を志向していく「実践共同体」と考えられるが、そこに内在する様々な相違が対話の中でいかに方向づけられていくのか、社会・制度的な制約や関係性等の観点で捉えられたことを報告したい。

No.109 **いじめ経験の長期的影響に関連する要因の探索的検討**
—いじめ経験時の周囲の人の関わりに着目して—

齊藤英俊

北陸学院大学

いじめ被害経験の影響は、経験時だけでなく、その後も影響があり、いじめ被害経験者は長期的にも心理的・身体的に影響を受けている。いじめ経験の長期的影響にはプラスの影響とマイナスの影響がある（香取、1999）。

本研究では、いじめ被害経験者の長期的影響にいじめ被害経験時の周囲の人（親、先生、友人など）のどのような関わりが関連しているかを検討することを目的とする。青年期のいじめ被害経験をもつ人を対象に、現在のいじめ被害経験への意味づけ、いじめ被害経験時の周囲の人の関わりの中で役立った関わりと役に立たなかった関わりについて自由記述で回答してもらった。その結果、役立った関わり、役立たなかった関わりには、共通点がみられ、いじめ経験の長期的影響のプラスの影響を促進させるような関わり方、いじめ被害経験時の周囲の関わりやサポートとして必要なことについて考察する。

No.110 **断酒会への長期参加者が語る断酒実践の変化とプロセス**

三好真人

目白大学人間学部

アルコール依存症とは、病理の完全な解決が困難な問題である。〈治癒はないが回復はある〉という言葉は、その道のりが多様な意味を含むものであることを物語っていると思われる。そして長い歳月が伴い、様々な問題と付き合い続けながら断酒の道を歩んでいくことになる。

当事者が断酒を継続するための資源として断酒会やAAを代表する自助会がある。自助会での回復メカニズムは多くの研究が提示してきたが、ここでは当事者が断酒実践と参加を継続していく歳月のなかで生起する多様な変化とプロセスに着目することとする。

断酒会に長期に渡り参加を継続する11名の回復者を分析の焦点者とし、断酒実践と会参加継続における変化とプロセスをテーマとした。

当事者は、自己、メンバー、家族、会、言葉、医療、法律といった様々な変化のなか断酒を継続していくことになる。長い歳月のなかで問題と付き合いながら多様な変化とともにある姿を描くことを試みる。

No.111 タブレット端末導入による学習状況の変化

菊地 快

淑徳大学

池田 真弓（淑徳大学）

近年、学校教育ではタブレット端末を使用した学習形態が注目されている。それによって高い学習効果を得られることが期待されており、文部科学省は2020年までに一人一台タブレット端末を導入した学習計画を掲げているが、その効果について今後研究を蓄積していく必要があるだろう。そこで本研究では、学業にタブレット端末を導入した大学生を対象にインタビュー調査を行い、これまでの学習状況からの変化について検討を行った。インタビューデータについてはグラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を行い、学習状況の変化に関するモデル図を作成した。モデルでは、【学習スタイルの変化】や【勉強に対する認識の変化】等が生じることが示された。

No.112 子育て経験の中で父親が感じている変化

増井秀樹

京都大学 人間・環境学研究科

本発表では、父親が日々の生活や子育て経験の中でどのような体験をしているのかについて、自身がどのような場面で変わったと感じているかという点に焦点を当てて発表する。

子どもをもち親になるという経験は成人期の一大イベントであると考えられ、わが国では生涯発達の観点から主に質問紙による検討がなされてきた。これらの研究は、一般的、社会的な次元で親の体験を明らかにしたという点で意義がある。一方、子育て経験は個別・具体的なもので、多様であるということに着目した研究も近年増えてきている。しかし、父親の場合、個々の親が子育ての中で何を感じ、経験しているかということについては、あまり焦点が当てられてこなかった。

方法としては、子育てへの関心や参加度が高いと思われる、父親支援のNPOのメンバーである10名に対して、子どもが生まれてから現在に至るまでの人生史について語ってもらった。



インタビュー
現場の写真
先行論文 etc...

研究に必要な情報を
まとめて分析

質的研究をサポートする
ソフトウェア

NVIVO



2015 年 10 月 16 日（金）、〔無料〕 NVivo オンライン・デモ開催

NVivo セミナー



<http://www.nvivo.jp/>

北大路書房

〒603-8303

京都市北区紫野十二坊町12-8

☎ 075-431-0361 FAX 075-431-9393

http://www.kitaohji.com

振替 01050-4-2083

人間科学のための混合研究法

—質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン— J. W. クレスウェル・V. L. プラノ クラーク著 大谷順子訳 A5・328頁・本体3300円＋税 研究プロセスの各段階において、質的・量的アプローチでデータを取集・分析・混合し、各々のアプローチの長所を組み合わせることをめざした研究方法論。

社会的ネットワークを理解する

C. カドウシン著 五十嵐 祐監訳 A5・336頁・本体3400円＋税 近年のSNSの普及といった環境変化も踏まえ、「社会的」なネットワークの形成・維持を支える人間行動の基本原則について、社会学の知見をベースに理論的な説明を提供。個人に始まり、小集団から大きな社会システムへと論を展開。集団のダイナミクスを個人の視点から扱う試み。

教育研究のための質的研究法講座

関口靖広著 A5・256頁・本体2800円＋税 現場教員にもわかりやすい教育現象の質的な研究法の手引書。前半の入門編では、専門用語を使わずに具体的な研究の進め方を概説。より専門的な理論や研究法のテクニックは後半の各論編にまとめられ、必要に応じて関心のあるところをピックアップして読めるようになっている。

改訂エンサイクロペディア 心理学研究方法論

W. J. レイ著 岡田圭二編訳 B5上製・404頁・本体5000円＋税 「行動と経験の科学」としての心理学の基盤となる研究方法を徹底的に詳しく記述した、好評書の改訂版。原著第10版（2011年）を忠実に訳出するとともに、日本の読者が更なる理解を深められるように「論文執筆見本」と「領域毎の研究手法の解説」を付す。

質的研究ハンドブック(全3巻)

N. K. デンジン・他著 平山満義監訳 本体4600円＋税～5600円＋税

改訂Stataによる社会調査データの分析

石黒 格編著 本体2300円＋税

あなたは当事者ではない

宮内 洋・今尾真弓編著 本体2500円＋税

質的研究用語事典

T. A. シュワート著 伊藤 勇他監訳 本体3200円＋税

社会調査士のための多変量解析法

小杉考司著 本体2300円＋税

〈当事者〉をめぐる社会学

宮内 洋・好井裕明編著 本体2800円＋税

質的データの取り扱い

L. リチャーズ著 大谷順子・大杉卓三訳 本体3200円＋税

SPSSのススメ 1・2

竹原卓真著 1・本体3200円＋税 2・本体5700円＋税

はじめてのR

村井潤一郎著 本体1600円＋税



A5判
2700円

心理学研究法6 計量・数理

大山 正監修/宮楚壽夫編著 心理学のすべての領域に関係する計量心理学および数理心理学の使用法と活用法を、初学者にも分かりやすく解説。主成分分析、多変量解析、刺激の多次元表象やテスト分析に関わる数理モデルを中心に理解を促す。巻末に解析ソフト「R」の活用法を収録。



A5判
1800円

職場のポジティブメンタルヘルス——【現場で活かせる最新理論】

島津明人編著 従業員のメンタルヘルス対策に役立つワーク・エンゲイジメントやレジリエンスなどの最新理論を、いかに現場に当てはめ応用していくのか、第一線の研究者が実践例とともに示す。研修会のネタにも最適。



B5判
2600円

心理学のための統計学 4

教育心理学のための統計学—【テストでココロをはかる】

熊谷龍一・荘島宏二郎著 信頼性係数、項目反応理論、マルチレベル分析、適性処遇交互作用、特異項目機能を重点的に取り上げ、教育心理学ならではの「望ましいテスト作り」に役立つ統計手法を解説。2色刷り。



B5判
2600円

心理学のための統計学 7

発達心理学のための統計学—【縦断データの分析】

宇佐美 慧・荘島宏二郎著 発達心理学に必須の縦断データをはじめ、幼児や高齢者でサンプルを取る際に頻繁に起こる欠測データの扱い、潜在成長モデル等を心理学の文脈で分かりやすく解説した2色刷りテキスト。



B5判
2600円

心理学のための統計学 9

犯罪心理学のための統計学—【犯人のココロをさぐる】

松田いつみ・荘島宏二郎著 犯罪捜査で使われる頻度の高い、多次元尺度法、決定木、ナイーブベイズ、ブートストラップ、数量化理論、生存時間分析、地理空間分析などを取り上げ、現場で活きる統計学を解説した2色刷りテキスト。



B5判
2400円

人文・社会科学のためのテキストマイニング【改訂新版】

松村真宏・三浦麻子著 テキストマイニングを、「分かりやすく」として「タダ」で行うことを可能にする、入門書に最適な一冊。改訂新版では、使用ソフトの変更に伴い旧版の第5章を全面改訂し、時代に合わせた内容に刷新！



A5判
2000円

日本心理学会監修 心理学叢書 4

本当のかしこさとは何か

——【感情知性（EI）を育む心理学】

箱田裕司・遠藤利彦編 自他の感情を適切に扱うための知性EI。ビッグファイブとも関連が深いこの概念を詳説し、測定実験や教育プログラムなどを具体的に紹介。



A5判
2000円

日本心理学会監修 心理学叢書 ⑧

无缘社会のゆくえ

——【人々の絆はなぜなくなるの？】

高木 修・竹村和久編 少子化、未婚率と単身世帯の増加、高齢者の心理などをデータで示しつつ、社会で急速に広がっている「无缘」の問題を分かりやすく解説。

誠信書房
SEISHIN SHOBO

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-20-6 TEL 03-3946-5666 FAX 03-3945-8880 【価格は税別】

香川秀太・青山征彦 編

越境する対話と学び

異質な人・組織・コミュニティをつなぐ

企業、医療・看護、教育……さまざまなフィールドで、既存の組織・集団の枠を越えた変革と創造が求められている。ユニークな実践事例、調査、理論的検討から越境の可能性と困難を描き出す「越境論」への招待。

A5判並製400頁／3600円＋税

佐藤公治 著

ヴィゴツキーの思想世界

その形成と研究の交流

ヴィゴツキーが一連の研究を通して言いたかったことは？人間精神に対するヴィゴツキー思想の生成発展過程を哲学者、心理学者、芸術家たちとの思想的対話から検証。ヴィゴツキーの理解に新しい地平を開く。

四六判並製320頁／2400円＋税

牛山美穂 著

ステロイドと「患者の知」

アトピー性皮膚炎のエスノグラフィ

「科学的エビデンス」と「患者自身の経験」がすれ違うアトピー性皮膚炎治療における葛藤を、日英の近代医療、民間医療、患者団体への長期インタビューによって調査、「患者の知」を生かす方途を探索。

四六判並製224頁／2100円＋税

丹野宏昭・児玉健 著

人狼ゲームで学ぶ コミュニケーションの心理学

嘘と説得、コミュニケーショントレーニング

A5判並製168頁／1700円＋税

長谷川啓三・若島孔文 編

大震災からのこころの回復

リサーチ・シックスとPTG

四六判並製288頁／3400円＋税

山岸明子 著

心理学で文学を読む

困難を乗り越える力を育む

四六判上製208頁／2200円＋税

土屋廣幸 著

性格はどのようにして決まるのか

遺伝子・環境、エピジェネティクス

四六判並製208頁／2100円＋税

D・A・ノーマン 著／岡本明・

安村通晃・伊賀聡一郎・野島久雄 訳

誰のためのデザイン？ 増補・改訂版

認知科学者のデザイン原論

四六判上製520頁／3300円＋税

荻阪直行 編

社会脳シリーズ8 成長し衰退する脳

神経発達学と神経加齢学

四六判上製408頁／4500円＋税

浅川伸一 著

ディープラーニング、 ビッグデータ、機械学習

あるいはその心理学

A5判並製184頁／2400円＋税

楠見孝・道田泰司 編

ワードマップ 批判的思考

21世紀を生きぬくリテラシーの基盤

四六判並製320頁／2600円＋税

船越明子 著

ひきこもり

親の歩みと子どもの変化

四六判並製192頁／1800円＋税

川島亜紀子 著

夫婦げんかと子どものこころ

健康な家族とはなにか

四六判並製152頁／1500円＋税

日本質的心理学会 編

質的心理学研究 第14号

特集 社会的実践と質的研究

B5判並製212頁／2800円＋税



安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ 編

ワードマップ TEA

理論編 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ

実践編 複線径路等至性アプローチを活用する

人間を時間的な変化と文化的社会的文脈のなかで捉えるために開発されたTEA。その理論的背景と基本用語を解説した「理論編」、実際の研究に活かすための勘所がわかる「実践編」の2分冊。

四六判並製200頁／1800円＋税、272頁／2400円＋税

熊谷高幸 著

天才を生んだ孤独な少年期

ダ・ヴィンチからジョブズまで

天才の少年期には共通する「心の癖」があった！ダ・ヴィンチ、ニュートン、エジソン、漱石、アインシュタイン、ジョブズの人生を詳細にたどり、脳科学、発達心理学の知見から新たな見方を提示する天才論。

四六判上製240頁／1900円＋税

青山陽子 著

病いの共同体

ハンセン病療養所における患者文化の生成と変容

療養所での人生を孤独や不幸といった言葉だけで片付けてよいのか？患者たちが集団としての連帯を生み出し、誇りに満ちた文化を形成していったプロセスを丹念に聴き取り、社会学の視点から描く鋭い力作！

A5判上製320頁／3600円＋税

株式会社
新曜社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-9 第一丸三ビル

TEL: 03-3264-4973 (代) FAX: 03-3239-2958

E-mail: info@shin-yo-sha.co.jp URL: http://www.shin-yo-sha.co.jp

(表示価格は本体価格)

臨床ナラティブアプローチ

森岡正芳編著 詳しい解説と多様な事例エピソードで学ぶ。

デイスコースの心理学

鈴木聡志／大橋靖史／能智正博編著 ●質的研究の新たな可能性のために

驚くべき乳幼児の心の世界

ヴァスデヴィ・レディ著 佐伯 胖訳 発達研究、子どもの見方の大転換。

自閉症のある子どもの関係発達

山崎徳子著 ●「育てる―育てられる」という枠組みでの自己感の形成

交流分析にもとづくカウンセリング

倉成宣佳著 ●再決断療法・人格適応論・感情処理法をとおして学ぶ

メンタルヘルスを学ぶ

村井俊哉／森本恵子／石井信子編著 ●精神医学・内科学・心理学の視点から

「子どもという自然」と出会う

浜田寿美男著 ●この時代と発達をめぐる折々の記

【名著復刊】ミネルヴァ・アーカイブズ 2点

発達心理学入門

H・ウエルナー著 園原太郎監修
鯨岡峻／浜田寿美男訳

シンボルの形成

H・ウエルナー／B・カプラン著
柿崎祐一監訳 鯨岡峻／浜田寿美男訳

【近刊】

乳幼児期のことばの発達とその遅れ

小椋たみ子／小山正／水野久美著

子育て支援のための保育カウンセリング

滝口俊子編著

障がいのある子の保育・教育のための実践障がい学

佐藤 暁著

発達

乳幼児期の子どもの発達やそれを支える
営みについて、最新の知見をお届け！

1・4・7・10月各25日発売
B5判各120頁／各号15000円

141 特集

ことばとコミュニケーションの発達

小椋たみ子／岩立志津夫／高橋 登／内田伸子／大井 学ほか執筆

142 特集

子どものための保育をめざして

●新制度を機に、質の向上。について考える

無藤 隆ほか執筆

143 特集

子どものこころの健康

本城秀次／遠藤利彦／菅原ますみ／奥山眞紀子ほか執筆

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1 *表示価格税別 目録呈
TEL 075-581-0296 FAX 075-581-0589 www.minervashobo.co.jp/

ナラティブ・プラクティス

セラピストとして能く生きるということ

高橋規子著・吉川悟編

オリジナリティあふれる研究・論文を発表し続け、
早逝した稀代の臨床家 高橋規子。誠実で、効果の
ある心理療法を追い求めたセラピストの遺した珠
玉の論文集。4,200円、A5並

条件反射制御法

物質使用障害に治療をもたらす必須の技法

平井慎二著

パヴロフの学説を基に、ヒトの条件反射を弱め、
平静な状態を保つ新たな反射を形成することで欲
望そのものをコントロールする技法、条件反射制
御法の理論と実践を詳説する。2,600円、A5並

専門家のための「本を書く！」入門

山内俊介著

本を書きたい、本を書くようによく言われるとい
う専門家の方。この本は、そんな方のために、本
を書くノウハウをまとめたものです。どこから手
をつけるのか、タイトルのコツは、など具体的な
ことばかりをまとめました。1,200円、四六並

関係性の医療学

ナラティブ・ベイス・メディスン論考

斎藤清二著

NBMの概念や理論、医療コミュニケーション、医
療者・患者関係、医療面接、プロフェッショナリ
ズム教育などについて具体的に論考と実践が描か
れた価値ある1冊。3,400円、A5並

ナラティブ・セラピー

社会構成主義の実践

マクナミニー&ガーゲン編／野口裕二・野村直樹訳
新しい心理療法の時代は、家族療法の分野で始まっ
た。待望の声がありながら版が止まっていたもの
を一部訳文の再検討をし復刊。今なお色あせない、
一番新しい心理療法の原典。2,400円、四六並

DVDでわかる

家族面接のコツ③P循環・N循環編

東 豊著

初回と2回めの面接を収録したDVDと、書籍に
はケースの逐語、東豊と黒沢幸子、森俊夫による
ブリーフ的、システム論的解説を収録。家族面接
DVDシリーズの第3弾。6,600円、A5並

ナラティブ・メディスン入門

小森 康永著

本書は、シャロンの『ナラティブ・メディスン』
をもとに、精密読解、パラレルチャート、アウト
サイダー・ウィットネスなどの方法論を具体例を
交え分かりやすく解説。また、日本における著者
らの刺激的な試みも紹介した。2,500円、四六並

協働するナラティブ

ゲーリシャンとアンダーソンによる論文「言語システ
ムとしてのヒューマンシステム」

H・アンダーソン／H・ゲーリシャン／

野村直樹 著／野村直樹 訳

現在の心理療法に絶大な影響を与える論文の全訳と、ゲ
ーリシャンのアイデアの核心を探る。1,800円、四六並

臨床心理検査バッテリーの実際

高橋依子・津川律子編著

乳幼児期から高齢期まで発達に沿った適切なテス
トバッテリーの考え方・組み方を多彩な事例を挙
げて解説。質問紙、投映法など多種多様な心理検
査を網羅し、フィードバックの考え方と実際も詳
しく述べる。2,800円、A5並

N:ナラティブとケア

第6号

野口裕二編 特集：ナラティブの臨床社会学

新しい価値観を創出する
実践家たちのための雑誌

B5判,110頁
定価1,800円(+税)

年1回
(1月発行)

子どもの心と 学校臨床

A5判,140頁 定価1,400円(+税)

SC、教師・養護教諭らの
ための学校臨床の専門誌

年2回(2.8月発行)

村山正治編

最新第13号 特集：

学校コミュニティと

学校トラウマへの支援

心と社会の
学術出版

tomishobo
遠見書房

〒181-0002 東京都三鷹市牟礼6-24-12
三鷹ナショナルコート 004
TEL 050-3735-8185/FAX 050-3488-3894
http://tomishobo.com tomi@tomishobo.com

小社メールマガジンの購読をご希望の方は、
mailmagazine@tomishobo.comへ空メールをお送りください
全国の主要書店で販売しております。

人間科学研究法 ハンドブック〔第2版〕

高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一 編著
人間科学全般にわたる実証研究の方法論と技法を網羅。
2000円

協同学習入門

杉江修治 著 ◎基本の理解と51の工夫
形ばかりの「活発な授業」に陥らない、
真の効果を生み出すための理論と方
法を具体的に紹介。
1800円

看護に活かす心理尺度

久田 満・北 素子・谷口千絵 著
◎その選び方・使い方
様々な尺度を有効に使い、実践や研究
に活かすためのノウハウ。
1800円

あなたへの

社会構成主義

ケネス・J・ガーゲン 著／東村知子 訳
社会構成主義の重鎮ガーゲンによる、
平易で格好の入門書。
3500円

エノメンドロージへの招待

フランシス・ヘスター 著／中河伸俊 他 訳
◎言語・社会・相互行為
その考え方や方法を分かりやすく解
説する画期的入門書。
3000円

PAC分析実法入門

内藤哲雄 著〔改訂版〕
◎「個」を科学する新技法への招待
特定個人の個別事例を質的・記述的
に分析する方法を解説。
1800円

コミュニケーション研究法

末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子 編著
研究倫理などの心構えから、フィール
ドワークや実験法、質問紙法、統計まで、
多彩な研究手法を解説。
3200円

子ども理解のメソッドロジ

中坪史典 編 ◎実践者のための「質的
実践研究」アイディアブック
エピソード記述やKJ法など、子ども
観察の手法を事例で紹介。
2000円

ラディカル質的心理学

イアン・パーカー 著／ハツ塚一郎 訳
◎アクシオンリサーチ入門
基本原理から論文作成まで、質的研
究の理論と方法を詳説。
2800円

社会構成主義の

理論と実践

K.J. ガーゲン 著
◎関係性が現実をつくる
社会構成主義アプローチのバイブル
たる大著、ついに翻訳。
5800円

グラウンデッド・セオリー

の構築
キャシー・シャーマズ 著
抱井・末田 監訳
◎社会構成主義からの挑戦
社会構成主義版グラウンデッド・セ
オリーを生き生きと解説。
2900円

社会調査のための

計量テキスト分析

樋口耕一 著
◎内容分析の継承と発展を目指して
データ分析フリーソフトE-Coderの
開発者による解説と事例。
2800円

日本質的心理学会第12回大会準備・実行委員会

大会準備・実行委員長
香曾我部琢（宮城教育大学）

大会準備・実行委員（順不同）
藤田清澄（盛岡大学）
日高友郎（福島県立医科大学）
勝浦真仁（桜花学園大学）
中坪史典（広島大学）
松本大（弘前大学）
滝口克典（ぷらっとほーむ）
川島大輔（中京大学）
平澤一郎（長岡こども・医療・介護専門学校）

広告・展示
QSR
北大路書房
ナカニシヤ出版
誠信書房
ミネルヴァ書房
遠見書房

日本質的心理学会第12回大会プログラム抄録集

発行日 2015年10月3日

発行者：日本質的心理学会第12回大会準備・実行委員会

大会事務局：宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉149番地 宮城教育大学 香曾我部研究室